

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第11輯

都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う

軽部池西遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1987

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第11輯

都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う

かる べ いけ にし
軽部池西遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1987

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



序 文

「軽部池西遺跡」は、岸和田市今木町地内に所在する、縄文時代から弥生時代、古墳時代を経て、古代・中世・近世へと至る複合遺跡である。

今般の調査は、大阪府教育委員会の手による、昭和58年度の分布調査の結果ならびに昭和59年度の試掘調査の結果をふまえて実施された、府道磯之上山直線の建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。

調査の結果、各時代にわたるさまざまな知見を得ることができたが、その中の主なものとして、縄文時代後～晩期の生活痕跡の確認や、弥生時代中～後期における竪穴住居址や土壇群ならびに自然流路の確認、そして、条里制の問題とも関連しての、中世小溝群の検出などをあげることができる。

当地は、近隣に、高地性集落として有名な弥生時代の観音寺山遺跡や古墳時代前期に属すると思われる国指定史跡摩湯山古墳、そのほか、天平18年（746A. D.）に勅命を得て編纂せられた「法隆寺伽藍縁起並流記資財帳」にゆかりのある「軽部池」を擁しており、その点、これら遺跡群の周辺古環境（地理的・歴史的環境）を具体的に補う資料としても、今回の発掘調査成果は、きわめて重要な意味をもつと言える。

以下にその報告をのべることにするが、その前に、今回の発掘調査を実施するにあたり、終始、快く御協力・御支援下さいました、大阪府教育委員会、大阪府岸和田土木事務所、その他、地元自治会・水利組合等、関係者各位に対し、心からの謝意を表すものであります。

昭和62年3月31日

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野 素雄

例 言

1. 本書は、都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う、岸和田市今木町所在「軽部池西遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部の委託をうけて、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導を得て、実施したものである。
3. 調査は、大阪府埋蔵文化財協会調査課技師久米雅雄・小山田宏一・岡本武司が担当し、現地における調査は昭和60年10月28日から翌昭和61年3月15日までの期間、そして報告書作成のための内業整理作業は、昭和61年度事業として泉大津市旭町所在の調査事務所にて、これを実施した。
4. 軽部池西遺跡の発掘調査に伴う、機械掘削等請負工事については、(株)浅沼組が、他方、空中写真撮影およびその図化に関しては、(株)写測エンジニアリングが、これを施工した。
5. 本書遺構図中の方位は、国土座標第VI系の座標北であり、また、標高は T. P. で標示している。
6. また、本書中で使用されている遺構記号は、後述する如く(第3章第1節)、協会の発掘調査規定に基づいている。
7. 他方、土色については担当者の主観的表現を極力さけるため、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」によって、これを明示した。
8. 調査によって検出された遺構の保存については、大阪府教育委員会、大阪府岸和田土木事務所、大阪府埋蔵文化財協会の三者の協議に基づき、A-4区東半部の現代攪乱面およびB区東半部、C区の礫層堆積層以外の全域について、海砂養生をした。
9. また、軽部池西遺跡の発掘調査に伴う出土資料ならびに写真・スライド類は、すべて資料係において保管されているので、今後、研究ならびに啓蒙に十分、活用していただきたい。
10. なお、各章の執筆分担は、目次に記した通りであり、また実測やトレイス、図版作成には、渡辺恭子、田中利恵、谷内睦子、高橋由利子、櫛田とみ子らがこれに参加した。また、全般的な編集は、各担当技師の方式と意向を尊重しながら、久米がおこなった。

本文目次

第1章 調査に至る経過	(久米)	1
第2章 軽部池西遺跡の位置と環境		
第1節 地理的環境	(岡本)	2
第2節 歴史的環境	(久米)	5
第3章 調査成果		
第1節 地区割および基本層序	(小山田)	11
第2節 調査区各説		
I. A地区の調査		
1) A-1区の遺構と遺物	(岡本)	13
2) A-2区の遺構と遺物	(岡本)	36
3) A-3区の遺構と遺物	(久米)	42
4) A-4区の遺構と遺物	(久米)	71
II. B地区の調査		
5) B区の遺構と遺物	(小山田・岡本)	106
III. C地区の調査		
6) C区の遺構と遺物	(小山田)	137
第4章 ま と め	(久米)	154
付 章 花粉分析・珪藻分析結果報告		160

表 目 次

表 1 A-1区ピット一覧(1)	20
表 2 A-1区ピット一覧(2)	21
表 3 B区ピット一覧(1)	132
表 4 B区ピット一覧(2)	133
表 5 検出された花粉化石の種類の一覧表	161
表 6 検出された珪藻化石の種類の一覧表	163
表 7 軽部池西遺跡の古植生・堆積環境	166
表 8 軽部池西遺跡と三田遺跡における花粉帯の関係	168

挿 図 目 次

第 1 図	調査区周辺地形図	3～ 4
第 2 図	周辺遺跡地図 (I)	6
第 3 図	周辺遺跡地図 (II)	7
第 4 図	調査区略図	10
第 5 図	地区割および基本土層図	12
第 6 図	A-1 区 北壁断面図	13
第 7 図	A-1 区 第 4 層出土石斧実測図	14
第 8 図	A-1 区 弥生時代遺構平面図	15～ 16
第 9 図	A-1 区 第 3 層出土土器	14
第 10 図	A-1 区 207-OP 遺物出土状況	18
第 11 図	A-1 区 117-OD 平・断面図	19
第 12 図	A-1 区 191・207-OP 出土土器	18
第 13 図	A-1 区 240-OX 遺物出土状況	23～ 24
第 14 図	A-1 区 240-OX 断面図	22
第 15 図	A-1 区 240-OX 出土土器	25
第 16 図	A-1 区 211-OO 平・断面図	26
第 17 図	A-1 区 212-OO 平・断面図	26
第 18 図	A-1 区 230-OS 断面図	28
第 19 図	A-1 区 231-OS 断面図	28
第 20 図	A-1 区 第 1・2 層出土土器 (1～ 5 : 第 1 層、6～ 42 : 第 2 層)	29
第 21 図	A-1 区 第 2 層出土土器	30
第 22 図	A-1 区 中世遺構 (第 3 層上面) 平面図	31
第 23 図	A-1 区 第 3 層上面小溝群出土土器	32
第 24 図	A-1 区 第 2 層上面小溝群出土土器	33
第 25 図	A-1 区 中世遺構 (第 2 層上面) 平面図	33
第 26 図	A-1 区 と昭和 59 年度府教委調査区	35
第 27 図	A-2 区 北壁断面図	36
第 28 図	A-2 区 遺構平面図	37～ 38

第29図	A-2区	290-OO 遺物出土状況	39
第30図	A-2区	290・299・303-OO 出土土器	40
第31図	A-2区	303-OO 断面図	40
第32図	A-3区	西壁・北壁断面図	43~ 44
第33図	A-3区	包含層・砂礫層内出土土器	47
第34図	A-3区	335-OR・自然流路断面図	49~ 50
第35図	A-3・4区	335-OR・砂礫層・611-OO 内出土土器拓影ほか	51
第36図	A-3・4区	335-OR・遺構面直上・砂礫層内出土石器および石製品	52
第37図	A-3区	370-OX 平・断面図	54
第38図	A-3区	371・372-OX 平・断面図	55
第39図	A-3区	372-OX 断面図	56
第40図	A-3区	373-OX 平・断面図	57
第41図	A-3区	遺構面直上・土壌内出土土器	58
第42図	A-3区	375-OX 平・断面図	59
第43図	A-3区	376-OX 平面図	60
第44図	A-3区	378-OX 東壁断面図	60
第45図	A-3区	328-OO 平・断面図	62
第46図	A-3区	309・310-OO 平・断面図	62
第47図	A-3区	311・312-OO 平・断面図	63
第48図	A-3区	313-OO 平・断面図	63
第49図	A-3区	318-OO 平・断面図	64
第50図	A-3区	329-OO 平・断面図	64
第51図	A-3区	330・331-OO 平・断面図	65
第52図	A-3区	333-OS 平・断面図	66
第53図	A-3区	345-OB 平・断面図	67
第54図	A-3区	314-OO 平・断面図	68
第55図	A-3区	315-OO 平・断面図	69
第56図	A-4区	包含層・砂礫層内出土土器	71
第57図	A-4区	335-OR・611-OO 断面図	73~ 74
第58図	A-4区	遺構面直上出土土器	75

第59図	A-4区	585~587-OO平・断面図	79
第60図	A-4区	588-OO平・断面図	80
第61図	A-4区	589-OO平・断面図	80
第62図	A-4区	594~599-OO平・断面図	81
第63図	A-4区	590-OO平・断面図	82
第64図	A-4区	591-OO平・断面図	82
第65図	A-4区	598-OO平・断面図	83
第66図	A-4区	土壇内出土土器	84
第67図	A-4区	599・600-OO平・断面図	85
第68図	A-4区	606-OO平・断面図	86
第69図	A-4区	592・593-OO平・断面図	89
第70図	A-4区	602-OO平・断面図	90
第71図	A-4区	605-OO平・断面図	91
第72図	A-4区	611-OO内出土土器	94
第73図	A-4区	611-OO内出土土器	96
第74図	A-4区	611-OO内出土土器	97
第75図	A-4区	611-OO内出土土器拓影	100
第76図	A-4区	611-OO内出土土器	101
第77図	A-4区	611・598-OO内出土土器および石製品	102
第78図	B区	黄色粘土・明緑灰色細礫混じり粘土7層出土土器	106
第79図	B区	北壁断面図・589-OR平面図	107~108
第80図	B区	589-OR・出土土器(1)	110
第81図	B区	589-OR・出土土器(2)	111
第82図	B区	589-OR・出土土器(3)	112
第83図	B区	589-OR・出土土器(4)	114
第84図	B区	546-OS・断面図(A-A')	116
第85図	B区	544・545-OS平面図	117~118
第86図	B区	546-OS平面図	119
第87図	B区	546-OS出土土器	120
第88図	B区	547-OS平面図	123~124

第 89 図	B 区	547-OS 断面図 (A-A')	125
第 90 図	B 区	547-OS 出土土器(1)	126
第 91 図	B 区	547-OS 出土土器(2)	127
第 92 図	B 区	西半部遺構平面図	129~130
第 93 図	B 区	510-OB 平・断面図	131
第 94 図	C 区	西壁断面図	137
第 95 図	C 区	黄色粘土 I~III 層出土土器	138
第 96 図	C 区	黄色粘土 I 層出土石器	139
第 97 図	C 区	縄文時代後期土層分布図	139
第 98 図	C 区	400-OO 平・断面図	140
第 99 図	C 区	387-OX 平・断面図	141
第 100 図	C 区	遺構平面図(1)	143~144
第 101 図	C 区	411-OR・412-OS 断面図	145~146
第 102 図	C 区	411-OR 出土土器	147
第 103 図	C 区	遺構平面図(2)	149~150
第 104 図	C 区	380-OO 出土石器	148
第 105 図	C 区	379・383-OO 出土土器他	151

付 図 目 次

第 106 図	A-1・2 区	遺構空測平面図
第 107 図	A-3・4 区	遺構空測平面図
第 108 図	B 区 (上層)	遺構空測平面図
第 109 図	B 区 (下層)	遺構空測平面図
第 110 図	C 区	遺構空測平面図 (I)
第 111 図	C 区	遺構空測平面図 (II)

図版目次

- 図版 1 軽部池西遺跡調査区垂直写真
- 図版 2 A₁・A₂・A₃ 区垂直写真
- 図版 3 A₄・B (上層) 区垂直写真
- 図版 4 A₄・B (下層) 区垂直写真
- 図版 5 C 区垂直写真
- 図版 6 軽部池西遺跡遠景
- 図版 7 上 A-1・2 区 空中写真
下 A-3 区 空中写真
- 図版 8 上 A-4・B・C 区 空中写真
下 A-4・B・C 区 空中写真
- 図版 9 上 A-1 区 弥生時代遺構面全景
下 A-1 区 弥生時代遺構面全景 (西から)
- 図版 10 上 A-1 区 117-OD 全景 (西から)
下 A-1 区 南西隅ピット群 (西から)
- 図版 11 上 A-1 区 211・212-OO (東から)
下 A-1 区 227・228-OO (北から)
- 図版 12 上 A-1 区 240-OX 遺物出土状況 (西から)
下 A-1 区 240-OX 遺物出土状況 (西から)
- 図版 13 上 A-1 区 240-OX 遺物出土状況
下 A-1 区 240-OX 遺物出土状況
- 図版 14 上 A-1 区 中世遺構 (第 3 層上面) 全景 (西から)
A-1 区 中世遺構 (第 2 層上面) 全景 (西から)
- 図版 15 上 A-2 区 全景 (西から)
下 A-2 区 303-OO (南から)
- 図版 16 上 A-2 区 290-OO (西から)
下 A-2 区 290-OO 遺物出土状況
- 図版 17 上 A-1～3 区 調査区付近 (東から)
下 A-3 区 調査区付近 (東から)

- 図版18上 A-3区 砂礫層掘削状況
 下 A-3区 遺構検出状況
- 図版19上 A-3区 335-OR・ピット検出状況
 下 A-3区 335-OR・土壌検出状況
- 図版20上 A-3区 335-OR内セクションA東壁断面
 下 A-3区 335-OR内流木出土状況
- 図版21上 A-3区 335-OR内セクションB西壁断面
 下 A-3区 335-OR内セクションC西壁断面
- 図版22上 A-3区 370-OX付近
 下 A-3区 371・372-OX付近
- 図版23上 A-3区 372-OX
 下 A-3区 373-OX付近
- 図版24上 A-3区 374-OX付近
 下 A-3区 375-OX付近
- 図版25上 A-3区 327~331-OO
 下 A-3区 311・312-OO
- 図版26上 A-3区 309~314-OO・345-OB
 A-3区3 11~313-OO・345-OB
- 図版27上 A-3区 309・313・314-OO
 下 A-3区 検出遺構全景
- 図版28上 A-4区 西端土壌群(585~589-OO)
 下 A-4区 585~587-OO付近
- 図版29上 A-4区 585~587-OO
 下 A-4区 585~588-OO付近
- 図版30上 A-4区 594~597・603・604-OO付近
 下 A-4区 599・600-OO付近
- 図版31上 A-4区 598-OO
 下 A-4区 602-OO
- 図版32上 A-4区 598-OO
 下 A-4区 598-OO

- 図版33上 A-4区 東端遺構検出状況
下 A-4区 611-OO 検出状況
- 図版34上 A-4区 611-OO 内部分掘削
下 A-4区 611-OO 周辺土壌群掘削状況
- 図版35上 A-4区 611-OO 内南北セクション東壁断面
下 A-4区 611-OO 内掘削状況
- 図版36上 A-4区 611-OO 内粘土運搬用軌道敷
下 A-4区 621-OB 柱痕検出状況
- 図版37上 A-4区 西南端砂礫層掘削状況
下 A-4区 西端砂礫層掘削状況
- 図版38上 A-4区 西端335-OR 検出状況
下 A-4区 南端335-OR 南壁断面
- 図版39上 A-4区 335-OR 検出状況
下 A-4区 335-OR 検出状況
- 図版40上 A-4区 335-OR 西端部
A-4区 335-OR 南端部
- 図版41上 A-4区 検出遺構全景
下 A-4区 東半部検出遺構およびB・C区
- 図版42上 B区 北壁断面
下 B区 589-OR 全景（東より）
- 図版43上 B区 589-OR 全景（西より）
B区 589-OR 右岸付近
- 図版44上 B区 589-OR 河床
下 B区 589-OR 断面
- 図版45上 B区 遺構面全景（東より）
下 B区 中央部遺構空中写真
- 図版46上 B区 546-OS 全景（北より）
下 B区 546-OS 断面
- 図版47上 B区 546-OS 遺物出土状況
下 B区 546-OS 遺物出土状況

- 図版48上 B区 547-OS 全景 (南より)
下 B区 544・545-OS 全景 (北より)
- 図版49上 B区 西部遺構空中写真
下 B区 511-OB・ピット群 (南より)
- 図版50上 B区 511-OB 全景 (南より)
下 B区 柵列
- 図版51上 B区 中央部土壌
下 B区 西部土壌
- 図版52上 C区 西壁断面
下 C区 縄文時代後期面全景 (西より)
- 図版53上 C区 400-OO 検出状況
下 C区 400-OO 全景
- 図版54上 C区 394-OX 断面
下 C区 387-OX 全景
- 図版55上 C区 黄色粘土 I 層石棒出土状況
下 C区 黄色粘土 I 層縄文土器出土状況
- 図版56上 C区 411-OR 全景 (西より)
下 C区 412-OR 全景 (西南より)
- 図版57上 A-1区 第4層出土石斧未製品
下 A-1区 240-OX 出土土器
- 図版58上 A-1区 240-OX・207-OP 出土土器
下 A-1区 中世小溝群出土土器
- 図版59上 A-1区 第1・2層出土土器
下 A-1区 第2層出土土器
- 図版60上 A-1区 第2層出土土器
下 A-1区 第2・3層出土土器
- 図版61上 A-2区 303-OO 出土土器
下 A-2区 290・299-OO 出土土器
- 図版62上 A-3区 包含層・砂礫層内出土土器
下 A-3区 包含層内出土土器

- 図版63上 A-3区 遺構面直上・土壌内出土土器
下 A-3・4区 335-OR・砂礫層内出土土器
- 図版64上 A-4区 包含層内出土土器
下 A-4区 砂礫層内・遺構面直上出土土器
- 図版65上 A-4区 砂礫層内・遺構面直上出土土器
下 A-4区 土壌内出土土器
- 図版66上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版67上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版68上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版69上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版70上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版71上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版72上 A-4区 611-OO内出土土器
下 A-4区 611-OO内出土土器
- 図版73上 A-3・4区 砂礫層内・遺構面直上・335-OR内出土石器
下 A-4区 611-OO内出土石器
- 図版74 A-4区 砂礫層内・遺構面直上・土壌内出土石器および石製品
- 図版75 B区 6層・7層・589-OR出土土器
- 図版76 B区 589-OR 3層出土土器
- 図版77 B区 589-OR 3層出土土器
- 図版78 B区 589-OR 3層・1～2層出土土器
- 図版79上 B区 589-OR 1～2層出土土器
下 B区 546-OS出土土器
- 図版80 B区 546・547-OS出土土器

- 図版81 B区 547-OS 出土土器
- 図版82上 B区 547-OS 出土土器
- 下 C区 黄色粘土 I ~ III層出土土器
- 図版83 C区 411-OR・300-OO・黄色粘土 I 層出土石器
- 図版84上 C区 379・383-OO 出土土器
- 下 C区 379-OO 出土「甚衛唐鋤」
- (上段) B・C区 縄文土器細部
- (下段) a : 巻貝条痕調整
- b : ナデ調整
- 図版85 B・C区 縄文土器細部
- 図版86 花粉化石顕微鏡写真 (I)
- 図版87 花粉化石顕微鏡写真 (II)
- 図版88 珪藻化石顕微鏡写真

第1章 調査に至る経過

軽部池西遺跡は、岸和田市今木町地内に所在する、新規発見の遺跡のひとつである（図版1）。昭和52年3月に、大阪府教育委員会は「大阪府文化財分布図」および「大阪府文化財地名表」を公刊したが、このおりに、近隣の箕土路遺跡や今木廃寺跡については一定程度周知されていたものの、軽部池西遺跡については、その存在は未だ知られておらず、上記の刊行物の中にその名称や摘要は全く記されていなかった。

今般、大阪府教育委員会によって、「大阪府文化財分布図」の改定版（1986年3月）が出版されるに及んで、その内容はここ10年間の変容にひととおり、対応できるものとなったが、抑々、軽部池西遺跡が、埋蔵文化財包蔵地として知られてくるようになるのは、大阪府土木部道路課が、新空港関連道路である磯之上山直線の路線内における、文化財の分布調査を要請し、それをうけて府教委文化財保護課が調査を実施した昭和58年秋以降のことである。詳細は、報文「府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」（「三田遺跡試掘調査概要」付章 大阪府教育委員会 1985年参照）に委ねるが、結果的には、周知の箕土路遺跡等を含めて、山ノ内遺跡、山直北遺跡、三田遺跡、水込遺跡、黒石遺跡、山直中遺跡、中の社遺跡、宮の後遺跡など合計16ヶ所の遺跡が発見されるに至っている。そして、こと軽部池西遺跡の分布調査の結果については、「現状は軽部池に灌漑を受けている水田地帯で、古墳時代の須恵器、中世の瓦器などが採取されている。付近一帯には明瞭に条里制地割と千鳥式の坪の呼称が残る。No14地区の甘池では渇水状態時に遺物の散布が認められる」という聞きとりが得られている」と報告されている。

さて、この分布調査の結果をうけて、昭和58年度と59年度との2ヶ年にわたって軽部池西遺跡の試掘調査が実施されることになるのであるが、昭和59年度の試掘調査の結果については、「軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II」（大阪府教育委員会 1985年）に詳しい。それによれば、試掘調査は路線内擁壁部分において、両側に幅3mのトレンチを開削する方法によって実施され、発掘調査の結果、縄文時代後期前半の遺物や、弥生時代中期後半の土壇状遺構・溝状遺構、弥生時代後期後半に所属すると考えられる竪穴住居址や溝状遺構、加えて古墳時代の溝状遺構、そして鎌倉時代のスキミゾなどが、多数の共伴遺物とともに検出された事が報告されている。

昭和60年度における軽部池西遺跡の全面調査は、叙上の分布調査・試掘調査の結果をうけて実施されたものであるが、調査報告にはいるまえに、先ず、軽部池西遺跡の地理的環境ならびに歴史的環境について、簡単にふれておきたいと思う。（久米）

第2章 軽部池西遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

軽部池西遺跡の大半は、大阪府の南西部である岸和田市今木町に所在し、一部は、和泉市小田町にまたがる。今回の調査区は、その前者に位置する。

和泉地方は、和泉山脈から派生する丘陵とその前縁に広がる洪積段丘、及び主に海浜部に広がる沖積平野によって構成される。丘陵は、北方あるいは北西方向に伸びるもので、各丘陵間には、狭い谷が奥深くまで入り込み、その中を和泉山脈から大阪湾にそそぎ込む河川が流れている。洪積段丘はそれらの谷部にも広がるが、主には、丘陵の前縁部に大きく広がり、丘陵部と合わせて和泉地方の地形の大半を占めている。洪積段丘は、高位、中位、低位の3種に分類できる。和泉地方においては、和泉市信太山付近と岸和田市の久米田池の西方から南方、泉佐野市見出川左岸が、わずかに高位段丘を呈する。中位段丘は、岸和田、貝塚、泉佐野、樽井付近と槇尾川中流沿いに主として広がり、低位段丘は、大津川、佐野川、樫井川沿いに主として広がりを見せている。沖積平野は、北東から南西方向に伸びる大阪湾沿岸に主に広がり、その他に各河川の沿岸部にも見られるが、ごく僅かであり、和泉地方におけるその占有面積は比較的狭い⁽¹⁾。本遺跡は、地形図によると、一般に東山丘陵と呼ばれる丘陵の前縁部で、標高約20m～24mを測る地域に立地している。周辺は、良好に条里地割を遺存する水田地帯である。東山丘陵は、松尾川と牛滝川に挟まれた丘陵で、その先端部には摩湯山古墳を頂く。その前縁部は、現在の地形分類図によると低位段丘となっている微高地で、舌状に北西方向に伸び、松尾川と牛滝川が合流する付近でとどまっている。第1図を見るとこの微高地は、松尾川左岸の舌状微高地と牛滝川右岸の舌状微高地との二手に分かれて伸びている。その間が、山ノ内遺跡が所在する付近にまで入り込む浅い谷状地形を呈しており、本遺跡の名称の由来となる軽部池などは、この谷状地形を利用して築造されたものと思われる。また、舌状微高地の先端部に位置し、本遺跡に隣接する今木遺跡の調査⁽²⁾においては、洪積段丘面が確認されているが、本遺跡の調査においては、前年度の府教委の調査⁽³⁾も含めて確認されていない。以上のようなことから本遺跡は、この牛滝川側の微高地上から谷状地形部にかけて立地しており、今回の調査区は、この舌状微高地の縁辺部で、谷状地形部に近い位置に立地しているものと考えられる。

（註）

- (1) 1986年 岸和田地域の地質 地質調査所
- (2) 1985年 今木廃寺跡発掘調査概要 大阪府教育委員会
- (3) 1985年 軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II 大阪府教育委員会

第2節 歴史的環境

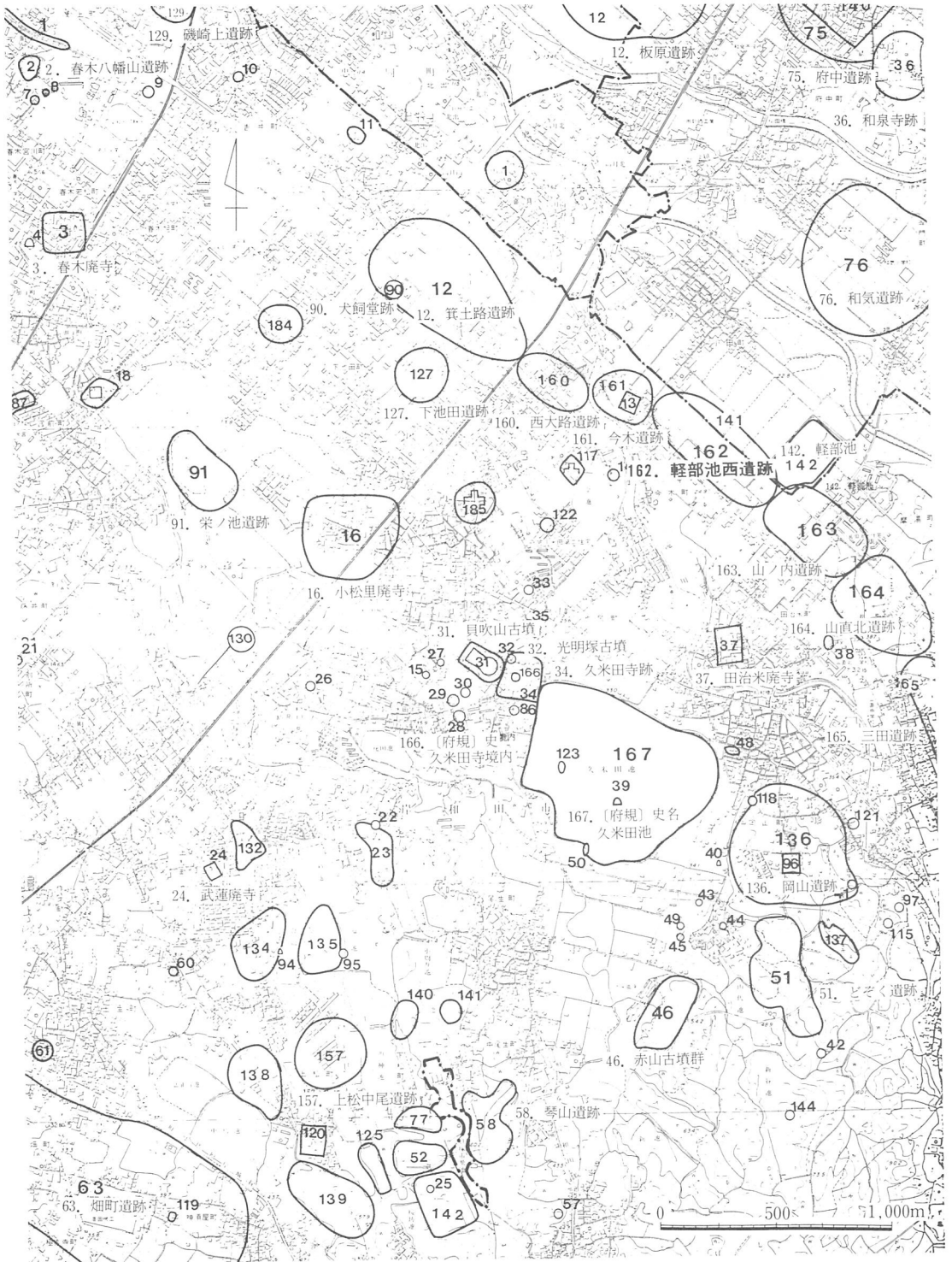
昭和60年3月に改訂された「大阪府文化財分布図」(第2・3図)には、先ほども少しふれたように、周知の遺跡としての「軽部池西遺跡」が登録・掲載されている。その範囲は第2図に示したように、厳密に言えば岸和田市域と和泉市域とにまたがっている(図版6)が、先ず今回の調査と関連の深い岸和田市域の歴史的環境から、近年の調査成果をもふまえて展望しておきたい。

先ず岸和田市域における縄文時代であるが、代表的な遺跡としては、春木八幡山遺跡や箕土路遺跡、琴山遺跡や西山遺跡、そして葛城山頂遺跡などが、よく知られている。ことに春木八幡山遺跡は、昭和31年(1956)の児童公園造成工事の際、また昭和36年(1961)の発掘調査において、縄文遺構の検出はみられなかったものの、縄文時代中期末から、後期～晩期にかけての土器類を大量に出土した遺跡として重要であり、そこから出土した「元住吉山式」、「中津・福田K式」、「宮滝式」、「船橋式」などの各種縄文土器は、今後の府下の縄文時代の実態を探る上でも、きわめて貴重な資料のひとつであるといえることができる。

弥生時代の遺跡としては、上述の春木八幡山遺跡や箕土路遺跡のほかに、昭和31年(1956)に調査されて、弥生時代中～後期の竪穴住居址約20棟や溝、井戸、自然流水路、ヒョウタンを伴う土壘、ピット群などの検出をみた下池田遺跡、また昭和52年(1977)に新規発見されて、その後、弥生時代中～後期の竪穴住居址や方形周溝墓を検出した栄の池遺跡、昭和53年(1978)に竪穴住居址4棟や推定高床倉庫址を検出し、「準高地性集落」のひとつと考えられているどぞく遺跡、更に岸和田市内では目下最大と考えられており、昭和50年(1975)前後から徐々にその実態が明白になりつつある、そして今までに弥生時代の竪穴住居址や方形周溝墓、溝やピットの検出で注目されている畑遺跡、その他に、上松中尾遺跡、土生遺跡などを挙げる事ができる。

古墳時代の遺跡としては、昭和31年(1956)に国の史跡に指定された摩湯山古墳(1932年刊行の「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告」第3輯の中に、梅原末治氏による詳細な報告がある)をはじめとして、その陪塚と考えられている馬子塚古墳、また貝吹山古墳を中心とした久米田古墳群、その他東山古墳、三田古墳、儀平山古墳、赤山古墳群などがよく知られている。また関連の集落としては、磯之上遺跡や土生遺跡などが注目されている。

奈良時代以降の遺跡としては、従来、小松里廃寺や春木廃寺、今木廃寺、犬飼堂廃寺(ロストル式平窯を有す)、武蓮廃寺、天神山廃寺など、主に寺院址関係の遺跡に注意がそそが



第2図 周辺遺跡地図 (I)

れてきたが（たとえば、昭和60年度の小松里廃寺の調査では、須恵器の坏、坏蓋、埴、甕の他、沢山の屋瓦、殊に12葉単弁蓮華文軒丸瓦、羽釜などが検出されている）、同時代の集落としての、畑遺跡や栄の池遺跡の実態も、地道な調査の蓄積によって、明瞭になりつつある。

他方、中世の遺跡としては、福田城跡、稲葉城跡、落合城跡、檜ヶ谷城跡などの城跡と、勝福寺跡、転法輪寺跡などの寺院跡とが周知されているが、その実態は必ずしも明確ではない。今後、その実態が解明されることがのぞまれる。以上が、岸和田市域における軽部池西遺跡の遺跡環境である。

なお、その他に岸和田市域に近接する、和泉市域、泉大津市域でも、近年、発掘調査の進展に伴って新知見が増大しつつあるので、その点についても、若干、補足しておきたい。たとえば両市における縄文時代に関して言えば、先ず、泉大津市板原遺跡における従来「地山」であると考えられていた黄褐色土層下での縄文時代後期の遺構（土壇・ピット・流路など）や遺物（中津・福田 K II 式）の検出、豊中遺跡における縄文晩期の溝状遺構やピットの検出、虫取遺跡における縄文晩期土器と弥生時代前期土器共伴関係の確認、和泉市万町北遺跡における縄文時代のピット、土壇、埋甕の検出（第3次調査）ならびに甕棺墓の検出（第5次調査）、そして同市仏並遺跡における、縄文時代後期前半に属する土製仮面の発見など、めざましいほどの成果を挙げることができる。

弥生時代については、泉大津市池浦遺跡において、V字溝を伴う弥生時代前期中段階の集落が検出されたり、穴師小学校校庭遺跡で中期の壺棺が、また古池遺跡からは有鉤銅釧などが検出されている。和泉市では、有名な池上遺跡が、継続的に調査されて多大の成果を挙げているが、その他に、昭和59年度の万町北遺跡の第2次調査における、弥生時代中期の竪穴住居址5棟と「廃絶後の埋土に大量のV様式土器の破片」を伴う後期竪穴住居址1棟の検出、また、同市和気遺跡における弥生時代中期（III～IV様式）の竪穴住居址、土壇墓群、水田址の一括発見などがあり、近隣の弥生時代後期の代表的な高地性集落である観音寺山遺跡との関連において、きわめて重要な内容を有つ遺跡である。

古墳時代に関していえば、和泉市には「景初三年鏡」で有名な黄金塚古墳や丸笠古墳、貝吹山古墳、信太千塚などが存在しているが、その時期に並行する集落の実態も徐々に明白になりつつある。たとえば万町北遺跡では古墳時代の竪穴住居址（方形もしくは長方形のプラン）8棟や区画溝、それに6世紀末から7世紀にかけての掘立柱建物跡などが検出されているが、昭和60年3月刊行の「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ」の中では、万町北

遺跡の古墳時代の集落と明神原古墳(B-14)との関連などが指摘されている。泉大津市域でも古墳時代の集落として、豊中遺跡、古池遺跡、七ノ坪遺跡、東雲遺跡などの実相が具体的に把握されつつある。

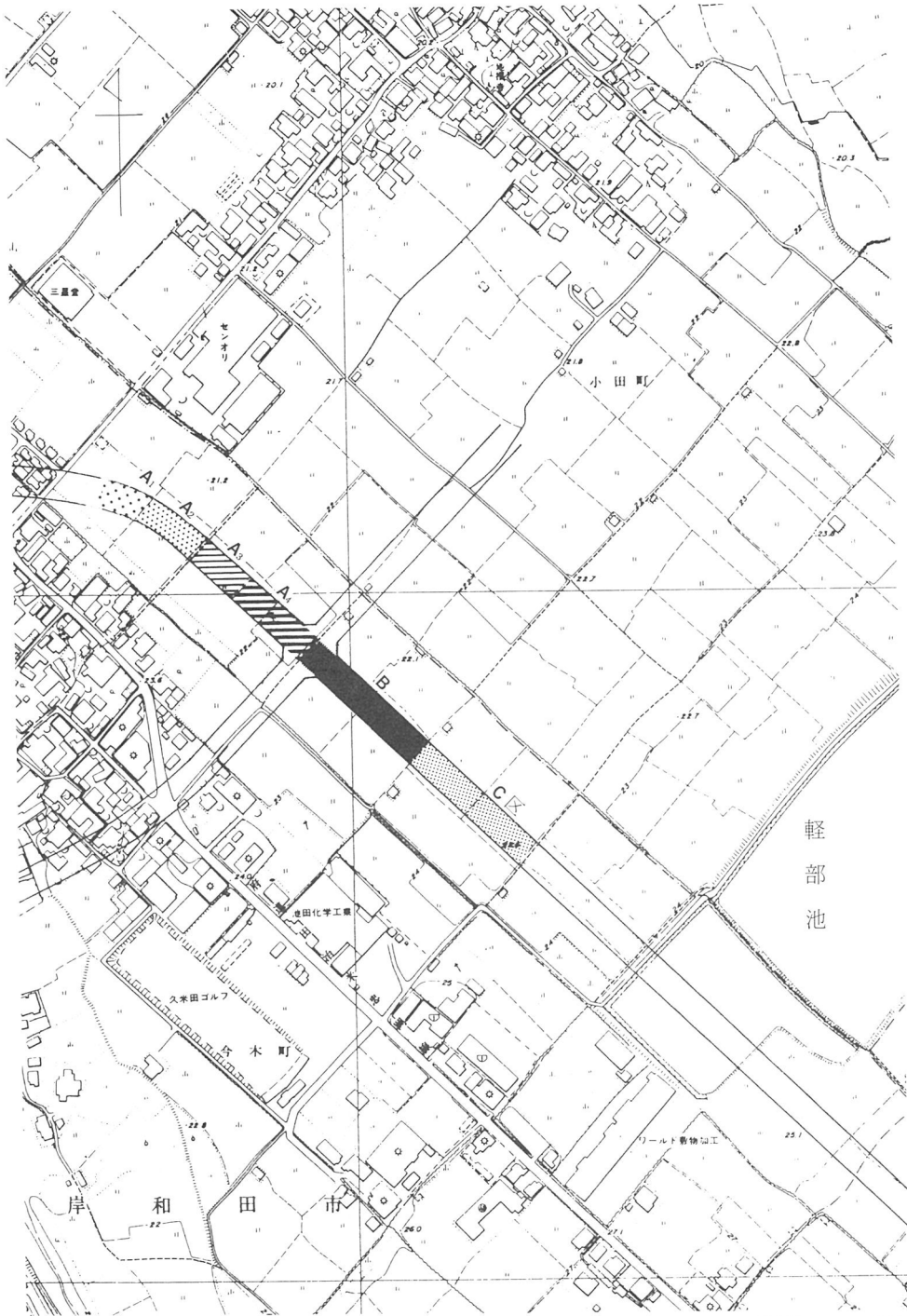
続く、飛鳥、白鳳、奈良、平安時代以後の遺跡環境については、先ず、泉大津市域に関していえば、白鳳時代創建とされる穴師薬師寺跡から「穴師堂」銘瓦や宋銭が出土していること、国府と国府津(高津)とを結ぶ道路沿いに位置すると想定される東雲遺跡からは奈良時代以降の掘立柱建物が数棟検出されており、その重複関係から、鎌倉時代の初期までの期間、何度もたてかえのあったことが判明したこと、また、豊中遺跡では平安時代後期に属すると思われる方形井戸が1基検出されており、その井戸の中から高台部内側あるいは体部外面に「田井」もしくは「田井殿」と墨書された内黒の黒色土器が、灰釉陶器、土鍋、土師器坏などと共に出土したことなどが、その主要な成果である。

他方、和泉市域では、和泉国府や国衙の実体、また氏寺としての和泉寺、池田寺、坂本寺、信太寺、その他、槇尾寺や松尾寺の実相の解明にひき続き深い関心もたれているが、槇尾山の施福寺境内から発掘された、平安時代後期における末法思想の流布と埋経の習慣を裏づける経塚の発見など、著名な事象である。また、近年の調査の中では、万町北遺跡の第2次調査において井戸が発見され、その中から小型の曲物や箸、横櫛、墨書、土器、須恵器、土師器などと共に、表に「謹啓志紀殿欲請稲具……」、裏に「大同五年七月十六日光□五□……」の文字をもつ木簡を検出しえたことなども、高く評価されるべき成果のひとつである。

さて、以上みたところが、縄文時代から弥生時代、古墳時代を経て、古代・中世に至る、近年の調査成果をふまえての、軽部池西遺跡の歴史的環境である。以下においては、叙上の地理的環境・歴史的環境との有機的関連を追うべく、今般の軽部池西遺跡における発掘調査成果を述べていくことにする。(久米)

参 考 文 献

- (1)「昭和60年度発掘調査概要」(岸和田市教育委員会 1986年3月)
- (2)「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要IV・V」(和泉丘陵内遺跡調査会 1985・86年3月)
- (3)「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報4」(泉大津市教育委員会 1986年3月)など。



(縮尺 1 : 5000)

第4図 調査区略図

第3章 調査成果

第1節 地区割及び基本層序

地区割（第4図）

発掘調査区は、約400m間にわたり道路建設予定地内に設定されている。遺構の実測および遺物の取り上げには、国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI座標系を使用し、その最小単位を4 m×4 m (16m²)の区画として使用している。区画の基本には本遺跡が所在する「大4-D-10」の1/2,500地形図を使用している。4 m×4 mの区画は、まず地形図を12等分し500m×500mの方形区画を作り、さらにこれを25等分し100m×100mの方形区画を作る。最終的にこれを625等分して4×4 mの最小区画を作っている。本報告では、座標軸の数値で遺構の位置を表記している。

調査に際しては、調査範囲の西端よりA₁・A₂・A₃・A₄・B・Cという地区名称を付している。この区割は試掘調査により知られている遺構分布や土層分布を考慮した上で便宜的に付したものである。調査成果の記述はこの区割単位でなされている（図版2、3、4、5）。なお、遺構の表記方法は、当協会の発掘調査規定によって、以下の記号を用いている。

遺 構 の 種 類

道路	OA	Avenue	土器溜・瓦溜	OT	Trash
建物	OB	Building	井戸	OW	Well
竪穴住居	OD	Dwelling	苑池	OY	Yard
土塁・石塁	OE	Earth work	田畑	OZ	
柵・塀	OF	Fence	祭祀	OC	Ceremony
炉	OH	Hearth	窯	OK	Kiln
水利施設	OI	Irrigation	池・沼	OL	Lake
土壙	OO	Orifice	貝塚	OM	Midden
柱穴	OP	Pit	古墳・墓地	OG	Grave
河川	OR	River	埋葬施設	OU	Urn
溝	OS	Stream	その他、不明	OX	Extra

基本層序（第5図）

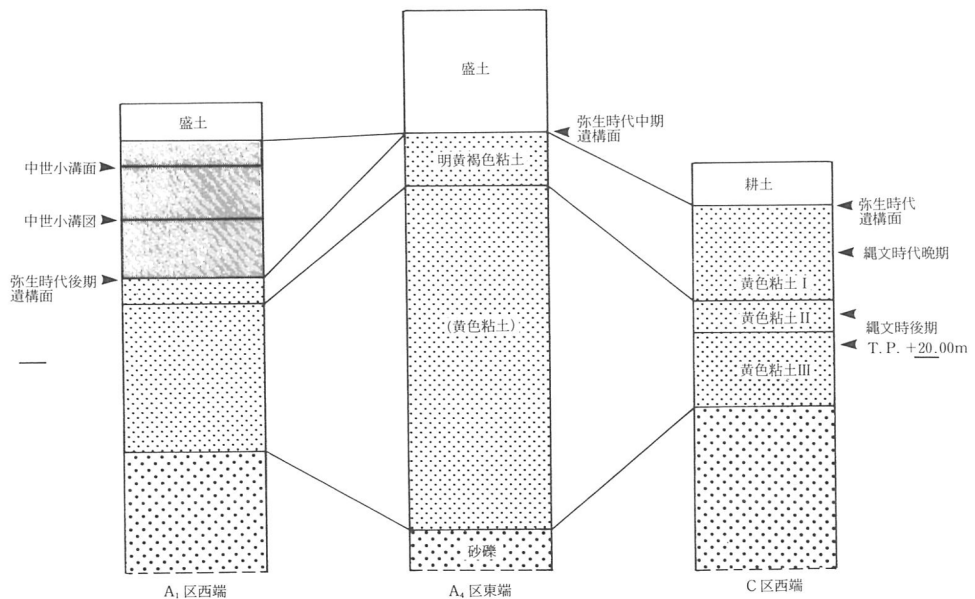
詳細な土層説明は各地区で記述している。ここではその関係を概略的に整理する。

①最下層には調査区全域にわたり砂礫層が確認される。A₁～A₄区までは部分的な試掘坑で確認し、B・C区ではその全容をほぼ把握している。上面高はT.P. 19.5m前後を測り、全体として軽部池に向い上昇している。

②次に黄色粘土と概括される堆積層がみられる。黄色粘土層は細分可能な堆積層で、概ね厚さ1.8～2 mを測る。この層にサヌカイト片や縄文土器が包含されることは、試掘調査の成果で指摘されていたが、今回C区において検出された土器により縄文時代後期から晩期にかけての堆積層であることが明らかになった。

③黄色粘土層は、A₁～B区まではその上位の層を明黄褐色粘土と呼び、C区での黄色粘土Ⅲ層に対応すると推定される。この上面は主に弥生時代に使用されており、A₁区では弥生時代後期の遺構が、A₃～A₄区では上面を覆う礫層上面から弥生時代中期の遺構が検出されている。

④黄色粘土層より上位の堆積層は大半が削平を受け消失しているが、かろうじてA₁区に残存している。この層からは中世の耕作面が2時期にわたり検出されている。(小山田)



第5図 基本柱状図（垂直1/20、水平不同）

第2節 調査区各説

I A地区の調査

1) A-1区の遺構と遺物 (図版2・7上)

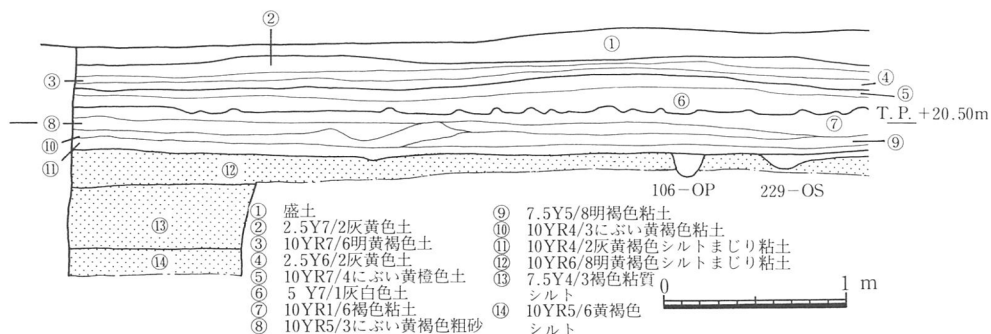
a) 基本層序 (第6図)

当地区において確認された土層は、大別して、ほぼ水平に堆積する第1層から第6層に分けることが可能である。以下、その第1層から第6層についてのその概要を述べる。

第1層 現代の盛土の下で、その上面高は、およそ T. P. +20.9m を測り、層厚は、15～20cmである。なお、現代耕土は、既に削平されてなかった。堆積土は、灰黄色土と明黄褐色土からなり、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器などが出土している。(②、③、④)

第2層 上面高、およそ T. P. +20.7m を測る土層で、にぶい黄橙色土と灰白色土からなる。層厚は、15～20cmを測り、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器などが出土している。なおこの層の上面は、中世の小溝群及び土壙が検出される遺構面である。(⑤、⑥)

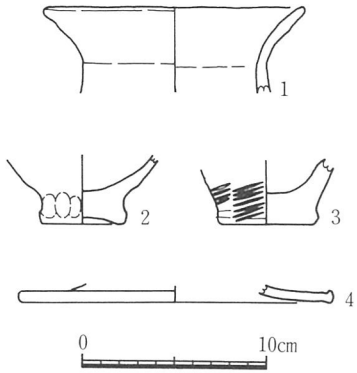
第3層 上面高、およそ T. P. +20.6m を測る土層で、褐色粘土、にぶい黄褐色粗砂及び粘土、明褐色粘土、灰黄褐色砂礫混じり粘土からなり、層厚は、約20cmを測る。遺物は、弥生土器が出土する。なおこの層の上面もまた、中世の小溝群及び土壙が検出される遺構面である。(⑦、⑧、⑨、⑩、⑪)



第6図 A-1区 北壁断面図

〈第3層出土遺物〉（第9図、図版60下）

第3層から出土する遺物には、弥生土器があげられるが、器形の判別し得るのは、壺1点、甕1点、鉢1点、脚台1点のみであった。



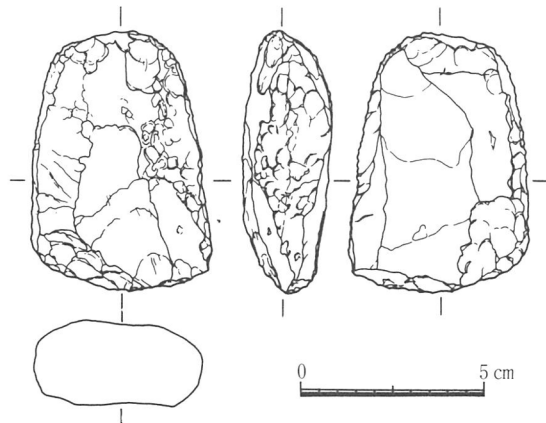
壺は、口径13.80cmを測る広口壺の口縁部で、直立する頸部から緩やかに外反するものである。端部は、まるくおわる。調整は、内外面ともココナデを施す。鉢と甕は、いずれも底部で、鉢は、底径が4.5cmを測り外面に指頭圧痕が認められる。甕は、底径が5.0cmを測るもので、外面には、タタキ目（4凹/cm）が認められる。脚台は、裾部で径は、16.8cmを測る。調整は、内外面ともナデを施す。

第9図 A-1区 第3層出土土器

第4層 上面高、およそ T.P. +20.4m を測る土層で、明黄褐色シルト混じり粘土層からなる。層厚は、約20cmを測る。出土遺物は、縄文時代のものと思われる石斧未製品が1点あるが、土器などはない。なおこの層の上面は、竪穴住居址やピット群、土壇、溝などが検出される弥生時代後期の遺構面である (12)。

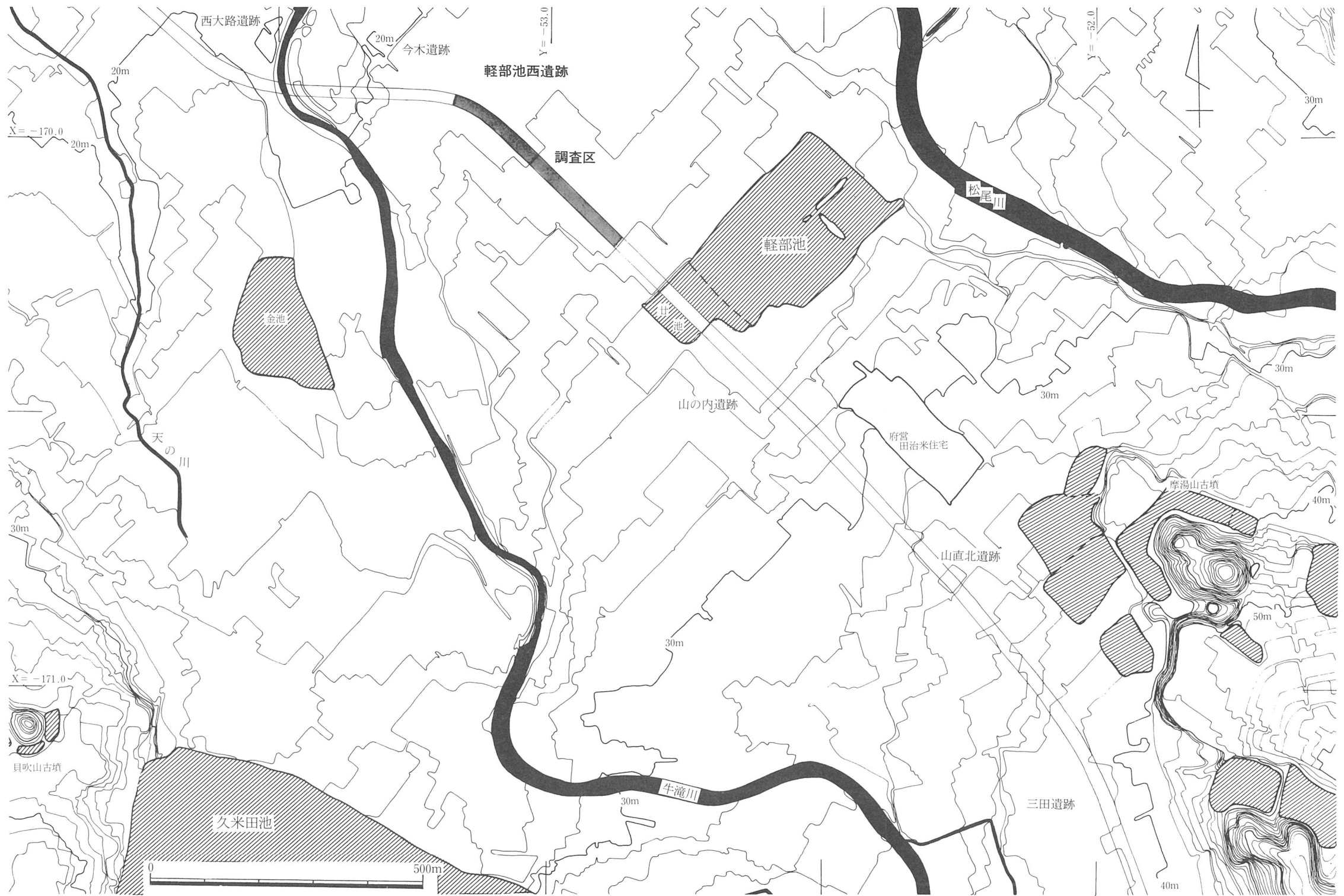
〈第4層出土石斧未製品〉（第7図、図版57上）

小型蛤刃石斧の未製品と考えられる。全長7.04cm、刃部幅4.86cm、身厚2.32cm、重量120.0gを測る。刃部は、やや開く台形を呈し、身部断面は楕円形を呈す。刃部から頂部付近に及ぶ荒い剥離面が両方向に存在し、頂部側からも両方向の剥離が施される。身部断面には細い槌打痕が残る。研磨痕は、全く認められない。石材は、斑糲岩と考えられ、暗緑色を呈し、重量感がある。

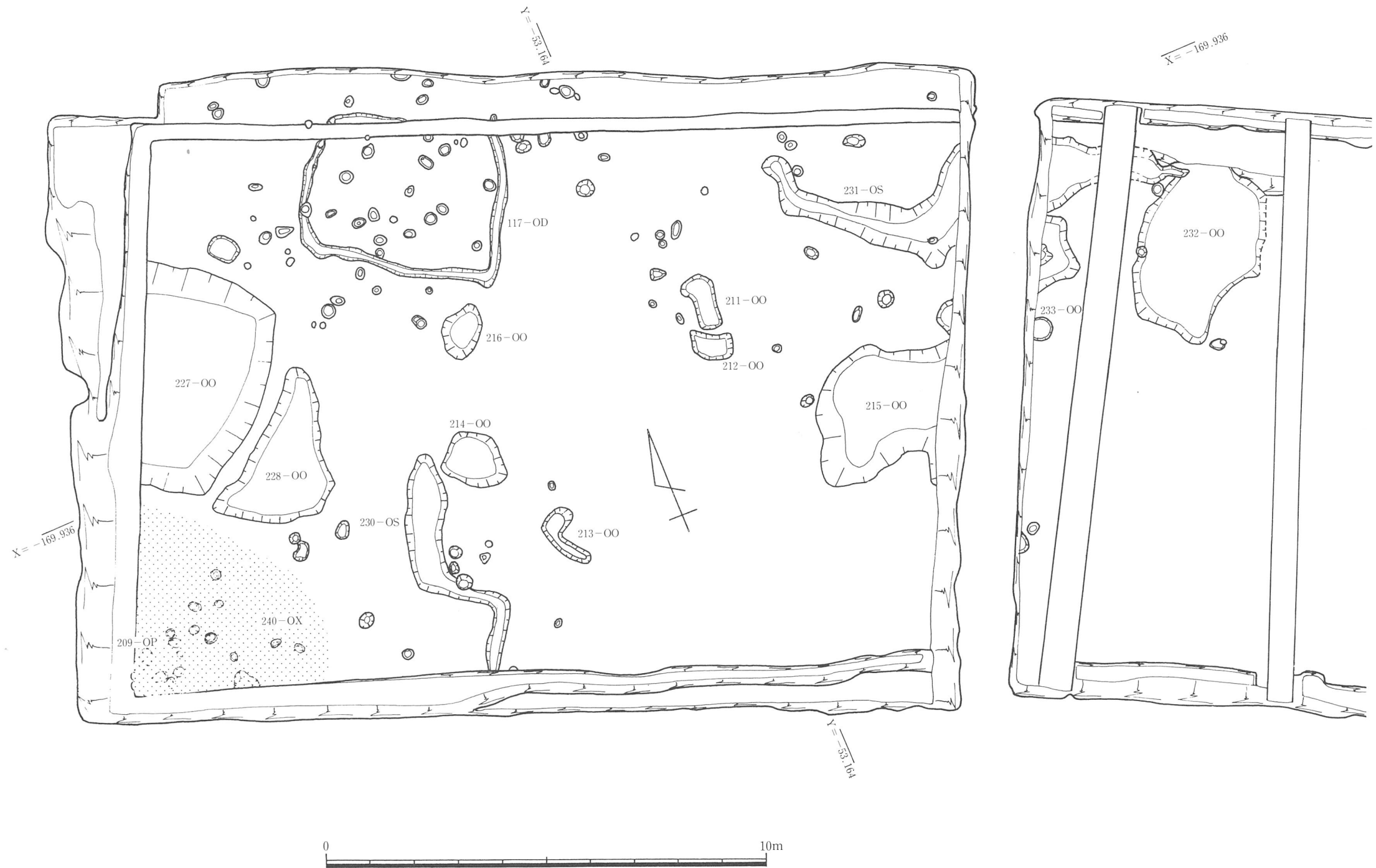


第7図 A-1区 第4層出土石斧実測図

第5層 上面高、およそ T.P. +20.2m を測る土層で、褐色粘質シルトからなる。層厚は、約35cmを測る。遺物の出土はない (13)。



第1図 調査区周辺地形図



第8図 A-1区 弥生時代遺構平面図

第6層 T.P. +19.8m 以下に堆積する土層で、黄褐色シルトからなる。遺物の出土はない。トレンチがこの層の下まで達していないため層厚は不明であるが、確認できただけで約20cmを測る。なお段丘相当層には至っていない (⑭)。

b) 遺構各説

A-1区においては、旧石器時代もしくは縄文時代に属すると思われる遺構は検出されなかったため、本項では弥生時代の記述からはじめることにする。

〈弥生時代〉

当地区における弥生時代の遺構は、明黄褐色シルト混じり粘土層である第4層上面において検出される。検出された遺構は、竪穴住居址と多数のピット、土壇、溝である。それらの遺構は、地区南東部では遺構密度が低いものの、その他ではほぼ全面にみられ、そのうちピットは地区南西部と竪穴住居址の位置する地区北方とに比較的集中する。なお、その南西部のピット群の上層には、弥生土器が集中して包含される土層を認める。遺構の遺存状況は全体的に悪く、浅いものが多い。また、遺物も少なかった。

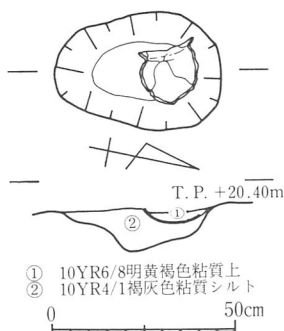
イ) 竪穴住居址

117-OD (第11図、図版10上)

当地区北方で検出されたもので、平面プランは、長軸が北西-南東方向の長方形状を呈する。遺構の遺存状況は非常に悪く、かろうじて壁溝を検出したことによって確認した。その規模は、長軸が約430cm、短軸が約330cmを測る。壁溝は、深さ約5cm、幅約20cmで埋土は、炭化物の混入のみられる灰黄褐色粘質シルト、または褐灰色粘質シルトを呈する。ピットは、住居址内部で検出したものだけで約20を数え、そのうちの1つは、壁溝と重複する関係にあり、本来、この付近に住居址が、複数存在していた可能性も考えられる。これらのピットは、いずれも炭化物の混入のみられる褐灰色粘質シルトを呈し、それらの規模は、ほとんどが径10cm~20cm、深さ5~20cmを測る。なお、住居址内において炉址や貯蔵穴等は検出されなかった。

住居址の出土遺物は、ピットからタタキ目の認められる弥生土器の小片が若干出土しているのみで、時期決定はし難いが、住居址を覆う第3層出土遺物や同一面の他の遺構、住居址の規模、形状等を考慮すると、概ね弥生時代後期には比定できるものと考えられる。

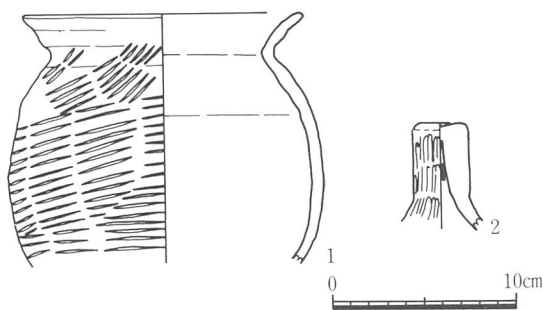
ロ) ピット群 (第8・10図、図版10下)



第10図 A-1区 207-OP 遺物出土状況

ピットは、当地区全面において検出されたが、それらは主に地区の南西部と竪穴住居址(117-OD)の位置する地区北方部に多く検出された。ピットは、主に径が20cm前後、深さ10cm前後を測り、他の遺構と同様、その遺存状況は悪い。埋土は、主に灰黄褐色粘質シルト、あるいは褐色粘質シルトを呈しており、炭化物の混入の認められるものもある。なお、南東部のピット群の上面には、240-OXが広がっている。

これらピットから出土する遺物は、全体的に極少量であるが畿内第V様式の範疇におさまるとされる弥生土器片が認められる。しかしながら207-OPと191-OPのものを除くとほとんどが小片で図示できるものはなかった。



第12図 A-1区 191・207-OP 出土土器

〈207-OP 出土遺物〉(第12図、図版58上)

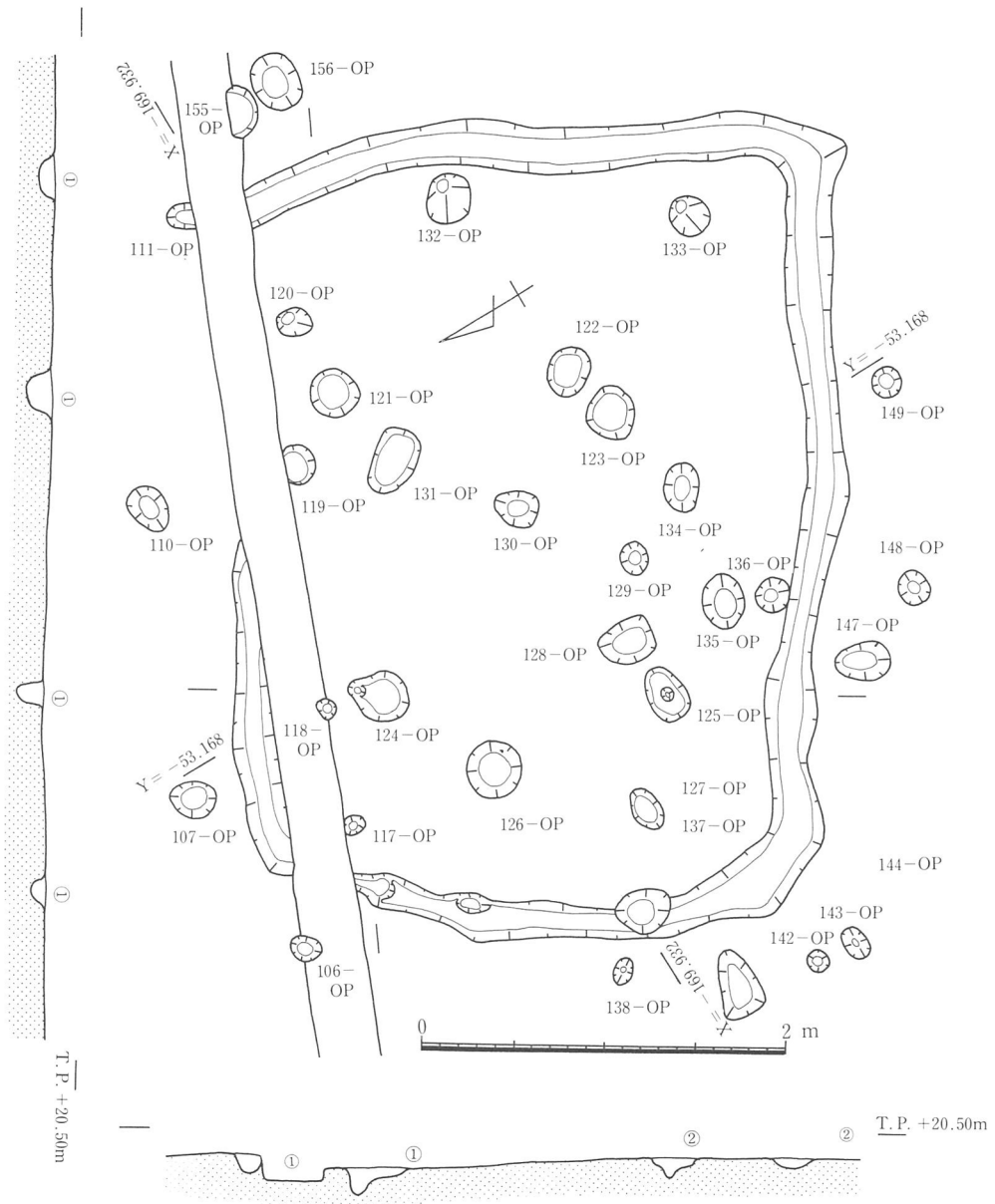
207-OPから出土したのは、甕で口縁部から体部上半が遺存している。口径は14.7cmを測る。調整は、外面、頸部から体部にかけてはタタキ目(2凹/cm)が認められ、内面は、ハケ目が認められる。口縁部は、内外

面ともヨコナデを施す。色調は、外面淡黄色、内面灰白色を呈し、胎土には、黒色砂粒を含む。なお、外面口縁部と体部にススの付着が認められる。

ハ) 土器溜

240-OX (第13・14図、図版12・13)

当地区の南西隅において検出されたもので、土器は、畿内第V様式後半の範疇におさまるとされるものである。それらは、東西約5m、南北約3mの範囲にわたって黄褐色粘質土及び褐色粘質土に包含され、主には後者に包含される。これらの土層は、弥生時代後期の遺構面である第4層上面のやや低くなったところに堆積する土層であるが、周辺土層との相違は明瞭でなく、遺構としてその範囲をとらえることはできなかった。なお、府教委における調査で、この土器群が検出された地点に隣接する付近で、同様のものが検出さ



- ① 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含)
- ② 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (炭化物多量含)

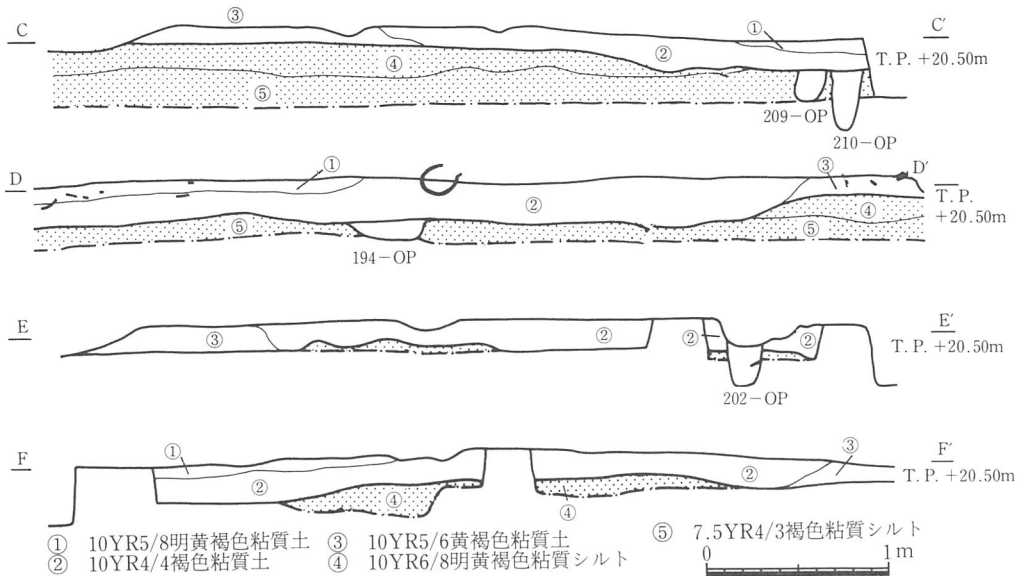
第11図 A-1区 117-OD平・断面図

遺構番号	法 量 (cm)		埋 土	備 考
	大きさ	深		
103-OP	20×30	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
104-OP	18×25	6	にぶい黄褐色粘質シルト	
105-OP	22×30	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
106-OP	15×20	8	灰黄褐色粘質シルト	
107-OP	20×25	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
108-OP	40×10	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
110-OP	20×28	6	にぶい黄褐色粘質シルト	
111-OP	15×15	6	にぶい黄褐色粘質シルト	
113-OP	22×12	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
114-OP	35×27	10	灰黄褐色粘質シルト	
115-OP	17×10	6	灰黄褐色粘質シルト	
117-OP	15×12	10	灰黄褐色粘質シルト	117-OD
118-OP	10×10	22	灰黄褐色粘質シルト	117-OD
119-OP	20×15	14	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
120-OP	15×20	10	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
121-OP	25×25	13	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
122-OP	28×22	5	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
123-OP	30×26	6	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
124-OP	28×35	11	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
125-OP	22×30	11	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
126-OP	30×30	8	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
127-OP	16×25	5	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
128-OP	30×24	12	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
129-OP	18×16	12	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
130-OP	20×25	8	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
131-OP	38×24	13	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
132-OP	28×24	8	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD 弥生土器出土
133-OP	22×24	8	灰黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	117-OD
134-OP	27×20	5	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
135-OP	30×24	10	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
136-OP	20×20	6	褐灰色粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
137-OP	24×30	20	褐灰粘質シルト (炭化物多い)	117-OD
138-OP	16×10	6	褐色粘質シルト (炭化物含む)	
139-OP	30×15	6	褐色粘質シルト (炭化物含む)	
141-OP	25×24	10	褐色粘質シルト (炭化物含む)	
142-OP	25×38	13	褐色粘質シルト (炭化物含む)	
144-OP	13×13	20	褐色粘質シルト	弥生土器出土
147-OP	30×20	10	褐色粘質シルト (炭化物含む)	
148-OP	18×16	8	褐色粘質シルト (炭化物含む)	
149-OP	16×16	10	にぶい黄褐色粘質シルト	
150-OP	32×24	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
151-OP	30×20	6	灰黄褐色粘質シルト	
152-OP	34×34	5	にぶい黄褐色粘質シルト	
154-OP	12×15	5	にぶい黄褐色粘質シルト	
155-OP	30×17	14	灰黄褐色粘質シルト	
156-OP	32×26	20	灰黄褐色粘質シルト	
157-OP	27×26	18	灰黄褐色粘質シルト	
158-OP	30×16	14	灰黄褐色粘質シルト	
159-OP	25×17	14	灰黄褐色粘質シルト	
160-OP	46×36	14	褐色粘質シルト (炭化物含む)	

表1 A-1区 ピット一覧(1)

遺構番号	法 量 (cm)		埋 土	備 考
	大きさ	深		
161-OP	15×14	10	灰黄褐色粘質シルト	
162-OP	16×20	8	灰黄褐色粘質シルト	
163-OP	20×20	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
164-OP	38×22	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
165-OP	20×20	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
166-OP	27×34	10	にぶい黄褐色粘質シルト	
167-OP	18×15	10	にぶい黄褐色粘質シルト	
168-OP	30×16	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
169-OP	22×22	14	灰黄褐色粘質シルト	
170-OP	22×30	11	灰黄褐色粘土	
171-OP	16×16	14	灰黄褐色粘質シルト	
172-OP	20×24	10	灰黄褐色粘土	
174-OP	48×28	10	にぶい黄褐色粘質シルト	
175-OP	30×23	8	にぶい黄褐色粘質シルト	
176-OP	35×40	23	褐色粘質シルト 炭化物	
178-OP	22×34	18	明褐色粘質シルト	
179-OP	18×18	18	褐色粘質シルト	
180-OP	17×22	6	にぶい黄褐色粘質シルト	
181-OP	18×8	6	にぶい黄褐色粘質シルト	
182-OP	20×17	6	にぶい黄褐色粘質シルト	
183-OP	25×22	10	にぶい黄褐色粘質シルト	
184-OP	30×25	10	灰黄褐色粘質シルト	
185-OP	30×22	8	灰黄褐色粘質シルト	
186-OP	48×48	11	灰黄褐色粘質シルト	
188-OP	25×25	8	灰黄褐色粘質シルト	
190-OP	30×40	11	灰黄褐色粘質シルト	
191-OP	25×25	6	灰黄褐色粘質シルト	弥生土器出土
192-OP	26×20	15	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
193-OP	20×25	10	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
194-OP	55×35	10	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
195-OP	30×20	6	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
196-OP	20×15	8	灰黄褐色粘質シルト	
197-OP	24×24	15	灰黄褐色粘質シルト	
198-OP	30×20	27	灰黄褐色粘質シルト	
199-OP	20×25	5	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
200-OP	24×28	16	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
204-OP	20×26	10	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
205-OP	25×20	12	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
206-OP	24×36	16	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
207-OP	45×32	12	明黄褐色粘質土、褐灰色粘質シルト	弥生土器出土
208-OP	15×20	12	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
209-OP	10×20	10	褐灰色粘質シルト (炭化物含む)	
210-OP	16×16	30	褐灰色粘質シルト	弥生土器出土
221-OP	22×20	16	褐灰色粘土	
235-OP	24×30	5	にぶい黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	
237-OP	30×25	16	にぶい黄褐色粘質シルト (炭化物若干含む)	
238-OP	28×23	21	暗灰黄色粘質土	
239-OP	25×35	16	黄灰色粘質シルト	
241-OP	16×22	6	黒褐色焼土	

表2 A-1区 ピット一覧(2)



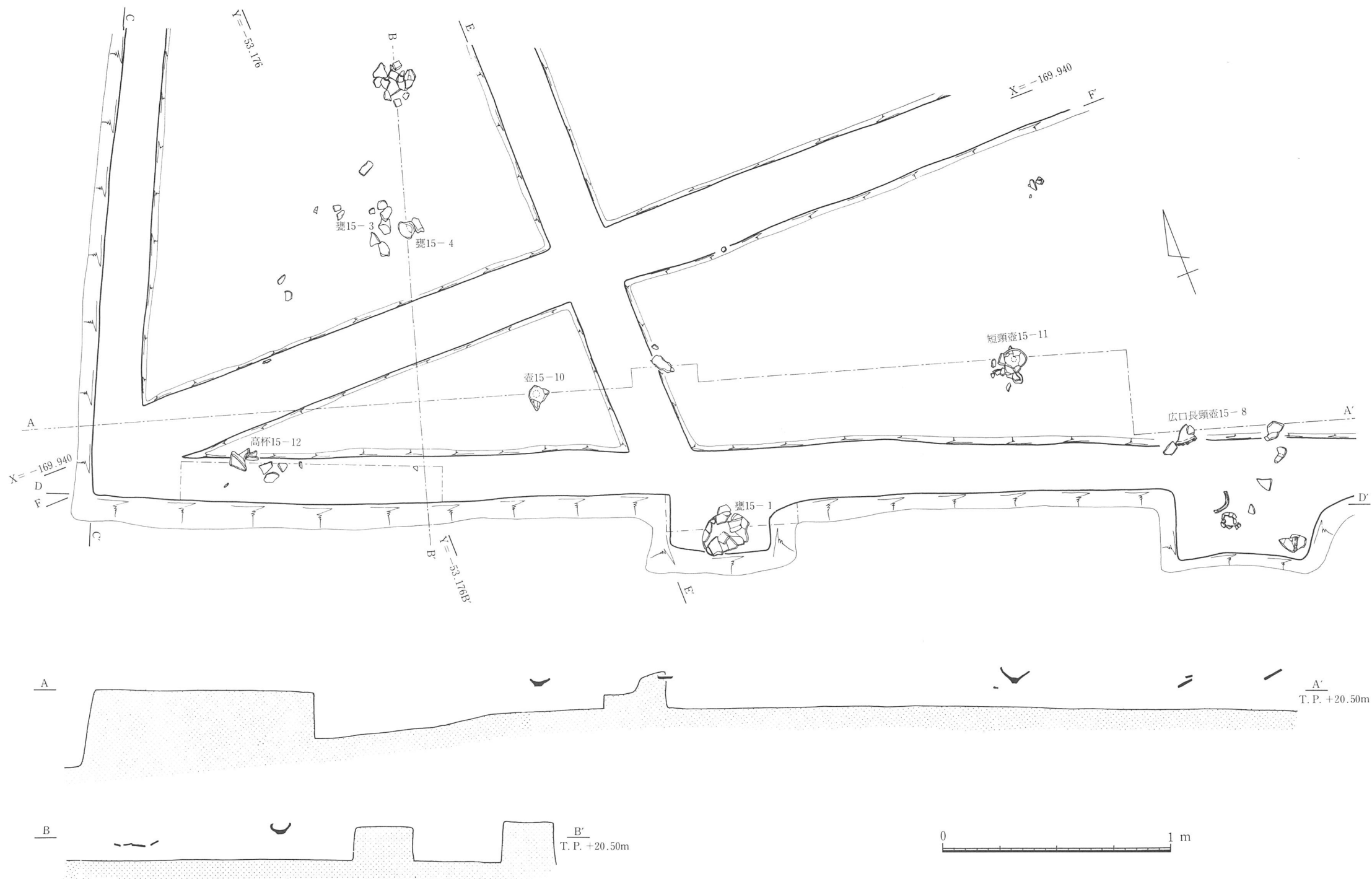
第14図 A-1区 240-OX断面図

れており、「SX-4（土器溜り状遺構）」として報告されている。その報告内容を見ると、土器の示す時期、土層の堆積状況、土器の出土状況等、今回の調査結果とほぼ類似しており、240-OXとSX-4とは、一連のものであると考えられる。（第26図参照）ここでその府教委調査結果と今回の調査結果を照合した場合、ともにこの土器群の下層からは多数のピットが検出されていること、今回の調査によって、これらピットからの出土遺物が时期的に大差がないこと、土器群の土器の出土状況等を考えると、この土器群付近が竪穴住居址である可能性があるのではないかとと思われる。しかしながら、また前述の報告によると、SX-4は、弥生土器、土師器、須恵器を出土する「NR-2（自然河川）」によって削平を受けているが、そのNR-2を挟んでSX-4の対岸には、SX-4と類似する土層で、同様に弥生土器を包含する土層が広がることも報告されており、この土器群を包含する土層が、この付近一帯に広がる包含層である可能性も残している。

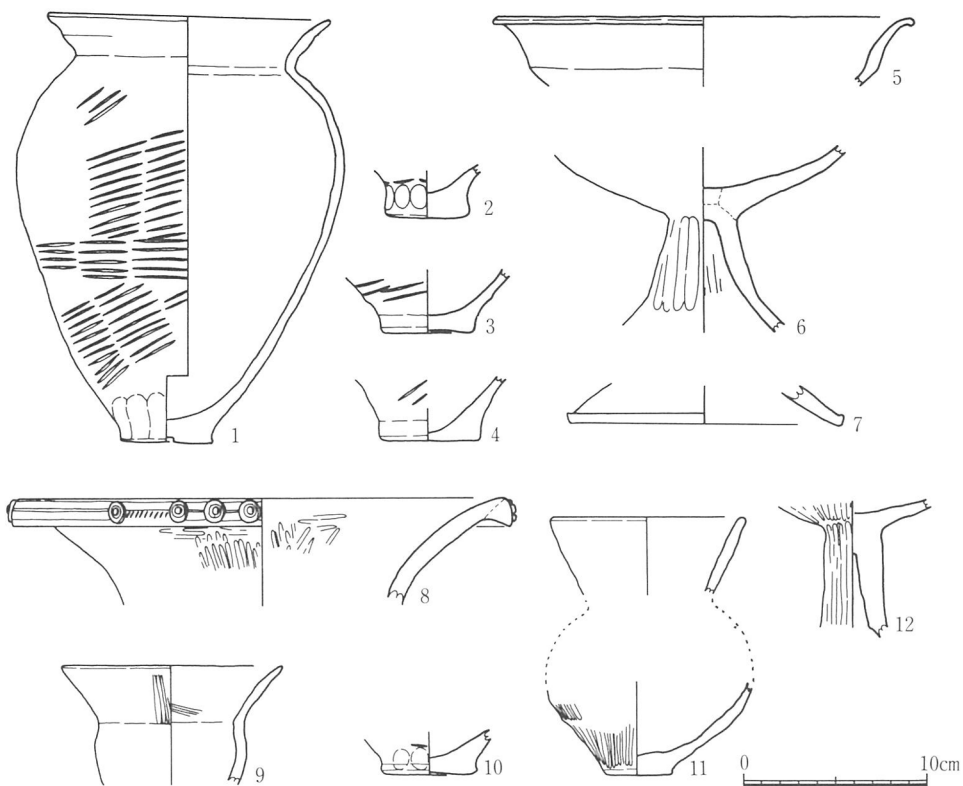
〈240-OX 出土遺物〉（第15図、図版57下、58上）

240-OXから出土した土器は、前述の如く畿内第V様式後半の範疇におさまるもので、甕高坏、広口壺、鉢、短頸壺等が認められる。

(1)~(4)は甕である。(1)は、口径15.1cm、器高22.9cmを測るもので全体の約1/2が遺存する。色調は、外面、淡橙色、内面、灰白色を呈し、胎土には、最大3mmの白色粒および黒色粒を含む。調整は、体部外面にタタキ目（2凹/cm）が認められるほか、口縁部内外面は



第13図 A-1区 240-OX 遺物出土状況



第15図 A-1区 240-OX 出土土器

ヨコナデ、底部外面にはナデが施される。体部内面の調整は、剥離が著しく不明である。なお、体部下半には、一部ススの付着が認められる。(2)~(4)は底部で、(2)は、底径4.5cmを測り、下方へ突出する形状を呈する。(3)は、底径4.7cmを測り、やや上げ底気味のものである。(4)は、底径5.3cmを測るものである。

(5)~(7)、(12)は高坏である。(5)は、口縁部で口径25.8cmを測る。(6)は、脚柱部、(7)は、脚裾部で、図示は別々におこなったが、同一固体の可能性はある。(5)と(7)は、剥離が著しく、調整は不明であるが、(6)は、外面、ヘラミガキ、内面、ナデを施す。(12)は、前述のものとは異なり、円筒形の脚柱部である。外面にヘラミガキを施す。

(8)は、広口壺口縁部で、口径26.4cmを測る。端部外面には、擬凹線の上に刻み目文と円形付文を施す。調整は、内外面ともヘラミガキを施す。

(9)は、鉢で、口径8.7cmを測る。口縁部外面にヘラミガキ、内面にハケ目が認められる。

(10)は、壺もしくは甕の底部で、底径4.6cmを測る。

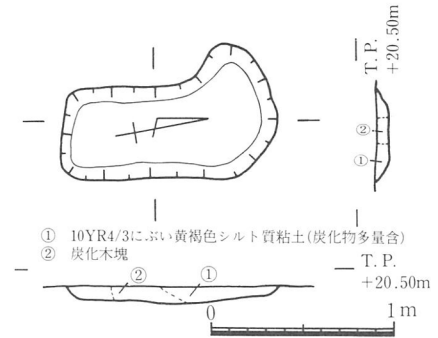
(11)は、短頸壺で、口径10.5cmを測る。体部上半は図示できなかったが、同一固体と思わ

れる。調整は、体部外面は、ヘラミガキが施される。

二) 土 壙

211-00 (第16図、図版11上)

当地区中央のやや東よりで検出されたもので、概ね長方形状を呈する。長軸は、ほぼ南北方向で約120cmを測り、短軸は、約50cmを測る。深さは、約10cm前後と浅く、底面は、ほぼ平坦である。埋土は炭化物を多く含むにぶい黄褐色粘質シルトを呈する。なお、土壙のほぼ中央には、炭化木塊が認められるが、遺物の出土はない。

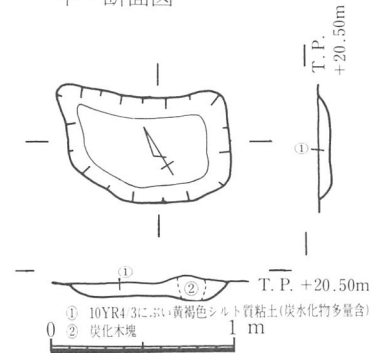


第16図 A-1区 211-00

平・断面図

212-00 (第17図、図版11上)

当地区のやや中央よりで検出されたもので、前述の211-00のすぐ南側に位置する。形状は、やや不整形な長方形状を呈する。長軸は、約90cm、短軸は、約55cmを測り、深さは、約10cm前後でやはり浅い。底面は、ほぼ平坦であるが、東端部が若干窪み、その部分に211-00同様、炭化木塊が認められる。埋土も211-00と同じく、炭化物を多く含むにぶい黄褐色粘質シルトを呈する。遺物の出土はない。



17図 A-1区 212-00

平・断面図

213-00 (第8図)

当地区中央やや南よりで検出された不整形土壙である。規模は、最大で約80cm×130cmで、深さは、12cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトを呈する。遺物の出土はない。

214-00 (第8図)

当地区ほぼ中央で検出された不整形土壙で、規模は、約140cm×115cmを測る。深さは、約15cmで浅い。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトを呈し、遺物の出土はない。

215-00 (第8図)

当地区東部で検出された不整形土壙で、その東端は、現代水路によって検出できなかった。確認された規模は、約270cm×310cmと大きいが、深さは、15cmで浅い。埋土は、2層に分かれる。上層は、にぶい黄褐色シルト、下層は、褐灰色シルトである。遺物の出土は

ない。

216-00 (第8図)

当地区中央付近で検出された不整形土壌である。竪穴住居址(117-OD)のすぐ南方に位置する。規模は、約120cm×85cmで、深さ約5cmを測る。非常に浅い。埋土は、炭化物を若干含むにぶい黄褐色粘質シルトで、遺物の出土はない。

227-00 (第8図、図版11下)

当地区西部で検出されたもので、その西端は調査区外になっており、正確な形状、規模は、不明である。しかしながら、前年度の府教委の調査成果と照合した場合、概ね不整形を呈するものと思われる。(第26図参照) 規模は、方形とみた場合、今回の成果では一辺約480cmを測り、深さは、約10cmである。底部は、平坦で、埋土は、灰黄褐色粘質シルトを呈する。遺物の出土はない。

228-00 (第8図、図版11下)

当地区西部で検出されたもので、前述の227-00の南東部に位置する遺構である。形状は、不整三角状を呈し、その一辺は、227-00の一辺と平行する。規模は、約360cm×190cmを測り、深さは、約10cmである。埋土及び底面の形状は、227-00と同じく、灰黄褐色粘質シルトを呈し、平坦である。遺物は、器種不明であるが、弥生土器片が1点出土している。これら227-00及び228-00は、府教委の調査成果と照合してみた場合、性格は、明確ではないが、一連のものである可能性が考えられる。(第26図参照)

232-00 (第8図)

当地区東部で検出された不整形土壌で、その北東部から東部にかけては、現代の攪乱によって切られ確認できなかった。確認できた規模は、約270cm×390cmと大きい、深さは、約15cmで、浅い。埋土は、炭化物を若干含むにぶい黄褐色粘質シルトで、遺物の出土はない。なお、当土壌は、231-OSによってその北端を切られている。

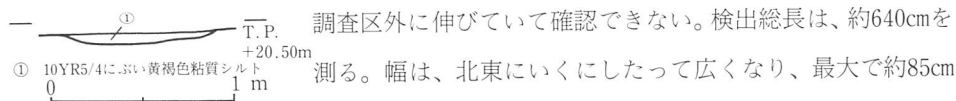
233-00 (第8図)

当地区東部で検出された不整形土壌で、その西端は、現代水路によって確認できなかった。確認できた規模は、約170cm×85cmで、深さは、約20cmを測る。底面は、その中央部が若干窪み、埋土は、炭化物を含む灰黄褐色粘質シルトを呈する。遺物の出土はない。

ホ) 溝

230-OS (第18図)

当地区中央よりやや南西部で検出されたクランク状に蛇行する溝である。その南西端は、

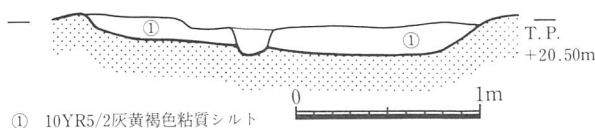


第18図 A-1区 230-OS

断面図

調査区外に伸びていて確認できない。検出総長は、約640cmを測る。幅は、北東にいくにしたって広くなり、最大で約85cmを測る。深さは、約10cmで浅い。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトを呈し、遺物は、弥生土器片が若干出土する。

231-OS (第19図)



第19図 A-1区 231-OS 断面図

当地区北東部で検出された蛇行する溝である。検出総長は、約460cmを測るが、途中、現代水路及びヒューム管、あるいは後

世に生育した樹木根によって切断される。幅は、その両端で狭くなるが、最大で約160cmを測る。深さは、約10cmで浅い。埋土は、灰黄褐色粘質シルトを呈し、遺物の出土はない。

<中世>

当地区における中世の遺構は、第3層上面と第2層上面において検出される。第3層上面において検出される遺構は、主に小溝群で、他に土壇が1基検出される。小溝群は、概ね地区の西部から南部にかけての広がる。第2層上面において検出される遺構は、前述と同様、小溝群と若干の土壇で、それらは、地区北東部に攪乱坑があるものの、ほぼ全面に広がる。

<包含層(第2層・第1層)出土遺物> (第20、21図、図版59、60)

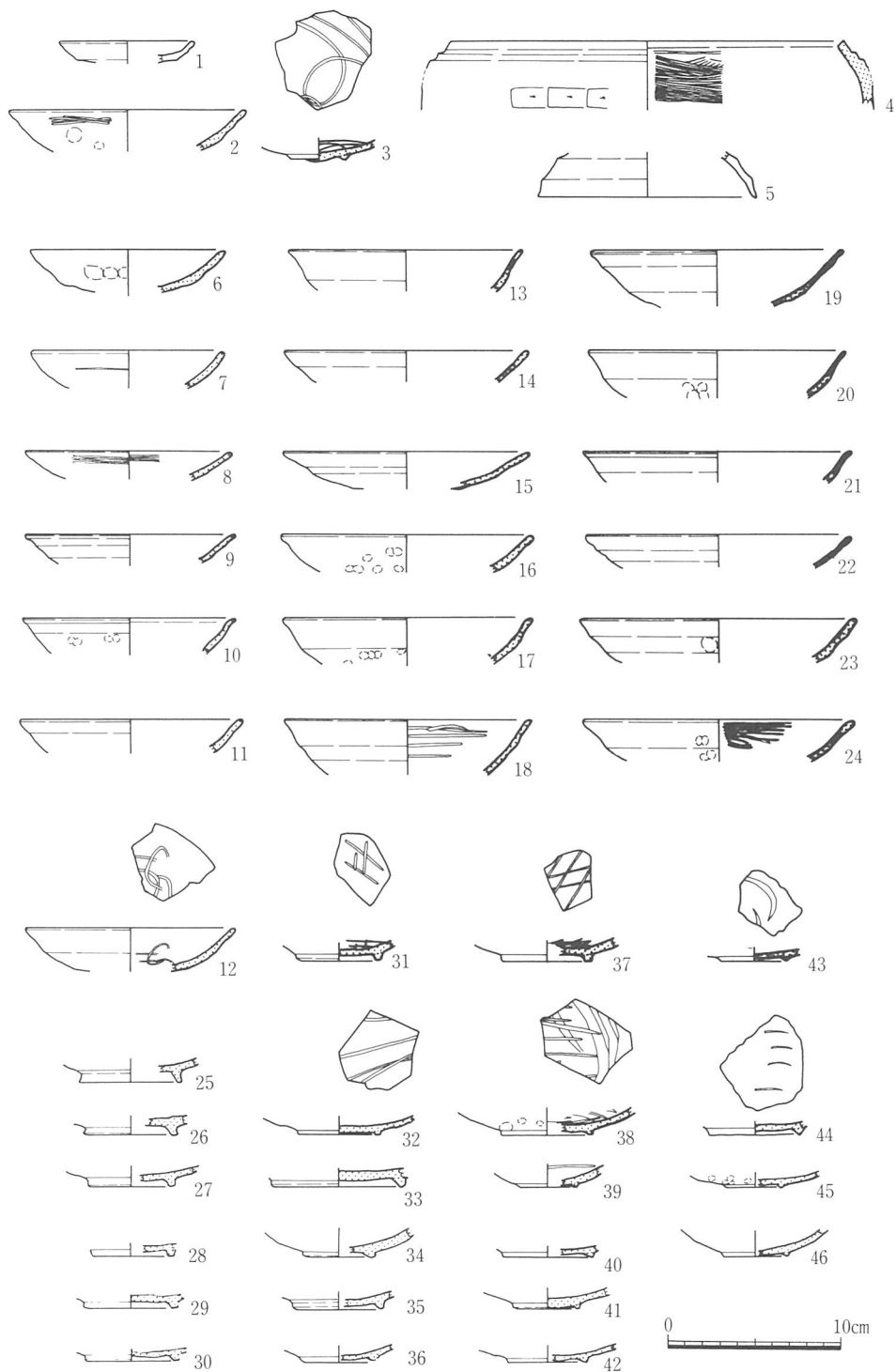
これら遺構面を覆う第2層と第1層からは、以下の遺物が出土する。

第2層からは、弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器が出土し、その内、土師器と瓦器の占める比率が高い。

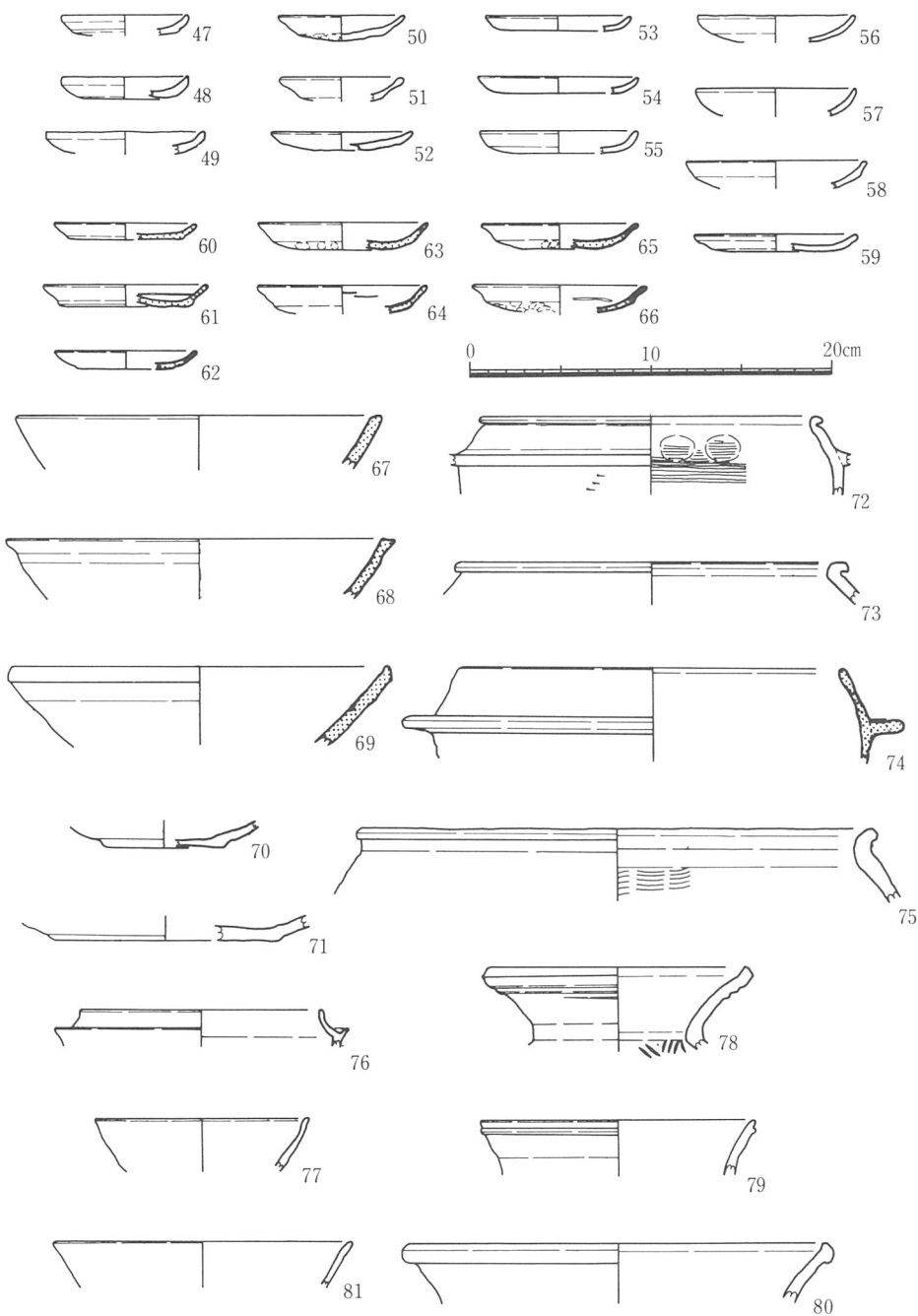
土師器は、(47)~(59)が小皿で、いずれも口径8cm~10cmを測るものである。(72)(73)は、羽釜で、口縁端部が玉縁状に外方へ反るものである。(75)は、甕で、一般に湊焼きと称されるものである。

瓦器は、(6)~(46)が、埴であり、高台が断面三角状を呈し、形式化したものが多く認められる。(60)~(66)は、小皿で、口径8cm~10cmを測り、底部が上げ底状になるものが認められる。

その他の遺物は、(67)~(69)が、瓦質の鉢口縁部、(74)が、同羽釜口縁部である。(70)、(71)は、須恵器鉢底部、(76)、(77)は同坏身、(78)、(79)は、同壺口縁部、(80)は、同甕口縁部である。(81)は、陶器埴の口縁部である。



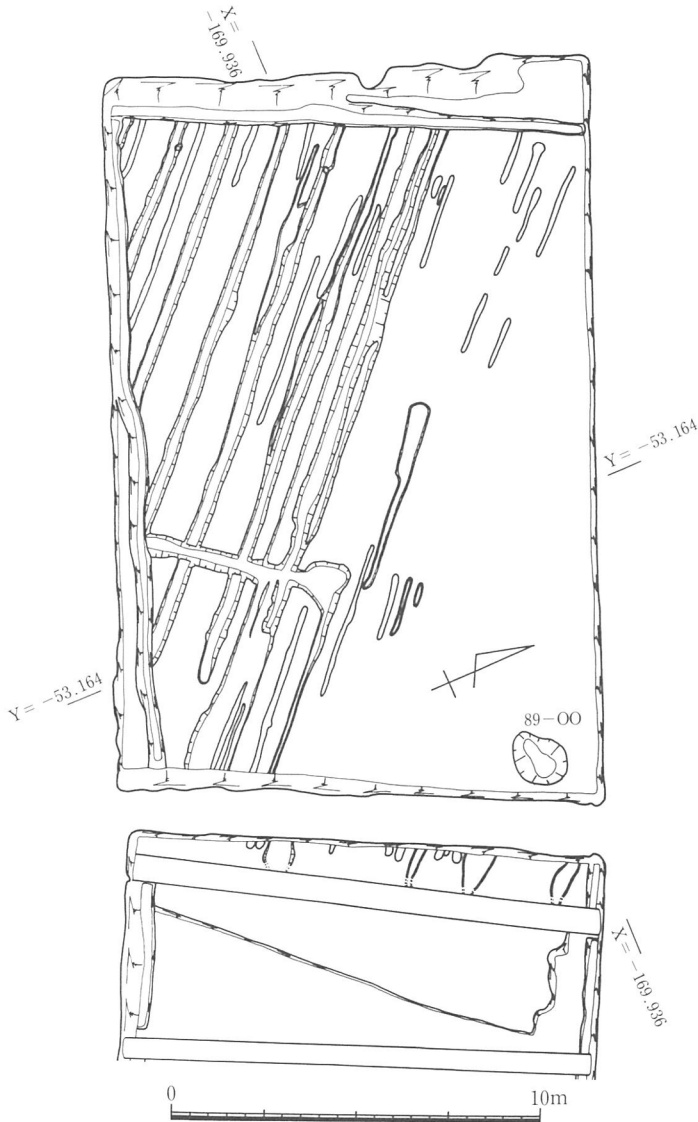
第20图 A-1区 第1・2層出土土器 (1~5:第1層、6~42:第2層)



第21图 A-1区 第2層出土土器

第1層からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦が出土し、前述同様、土師器と瓦器の占める比率が高い。しかしながら、図示できるものは少なかった。

- (1)は、土師器小皿で、口径7.8cmを測る。
- (2)、(3)は、瓦器碗であり、(3)には、退化した高台が付く。
- (4)は、瓦質の羽釜口縁部で、外面に段を有して内傾するものである。
- (5)は、須恵器坏蓋口縁部である。



第22図 A-1区 中世遺構（第3層上面）平面図

第3層上面遺構

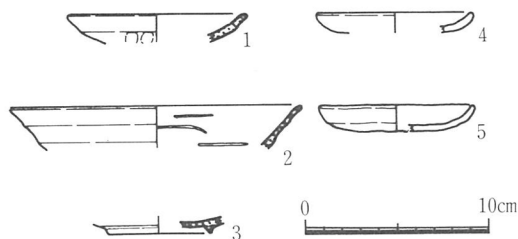
イ) 小溝群（第22図、
図版14上）

当地区のほぼ西部から南部にかけて、複数の小溝を検出した。小溝は、北西-南東方向で、平行にはしるものである。それらは、すべて同一面で検出されたものの、2種類のものが認められる。一方は、幅10cm~20cm、深さ約5cmを測る浅いもので、検出長も短いものが多い。もう一方は、幅30cm前後で、深さも15cm前後あり、検出長も長く、前者とは、明確に区別される。また、前者は、それぞれの間隔が一定でないのに対し後者は、約150cm間隔で整然と並ぶ。しかし

ながら、これら2種類の小溝は、ともに灰白色の埋土を呈し、遺物も同様なものが出土して、時期的な差異は認められない。遺構の性格としては、現在、地表面において認められる条里地割の方向と小溝群の方向が一致しており、水田址、あるいは畝址と考えられる。

〈出土遺物〉（第23図、図版58下）

小溝からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白磁が出土していて、その内、土師器、次いで瓦器の占める比率が高い。



(1)~(3)は、瓦器であり、(1)は、口径 9.7cmを測る小皿である。(2)と(3)は、碗で、(3)は、断面三角状を呈する高台が付く底部である。

(4)、(5)は、土師器小皿である。口径は、それぞれ8.6cmと8.5cmを測る。

ロ) 土 墳

89-00 (第22図)

当地区北東部で検出された不整楕円形を呈する土墳である。規模は、130cm×165cmを測り、深さは、約25cmである。埋土は、炭化物を含む灰黄色土を呈する。遺物の出土はない。

第2層上面遺構

イ) 小溝群 (第25図、図版14下)

当地区のほぼ全面で検出されたもので、第3層上面のものと同様、北東-南西方向で平行に複数の小溝がはしる。小溝は、幅が10cm~20cmのものが多いが、広いものは、約30cmを測る。深さは、5cm前後で、第3層上面のもののように深いものはない。また、各小溝間の間隔も一定でない。これら小溝の性格としては、やはり水田址等が考えられる。

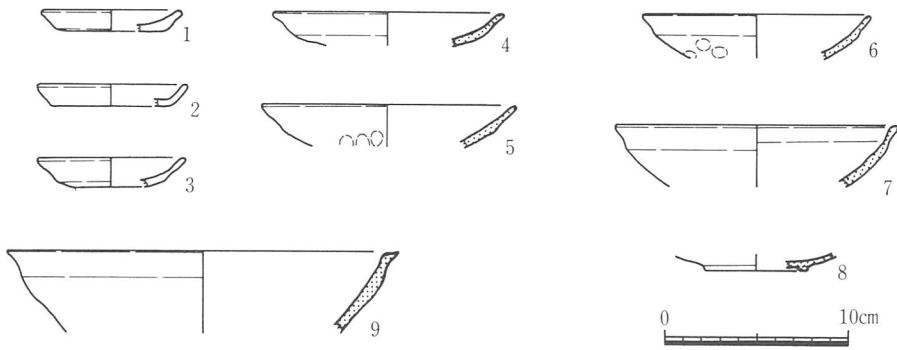
〈小溝群出土遺物〉 (第24図、図版58下)

これら小溝から出土する遺物には、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器がある。その内、やはり土師器と瓦器の占める比率が高い。(1)、(2)は、土師器小皿で、口径は、それぞれ7.6cmと8.0cmを測る。

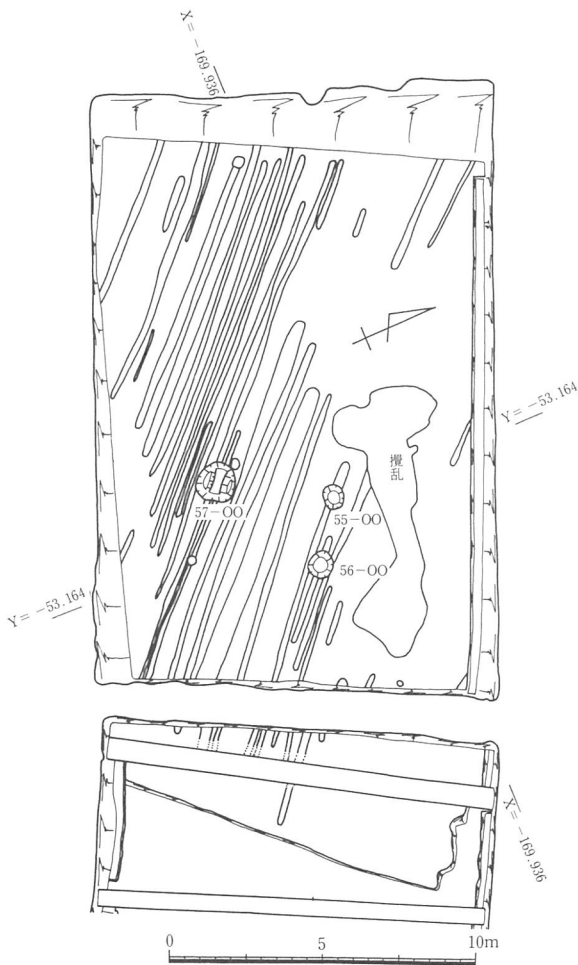
(3)は、瓦器小皿で、口径は、8.0cmを測る。

(4)~(8)は、瓦器碗である。

(9)は、瓦質の鉢である。口径は、21.2cmを測る。



第24図 A-1区 第2層上面小溝群出土土器



第25図 A-1区 中世遺構(第2層上面)平面図

ロ) 土 壙

第2層上面で検出された土壙は、以下の3基があげられる。

55-00 (第25図)

長径約80cm、短径約70cmを測る楕円形を呈する土壙である。深さは、約15cmで浅い。埋土は、浅黄色土で瓦器小片が若干出土する。

56-00 (第25図)

長径約85cm、短径約75cmを測るほぼ楕円形を呈する土壙である。深さは、約10cmで浅い。埋土は、浅黄色土を呈し、土師器と瓦器の小片が若干出土する。

57-00 (第25図)

不整形形を呈する土壙で規模は、約130cm×120cmを測る。深さは、約15cmであ

c) 小結 (第26図)

A-1区において得られた調査成果について、隣接する前年度の大阪府教育委員会の調査成果をもふまえて、時代ごとにまとめてみたい。

〈縄文時代〉

B区、C区においては、自然河川内より主として縄文時代後期の土器が出土した。しかしながら当地区周辺においては、前年度の調査を含めて遺構は確認されておらず、遺物も土器等の出土はみられない。わずかに1点、当時代かと思われる石斧が出土しているのみである。

〈弥生時代〉

全調査区内において、当地区周辺は、この時代の遺構が集中して検出される。検出された遺構は、竪穴住居址(117-OD)や土器溜り(240-OX)の他、ピット群、土壇、溝等である。前年度の調査においても、土器溜り状遺構や溝等が検出されている。竪穴住居址は、今回検出した1棟のみであるが、先に述べたように240-OXや前年度調査のSX-4は竪穴住居址としての可能性を残しているし、後世の削平の著しい当地区では、多数のピットも竪穴住居址としての可能性を持っている。これらを含めると、複数の住居址の存在を推測でき、当地区付近が集落の一端を示しているものと考えられる。しかしながらそれらのまとまりは、全調査区中の北西端部にのみに限定され、集落の中心部ではなく、縁辺部であろうと思われる。時期的には、240-OX等の出土遺物をみるかぎり後期後半から終末にかけてのものと考えられる。240-OXから出土した土器は、甕、高坏、壺等で、その一括性は高く、B区246-OS最上層出土土器とともに当時期の良好な資料となりうるものである。

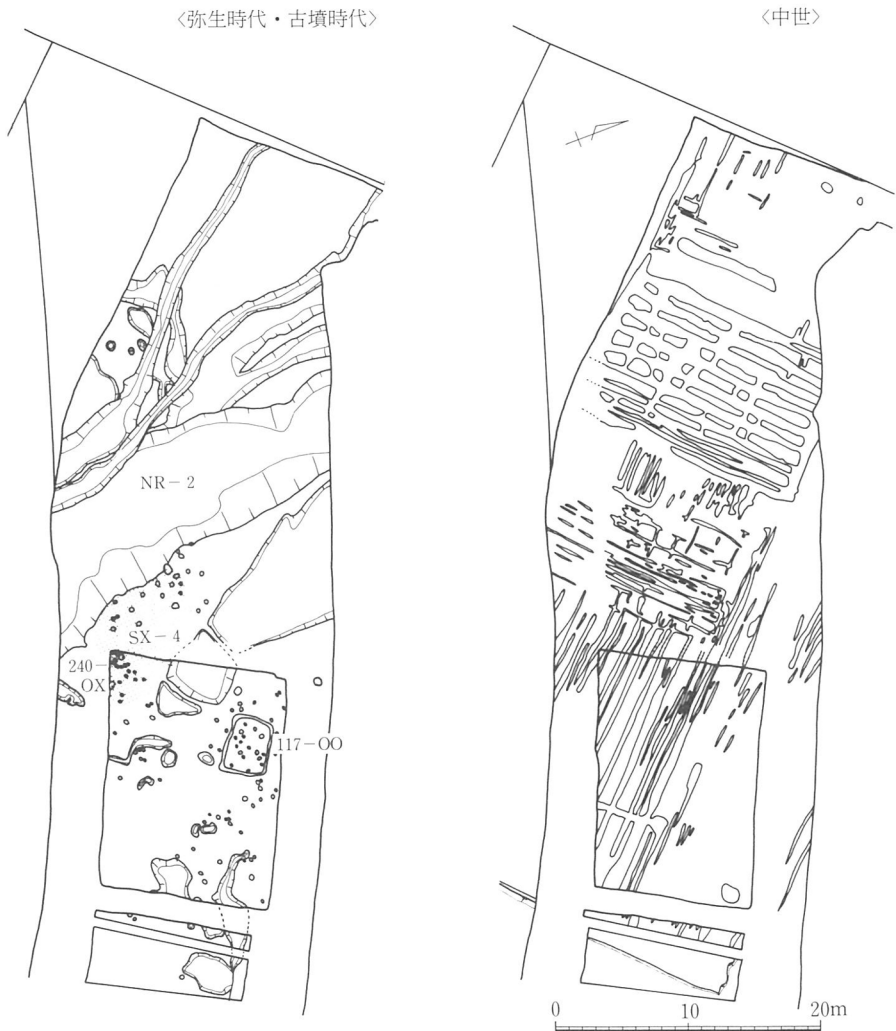
〈古墳時代〉

当地区周辺においては、前年度の調査において、前期後半から後期前半に該当する溝が数条検出されている。しかしながら今回の調査においては、遺構は検出できなかった。

〈中世〉

今回、中世の遺構としては、小溝群を2面検出した。そのうち下層の小溝群は前年度調査において検出された小溝群と符合するものである。これらの小溝群は、いずれも現在も水田区画として遺存している条里地割の方向とまったく一致するもので、周辺の地割の起源を探る資料となりうるものである。また、下層の小溝群は、前年度調査と整合してみると、規模や方向の違いから4ブロックに分けることが可能であり、同一坪内部における土

地区画の様相を伺わせるとともに、そのそれぞれのブロックにおいて生産作物が異なっていたことを示すものと考えられる。



第26図 A-1区と昭和59年度府教委調査区

2) A-2 区の遺構と遺物 (図版 2・7 上)

a) 基本層序 (第27図)

当地区は、A-1 区に対し、約20cmの段差をともなって低くなっている。ここにおいて確認される層序は、A-1 区とは大きく異なり、基本的に第1層から第4層に分層できる。

以下、それらの概要を述べる。

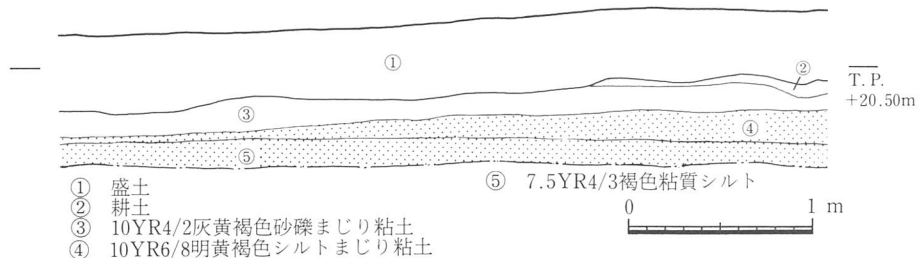
第1層 地区の東部において局部的に認められる盛土直下の土層で、現代の耕作土である。

第2層 地区の北東半部に広がる土層で、その上面高は、T. P. +20.4m 前後を測る。堆積土は、灰色粘土を呈し、層厚は、10cm~20cmである。なお、この層の上面においては、後述する多数の不整形土壌が検出される。なお、遺物の出土はなかった。

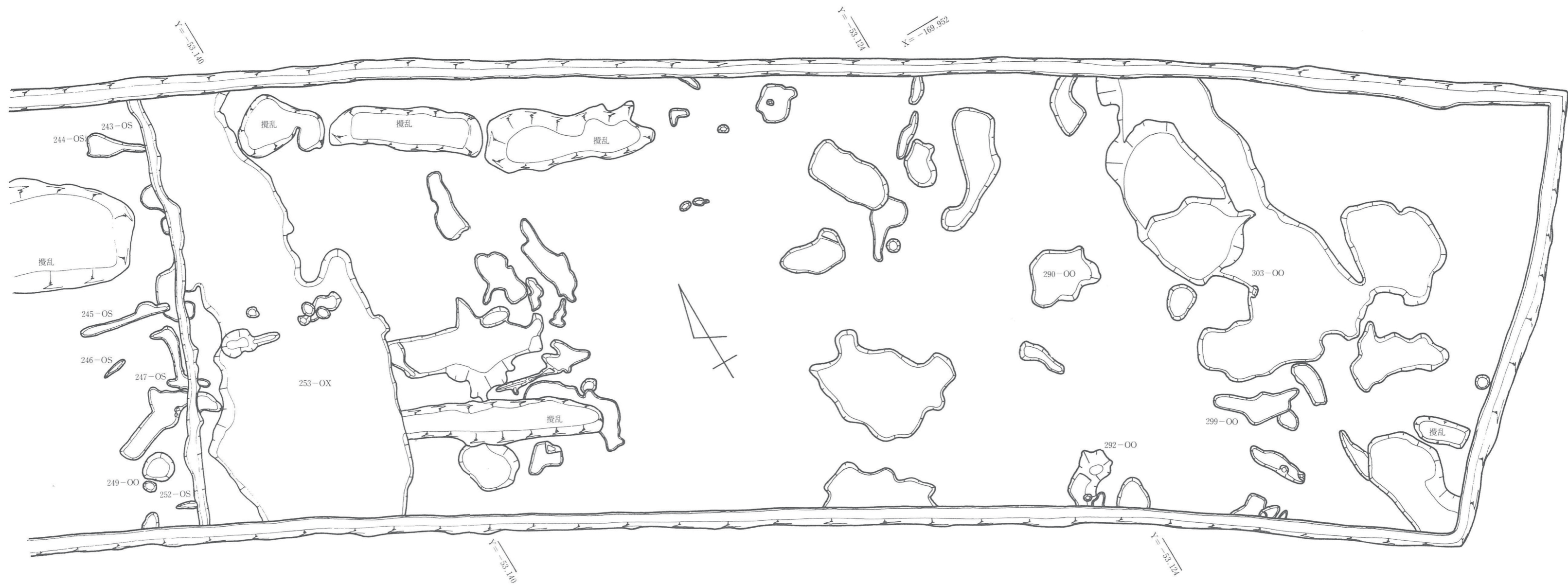
第3層 地区の全面に広がる土層である。その上面は、ごくゆるやかに東方に向かって傾斜し、上面高は、西端で T. P. +20.3m、東端で T. P. +20.1m を測る。層厚は、20cm~40cmである。堆積土は、明黄褐色土を呈し、A-1 区における第4層、明黄褐色シルト混じり粘土層と層位的に対応するものと思われる。なお、遺物の出土はなかった。

第4層 上面高、T. P. +20.1m~20.0m を測る土層で、その上面は、ごくゆるやかに東方へ傾斜する。層厚は、この層の下面までトレンチが達していないため不明であるが、少なくとも20cmは認める。堆積土は、概ね黄褐色粘土を呈するが、西端部においては、黄褐色シルトに変化する。なお、遺物の出土はなかった。

以上の他に、当地区東端部の第4層上面においては、層厚30cm~80cmを測る砂層堆積が認められる。この砂層堆積は、A-3 区に続いており、その成果から弥生時代中期以前のものと思われる。



第27図 A-2 区 北壁断面図



第28図 A-2区 遺構平面図

b) 遺構各説

〈弥生時代〉

当地区における弥生時代の遺構は、遺構全体の遺存状況が悪いためか、地区東部において検出された若干の不整形土壌が認められるのみである。

土 壌

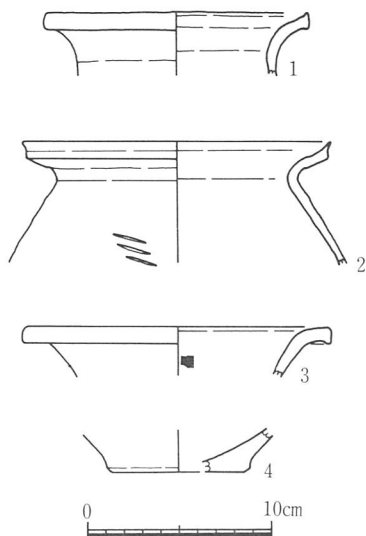
290-00 (第29・30図、図版16)

当地区東部中央において検出された不整形土壌である。規模は、約130cm×190cmを測る。深さは、その東端底面がもっとも窪み、約20cmを測る。埋土は、炭化物を多量に含む灰黄



第29図 A-2区 290-00 遺物出土状況

褐色粘土とにぶい黄色粘質シルトからなり、弥生土器片を多数出土する。それらは、主に前者の埋土中に含まれ、概ね2カ所に集中する。出土した弥生土器は、器形の判別できるものが少ないため、図示できたのは、(1)に示す広口壺口縁部片のみであった。これは、口径14.2cmを測るもので、調整等は、剥離が著しく不明である。时期的には、畿内第V様式後半の範疇におさまるものと思われる。なお、この他の遺物の中には畿内第III～第IV様式の範疇におさまると思われる簾状文を施した土器片も出土しているが、遺構の時期としては、やはり前者を以て充てるのが妥当と思われる。



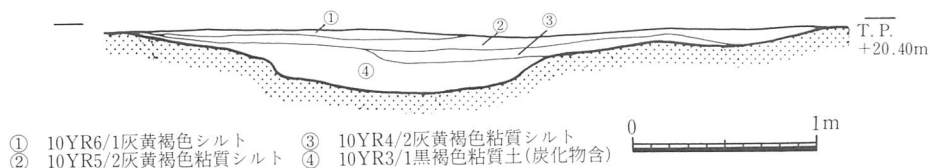
第30図 A-2区 290・299・

303-00 出土土器

303-00 (第31・30図、図版15下)

当地区の東部において検出された不整形土壌である。規模は、最大で930cm×730cmと大きく、深さは、最も深いところで、約30cmを測る。埋土は、基本的に上層から灰黄褐色シルト、灰黄褐色粘質シルト、黒褐色粘質シルト(炭化物含む)を呈し、部分的に褐色粗砂、にぶい黄色粗砂、暗灰黄色粘質シルトが認められる。こういった形状、埋土からすると当遺構は地形の落込みかとも思われる。しかしながら、遺物は、弥生土器片が多数出土している。それらは、器形の判別できるものが少なく、図示できたのは、(2)に示す甕の口縁部片のみである。これは、口径16.8cmを測るもので、くの字に屈曲して、外上方へ伸び、端部が上方へ立ち上がって、受口状を呈するものである。时期的には、畿内第V様式後半の範疇におさまるものと思われる。

なお、当遺構も前述した290-00と同様、他の遺物の中に簾状文を施した土器片が含まれるが、遺構の時期としては、やはり前者を以てするのが妥当と思われる。



- ① 10YR6/1灰黄褐色シルト ③ 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
② 10YR5/2灰黄褐色粘質シルト ④ 10YR3/1黒褐色粘質土(炭化物含)

第31図 A-2区 303-00 断面図

299-00 (第28・30図)

303-00 に隣接して位置する不整形土壌である。埋土は黒褐色粘質シルトを呈し、遺物は、弥生土器で(3)広口壺口縁部と(4)甕または壺の底部が出土している。

〈中世以降〉

当地区において、明確に中世のものとされるものはない。ただ、多数検出された不整形土壌や溝状遺構等は、前述のものを除き、いずれも同様な埋土を呈し、遺物は少ないものの、明らかに中世以前にまで遡れるものではない。以下、これらのものについて若干述べたい。

イ) 土壌 (第28図)

当地区の西端を除く全面において検出された。形状は、いずれも不整形で、大きいものは、長径 4 m 前後に達する。しかしながら、深さは深いものはなく、いずれも 10cm 前後と浅い。埋土は、概ね黄褐色粘質シルトを呈し、土師器、瓦器、瓦質土器等の小片が出土する。なお、これらのうちの 1 基から、わずかに 1 点染付碗の極く小片が出土しており、近世以降のものである可能性が考えられる。

ロ) 溝 (第28図)

当地区の西部で比較的多く検出された。これらは、いずれも小溝で、243-OS を除くと、長さ 3 m に満ちるものはなく、深さも 5 cm 前後で浅い。243-OS は、当地区を横断する溝で、深さ約 15cm を測る。これらの小溝の埋土は、黄褐色粘質シルトで、土師器小片が若干出土している。おそらく、これらの小溝は、A-1 のように整然と並ぶということはないが、水田に伴うものであろうと考えられる。

c) 小 結

A-2 区において検出された遺構は、弥生時代及び中世以降のものと思われる不整形土壌等があげられる。そのうち、特に弥生時代については、290-00、303-00 等ごく僅かで、前述した A-1 区の様相とは大きく異なる。このことは、前項において述べた如く、弥生時代後期における集落が、A-2 区にまで及ばず、A-1 区がその縁辺部であることの傍証となりうるものと考えられる。(岡本)

3) A-3 区の遺構と遺物 (図版 2・7 下)

A-3 区は、今述べた A-2 区の東側に隣接する調査区であり、路線内センターポイントのナンバー標示でいえば、No.205からNo.207までの範囲となる。座標数値で標示すれば、およそ $X = -169964$ 、 $Y = -53116$ 付近から、 $X = -170004$ 、 $Y = -53068$ 付近までの範囲となる (図版17)。

この A-3 区の調査地域からは、以下にのべるように、主として、縄文土器のみを検出する、層的には弥生時代中期以前の自然流路や、他に一部、周溝を伴う弥生時代の台状遺構や土壌群、加えて、古墳時代以降の掘立柱建物跡や溝状遺構、土壌群など多数の遺構が、共伴遺物と共に検出されている。

以下においては、A-3 区における a) 基本層序、b) 遺構各説、c) 小結の順序で、調査結果をのべていくこととする。

a) 基本層序 (第32図)

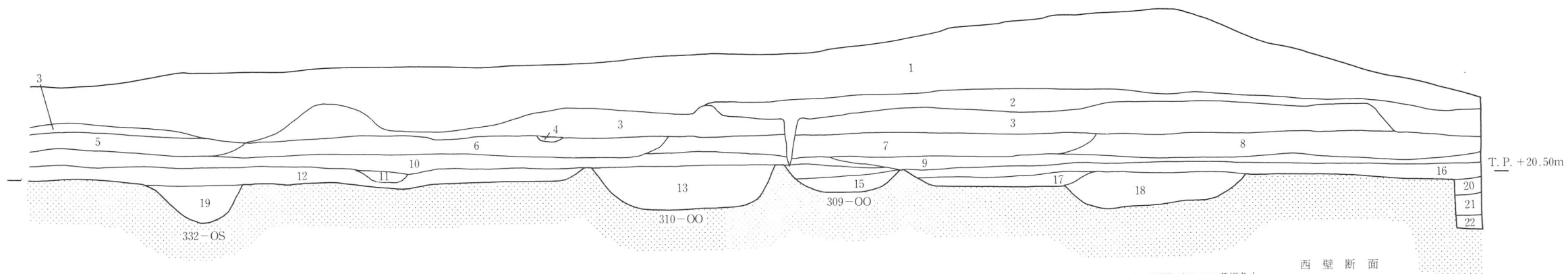
A-3 区における基本層位は、第32図に西壁断面の様子を示したように、現耕作土、旧耕作土の下、にぶい黄褐色土、褐色土、明褐色土、にぶい黄褐色土などの包含層を経て、明黄褐色シルトまじりの遺構面に到達する。

北壁断面においても、基本層位は殆んどかわらず、にぶい黄褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土、明褐色土、にぶい黄褐色砂礫層などの包含層を経て、明黄褐色シルトまじり粘土の遺構面に到達する。

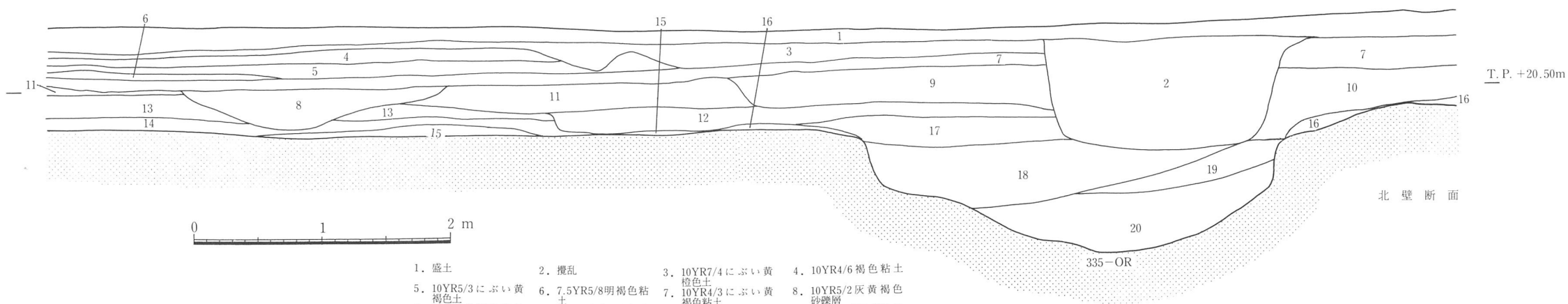
但し、断面観察から明らかのように、遺構は、単に明黄褐色シルトまじり粘土層上面だけで観察されるわけではなく、たとえば、にぶい黄褐色土層をベースとする面で、或いは、より下層の灰黄褐色土層の上面で、溝状遺構らしい断面を観察することができるので、本遺跡はその時代性はともかくも、明らかに複合遺跡であることを予測することができる。

A-3 区の層位の中で、特に注意を払っておきたい点は、その北壁断面に如実にあらわれている明黄褐色シルトまじり粘土上面にかぶる礫層堆積である。この礫層堆積は、「軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II」(1985年)の中で、丁度、「谷部」として予測された場所に相当するが、この試掘時点での SD-22と SD-23の間の約30m 区間において特に部厚く、北壁断面の一面では約40cm前後の層厚をはかるところもある。

さて、これら A-3 区における、包含層ならびに礫層の形成時期もしくは機能した時期を知るべくその出土遺物に注目すると、新、旧の耕作土内 (西壁断面：第 2-3 層) からは、陶磁器片、瓦器片、須恵器片、弥生式土器片などが、また、それより下層の黄褐色系

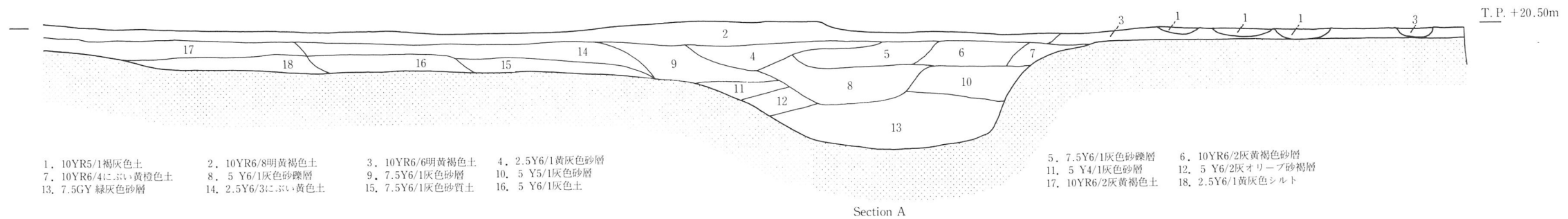


- | | | | | | |
|--------------------|-------------------------|---------------------|---------------------|-----------------------|-------------------|
| 1. 盛土 | 2. 耕作土 | 3. 旧耕作土 | 4. 10YR7/1灰白色土 | 5. 10YR4/2灰黄褐色土 | 6. 10YR4/3にぶい黄褐色土 |
| 7. 10YR4/6褐色土 | 8. 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 | 9. 7.5YR5/8明褐色粘土 | 10. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 | 11. 10YR4/1褐灰色砂礫まじり粘土 | 12. 10YR4/2灰黄褐色粘土 |
| 13. 10YR4/2灰黄褐色砂礫層 | 14. 10YR5/1褐灰色土 | 15. 10YR3/1黒褐色土 | 16. 10YR4/1褐灰色土 | 17. 10YR6/2灰黄褐色土 | 18. 10YR5/2灰黄褐色土 |
| 19. 10YR6/1褐灰色砂層 | 20. 10YR6/8明黄褐色シルトまじり粘土 | 21. 7.5YR4/3褐色粘質シルト | 22. 10YR5/8黄褐色土 | | |

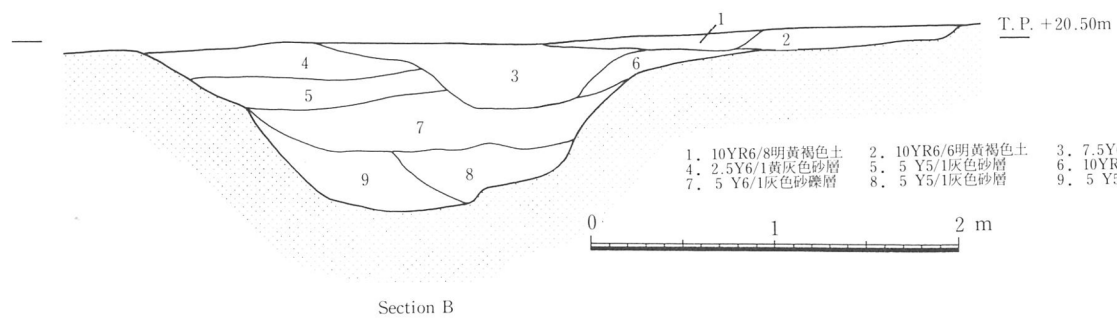


- | | | | |
|-------------------------|--------------------|----------------------|-------------------|
| 1. 盛土 | 2. 攪乱 | 3. 10YR7/4にぶい黄褐色土 | 4. 10YR4/6褐色粘土 |
| 5. 10YR5/3にぶい黄褐色土 | 6. 7.5YR5/8明褐色粘土 | 7. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 | 8. 10YR5/2灰黄褐色砂礫層 |
| 9. 10YR6/2灰黄褐色砂礫層 | 10. 10YR5/1褐灰色砂礫層 | 11. 10YR5/3にぶい黄褐色砂礫層 | 12. 7.5YR5/2灰褐色砂層 |
| 13. 10YR6/8明黄褐色シルトまじり粘土 | 14. 7.5YR4/3褐色シルト | 15. 10YR5/8黄褐色土 | 16. 10G7/1明緑灰シルト |
| 17. 10YR5/2灰黄褐色砂礫層 | 18. 10YR4/2灰黄褐色砂礫層 | 19. 10YR6/1褐灰色砂層 | 20. 10BG7/1明青灰砂層 |

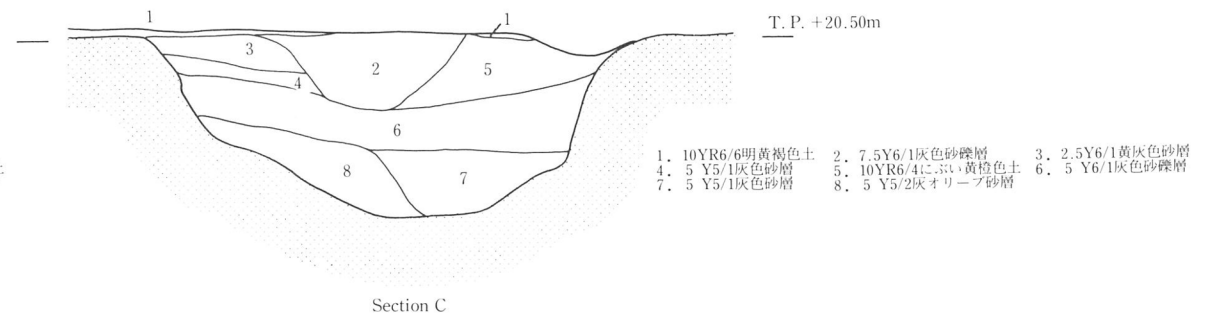
第32図 A-3区 西壁・北壁断面図



Section A



Section B

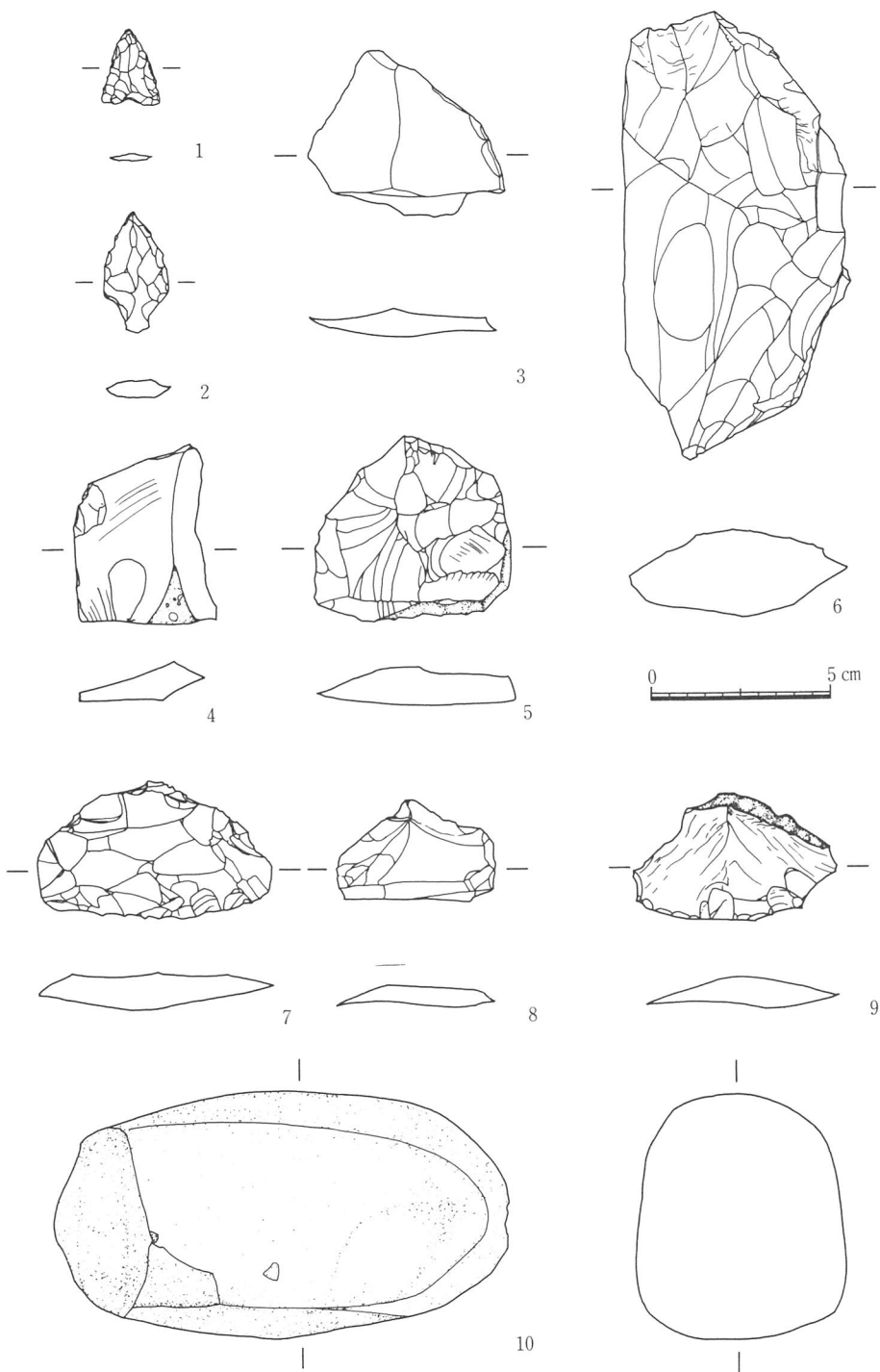


Section C

第34図 A-3区 335-OR・自然流路断面図



第35図 A-3・4区 335-OR・砂礫層・611-00内出土土器拓影ほか



第36図 A-3・4区 335-OR・遺構面直上・砂礫層内出土石器および石製品

〈弥生時代〉

A-3区における弥生時代の遺構は、主として方形周溝状の遺構を伴う台状遺構と土壇群が、検出された遺構の主なものである。

イ) 方形周溝状および台状遺構 (第107図)

A-3区で検出された台状遺構は、全体で9基を数える。370-OXから378-OXまでの遺構がそれであるが、自然河川335-ORの北側に5基、南側に4基を検出している。

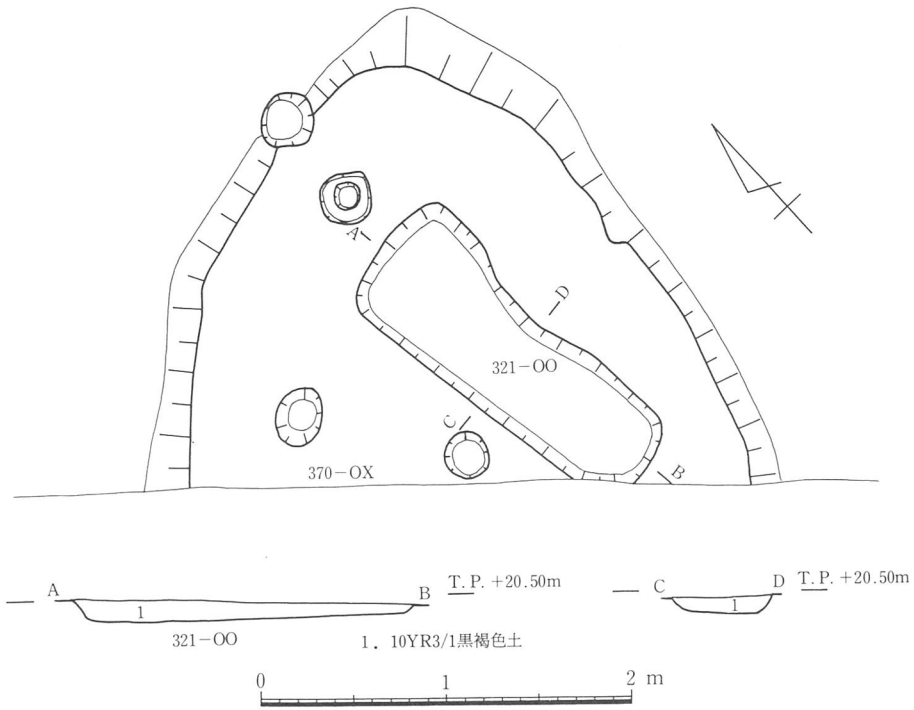
これら9基の台状遺構のうち、明確に主体部を有し、方形周溝墓のプランをもつ遺構は372-OXのみであるが、他に周溝は確認されないものの、主体部らしき土壇の検出される遺構として、370-OX、371-OX、373-OXの3基(いずれも、335-ORの南側に位置する)を挙げることができる。また、自然河川335-ORの北側で検出された5基の台状遺構については、当初、主体部らしき土壇状の遺構も検出されず、単なる自然状の高まりかとも考えられたが、375-OXの北壁(第42図)において、また、376-OXの東壁(第43図)において、明確に溝状の断面が確認されているので、基本的には自然河川335-ORの南側で検出されている台状遺構と、性格を同じくするものであると判断している。以下においては、先ず、335-ORの北側の台状遺構から、個別的に説明を加えていくことにする。

370-OX (第37図、図版22上)

台状遺構370-OXは、A-3区のセンターポイントNo.206付近(B-25区WB、WC区)にまたがる台状遺構である。台状部の南半部は調査区外にのびているため、その全体のプランを知ることはできないが、検出された範囲で言うならば、台状部径は、少なくとも3m×2.7m以上をはかり、台状部そのものと外周との比高は、約20cmをはかる。そしてこの方台部内において、その軸角を殆んど座標北と同じ方向にむける長方形の土壇(321-OO)が1基確認されているが、この土壇は長径1.86m、短径54cm、深さ10cmをはかり、埋土色調は黒褐色土である。なおこの埋土の中から、小さな破片であるが、櫛描直線文を伴う弥生式土器(壺形土器)片が出土している。

371-OX (第38図、図版22下)

371-OXは今述べた370-OXの東側約2mのところ隣接する、台状の遺構である。方台部の軸角は、先程の370-OXの主体部の軸角と同じく、ほぼ座標北に近い方向性を示している。長径約4m、短径約2.4mをはかり、台状部と外周部との比高は約15cmほどである。台状部の南端に長径94cm、短径56cm、深さ8cmほどの楕円状の土壇(322-OO)が1基検出されているが、埋土は隣接の321-OOと同じく、黒褐色土である。但し、遺物の出

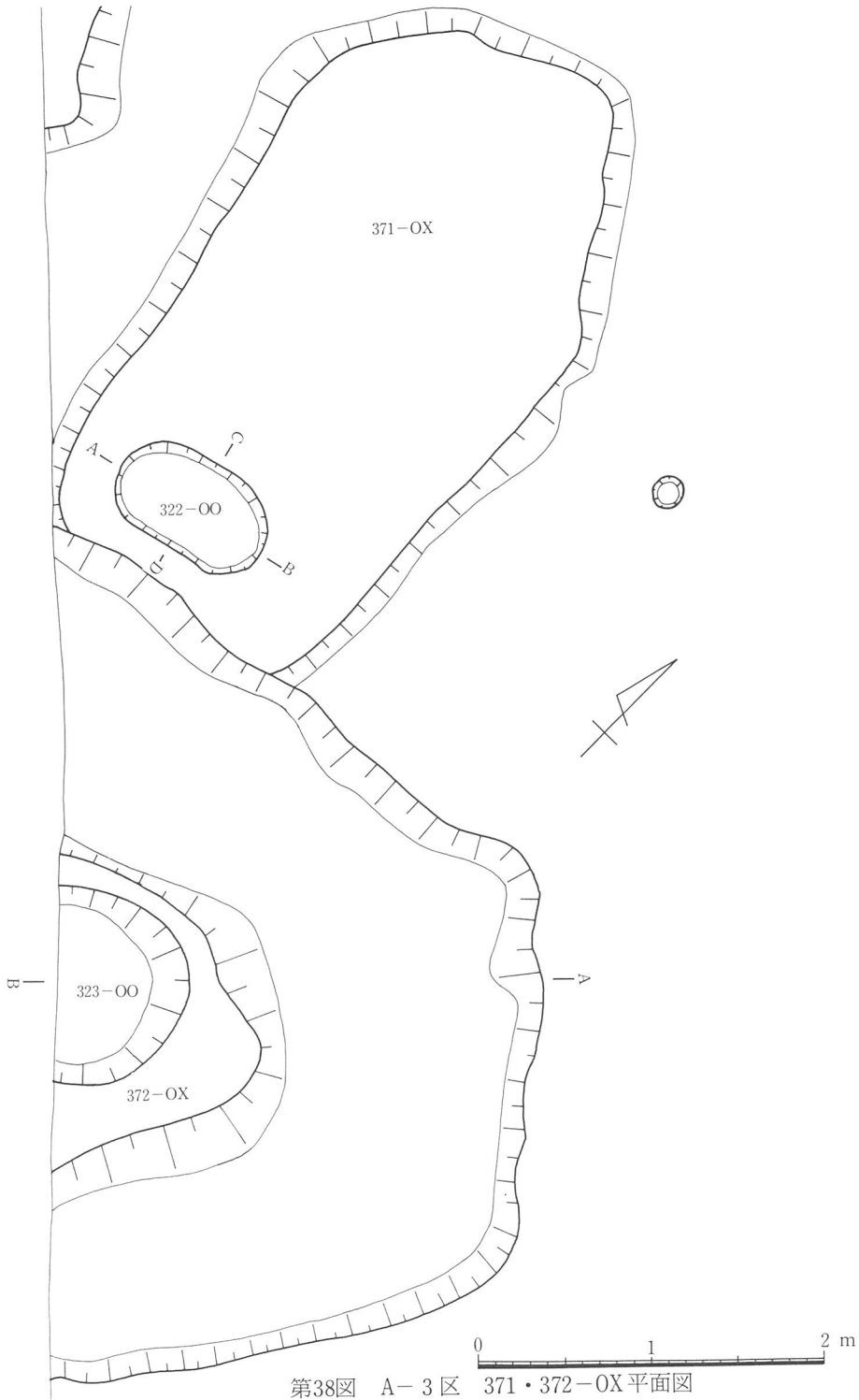


第37図 A-3区 370-OX 平・断面図

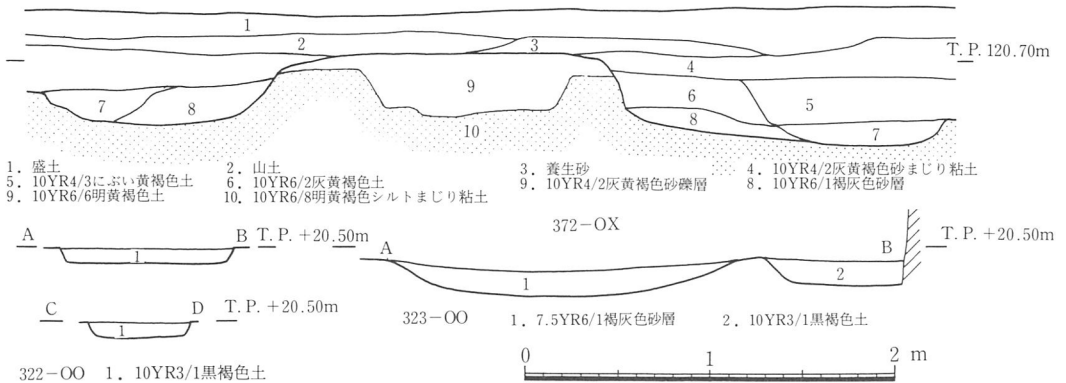
土は、この土壌からはみられなかった。

372-OX (第38、39図、図版23上)

372-OX は、今紹介した370-OX ならびに371-OX の2基の方台状遺構とは、軸角を異にする同種の遺構であるが、この372-OX は「周溝」を明確に確認できる唯一の遺構であって、方形周溝墓のひとつとして扱えてよいと考えている。方台部の径は、少なくとも2.2m×1.3m 以上をはかり、また周溝幅は1.2~1.8m 前後、深さは20~30cm 前後をはかるが、台状部において、径76cm×112cm 以上、深さ22cm 前後をはかる土壇状遺構(323-OO) が検出された。土壇内には、321-OO、322-OO の場合と同じく、黒褐色土がはいっているが、遺物は検出されなかった。また、周溝内には、褐灰色の砂層が堆積しているが、主体部と同じく、溝内からの土器の検出はみられなかった。



第38图 A-3区 371·372-OX平面图



第39図 A-3区 372-OX 断面図

373-OX (第40図、図版23下)

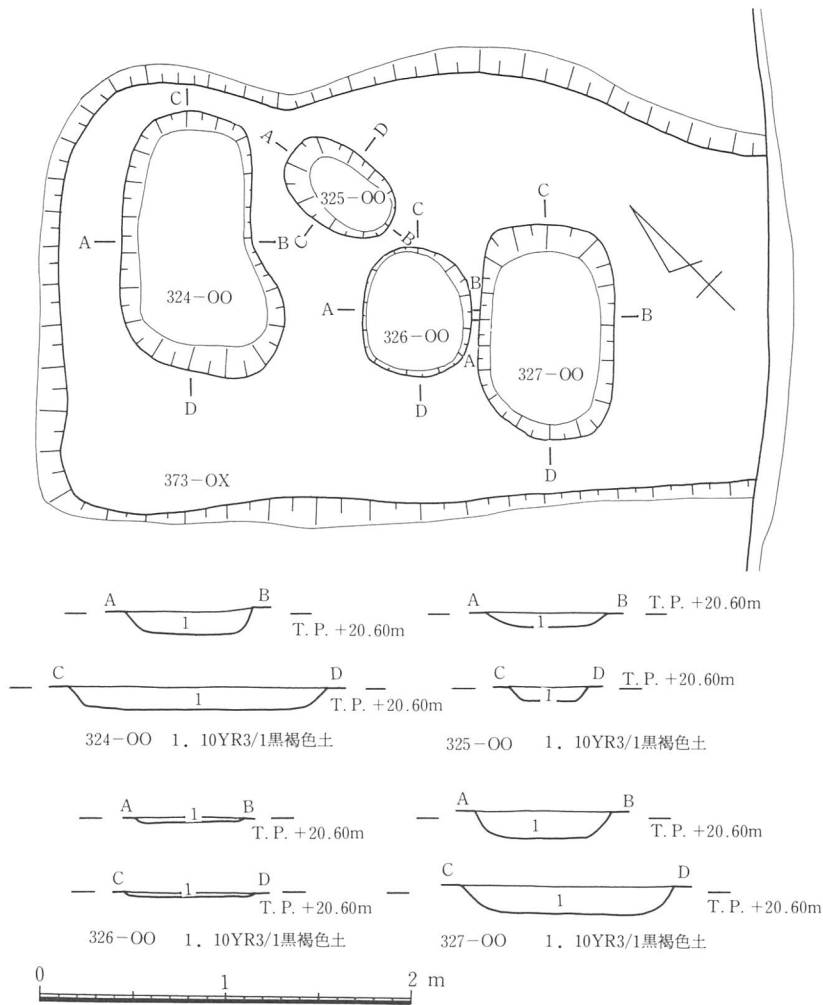
373-OX は、372-OX の東方約 7 m 付近で検出される台状遺構であるが、「方台部」と呼んでよいほど、形のととのったプランをしている。373-OX の場合、「周溝」と呼べるほどの明瞭な落ちをみいだすことはできなかったが、方台部上で、大小あわせて 4 基の土壌を検出しえたことは、複数埋葬という点で、他の台状遺構の様相とは、明確に区別されるべき特徴である。

方台部の軸角は、あるいは372-OX のそれに近似しているかとも思われるが、324~327-OO までの 4 基の土壌のうち、325-OO の 1 基以外は、基本的に同じ軸角を有しているものとみなしてよいと思う。

各土壌の形態もしくはその規模は、第40図に示した通りであるが、まず、324-OO は長軸160cm、短軸70cm、深さ12cmをはかる土壌であり、内部に黒褐色土を伴う。

また、これとは軸角を異にする325-OO は径66cm×42cm、深さ 8 cmをはかり、内部に黒褐色土を伴う土壌であり、また326-OO は径70cm×58cm、深さ 4 cm、埋土が黒褐色土の土壌である。加えて 4 基の土壌のうち、最も東端に位置する327-OO は、長径116cm、短径73 cm、深さ15cmをはかり、埋土色は同じく黒褐色の土壌である。勿論、これらの数値は、削平後の数値であって、本来は、もう少し大きな数値であったことは言うまでもない。

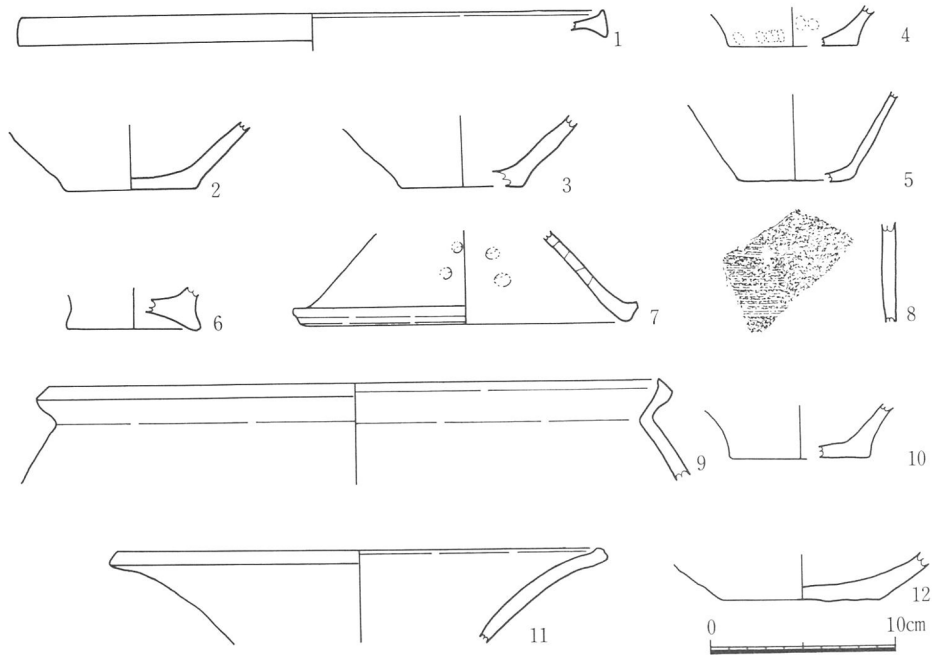
ところでこれらの 4 基の土壌を観察して看過することのできない点は、この373-OX における複数埋葬のあり方は恐らく、例えば、堺市菱木下遺跡における竪穴住居址の棟数と方形周溝墓の基数の対応関係から推定したように、「家族埋葬」の直接的反映であり、多分に成人 2 名、幼児 2 名の埋葬を想定せしめるものである。そして、これら 4 基の土壌の



第40図 A-3区 373-OX 平・断面図

うち、324-OOの一画にのみ、弥生式土器が集中的に供献されていたことの意味についても、私たちは考えていく必要があるが、ちなみに、この324-OOの一画から出土した代表的な土器をとりあげるならば、それは、第41図の(1)~(8)までの土器ということになるが、弥生時代中期の壺形土器の口縁部や底部、甕形土器の底部や鉢形土器の底部、そして高坏形土器の脚部などがそれである(図版63上-3~9)。被葬者の階層性が、今後、問われるべきであろう。

以上が、335-ORより南側で検出された台状遺構およびその主体部に関する報告である。



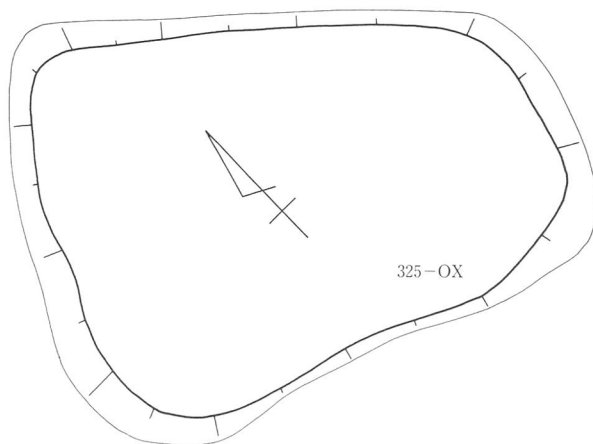
第41図 A-3区 遺構面直上・土壌内出土土器

続いて、今度は、335-ORより北側で検出された台状遺構について説明を加えることにする。

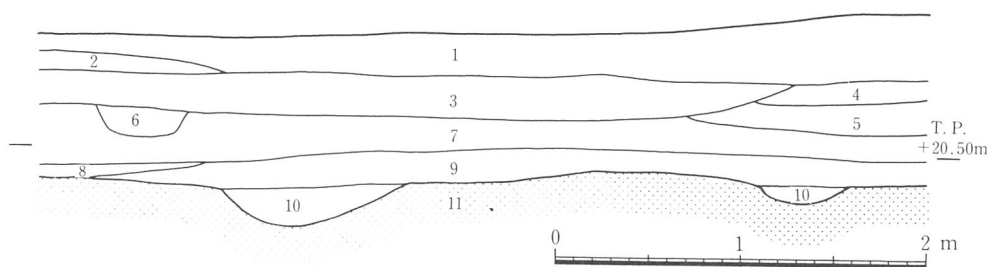
自然河川335-ORより北側で検出される台状遺構は374-OXから378-OXまでの合計5基である(図版24上)が、これらの中で特にとりあげたいのは、375-OX、376-OXならびに378-OXの3基の台状遺構である。

375-OX (第42図、図版24下)

375-OXは、335-ORの北側、センターポイントNo206およびNo207の中間点付近でみいだされる台状遺構である。この台形状のプランは長軸2.7m、短軸1.8m以上をはかるが、この台状遺構の上面は、フラットな面を形成しており、北壁断面を観察する時、明らかに幅48~100cm前後、深さ約10~20cmをはかる褐灰色シルトを伴う溝状遺構をみとめることができる。恐らくは試掘時の北側のSD-22と関連をもっているものと考えられる。台状部上面には、褐灰色砂層がおおっているが、砂層堆積をこうむる段階以前に大幅な削平を受けたのであろうか、主体部に相当するような土壌状遺構はついに検出することができなかった。また、遺物の出土もみられなかった。



- | | | | |
|------------------|-------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1. 盛土 | 2. 10YR4/6褐色粘土 | 3. 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂 | 4. 10YR4/6褐色砂層 |
| 5. 7.5YR5/8明褐色粘土 | 6. 7.5YR5/1褐灰色シルト | 7. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 | 8. 10YR4/2灰黄褐色砂礫まじり粘土 |
| 9. 10YR4/1褐灰色砂層 | 10. 10YR8/1灰白色シルト | 11. 10YR6/8明黄褐色シルトまじり粘土 | |



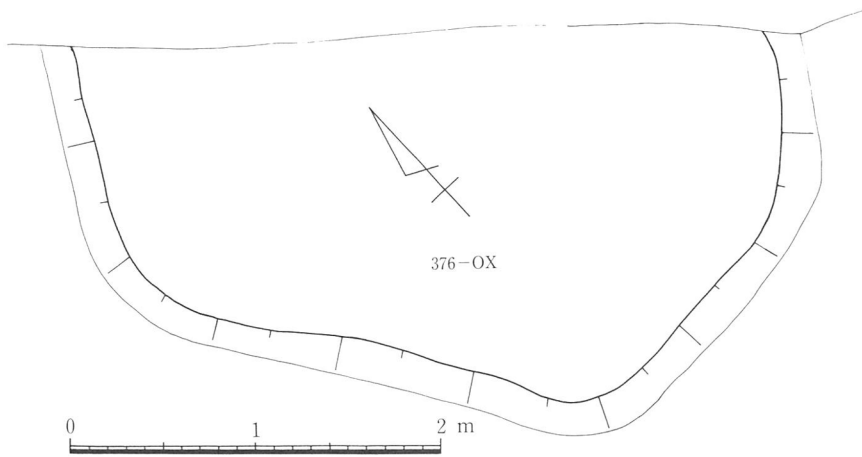
第42図 A-3区 325-OX 平・断面図

376-OX (第43図)

この325-OXのすぐ東側、2～3mのところにおいて検出されるのが、376-OXである。この台状遺構は、殆んどA-3区の東北端付近で検出される遺構であるが、台状部径3.8m×1.7m以上をはかり、周辺に溝状遺構を伴う遺構である。325-OXと同様、主体部の検出はできなかったが、その北壁断面および東壁断面において、溝状遺構を明瞭に把握することができた。但し、遺物の出土はみられなかった。

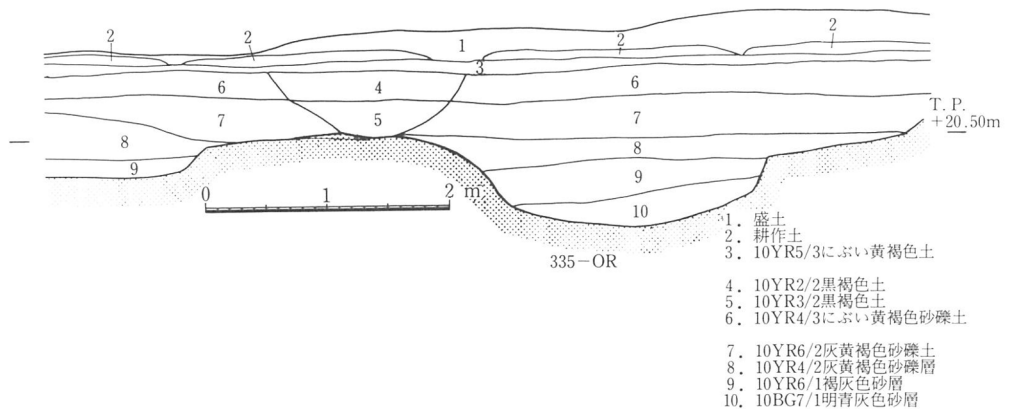
378-OX (第44図)

378-OXはA-3区調査区東端の中央付近で検出される台状遺構であり、この台状遺構に伴う東壁断面において、第44図に示したように溝状遺構の断面を確認することができる。この台状遺構の平面規模は、長軸3m×短軸2.4m以上をはかるが、この台状遺構の東側ならびに南側で検出される溝状遺構は、A-3区の中央部付近で検出され、東にのびつつ、やがて、センターポイントNo.207付近で北側にも分岐していく自然河川335-ORと同じ



第43図 A-3区 376-OX 平面図

ものである。これら溝状遺構の幅は130cm~380cm、その深さも30~70cm前後をはかるが、溝状遺構そのものと335-OR内に堆積している砂層もしくは砂礫層の相互の比較から、これら溝状遺構および自然流路は、ほぼ同時期に埋没したものとみなしてよいと思う。



第44図 A-3区 378-OX 東壁断面図

以上が、A-3区で検出される台状遺構についての報告である。そして現時点では、台状遺構内の土壇状遺構は、おおむね墳墓と規定してよいものと考えている。

ロ) 土壌 (第107図)

A-3区では、上述の台状遺構およびそれに伴う土壌状遺構のほかに、約20基弱の土壌を検出することができる。そして、これら土壌群は、そのほとんどは、明黄褐色シルトまじり粘土層直上で検出されるのであるが、その他に、一部その上を被覆する礫層上面においても、若干の土壌が検出される。以下、その点について述べることにする。

[礫層上層検出土壌]

まずはじめに、礫層上面においてみいだされる土壌状遺構について説明していきたい。

328-00 (第45図、図版25上)

土壌状遺構328-00は、A-3区の、特にセンターポイントNo206とNo207との中間地点付近、375-OXの西側約2～3mのところ検出される遺構である。長軸118cm、短軸88cm、深さ8cm前後をはかる土壌であり、埋土は砂礫まじりの黒褐色土である。この328-00からは、第41図の(9)、(10)に示したような、弥生時代の甕形土器の口縁部ならびに底部片などが出土している(図版63-10、11)。弥生時代中期(III～IV様式期)に属する遺物である。

A-3区における、礫層上面からきりこむ土壌としては、この328-00がもっとも顕著な土壌である。

[礫層下層、明黄褐色土直上検出土壌]

礫層をめくって検出される、もしくは、礫層をかぶらない明黄褐色土層上面で多数の土壌が検出されているが、A-3区の西端部からそれを追っていくと、センターポイントNo207付近に、先ず309-00、310-00、313-00などの西端土壌群を見出すことができる。また、その東方10m付近では、316-00、317-00、318-00、319-00、320-00などの中央土壌群、さらにそれより東方20m付近の、台状遺構周辺部に、329-00、330-00、331-00、332-00などの東端土壌群をみいだすことができる。

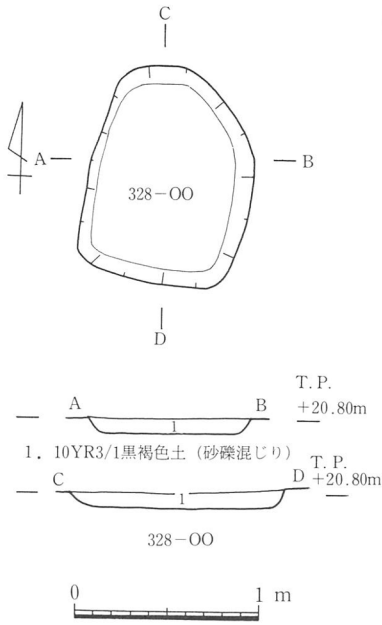
西端土壌群

309-00 (第46図、図版26上)

西端部は、殆んど礫層をかぶらない地域であるが、西端土壌群のひとつとして最初にとりあげたいのは、309-00である。長径106cm以上、短径96cm、深さ18cm前後をはかり、埋土は褐灰色土であるが、遺物は出土していない。

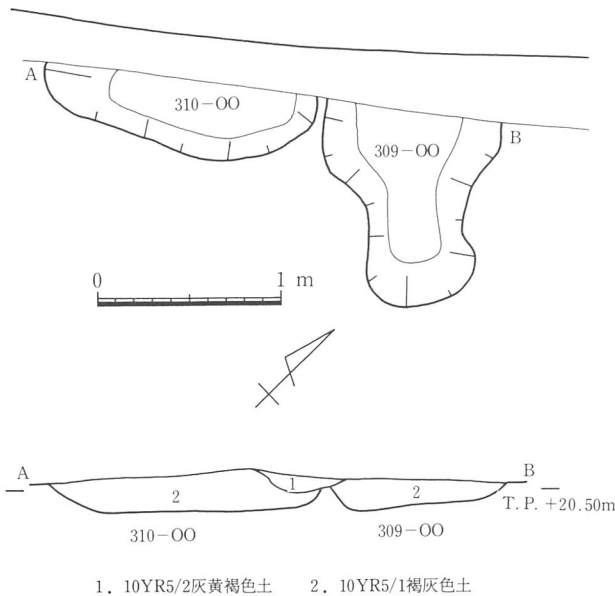
310-00 (第46図、図版26上)

この309-00に隣接する平面楕円形の土壌が310-00である。310-00は長径148cm、



第45図 A-3区 328-OO

平・断面図



第46図 A-3区 309・310-OO平・断面図

短径42cm、深さ20cm前後をはかる土壙であるが、埋土は309-OOと同じく褐灰色を呈する。遺物は特に出土していない。なお309-OOと310-OOの先後関係については、灰黄褐色の埋土を伴う、浅い溝状遺構によって両者のきりあい関係が消去されているため不明である。

311-OO (第47図、図版25下)

311-OOは長径65cm、短径57cm、深さ15cmをはかるほぼ円形に近い土壙である。埋土は309-OO、310-OOなどと同じく褐灰色を呈しているが、遺物は全く出土していない。なお、312-OOは311-OOに近接してはいるものの、後述するように、埋土は異っており、単純に同時期の土壙であると決めてしまうことはできない。

313-OO (第48図、図版26下)

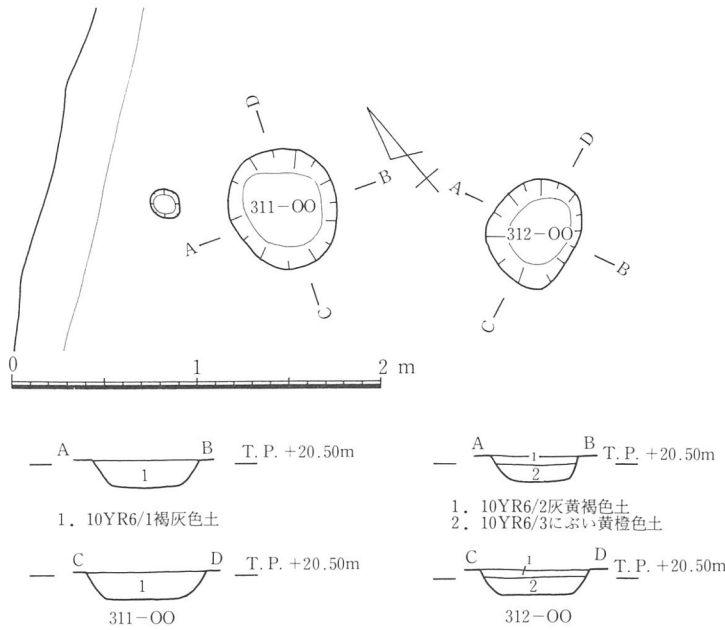
313-OOは長径108cm、短径70cm、深さ37cmをはかる平面楕円形の土壙である。埋土は下層に灰色砂質土、上層に褐灰色砂質土を伴うが、土壙内からの遺物の検出は全く見られなかった。

以上が西端土壙群の概要であるが、続いて中央土壙群に目をむけることにする。

中央土壙群

中央土壙群とは、316-OO、317-OO、318-OO、319-OO、320-OOの5基

の土壌をさしている。いずれも、礫層堆積を除去したあと、明黄褐色土層上面で検出される土壌である。



第47図 A-3区 311・312-00平・断面図

316-00

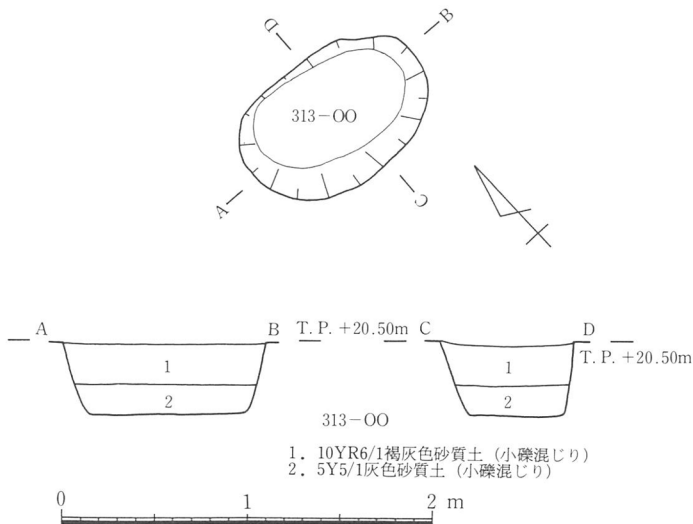
316-00 は、中央土壌群の中でも、もっとも北側に位置する土壌である。長径68cm、短径62cm、深さ10cmをはかる土壌であり、埋土は灰黄褐色、出土遺物は検出されなかった。

317-00

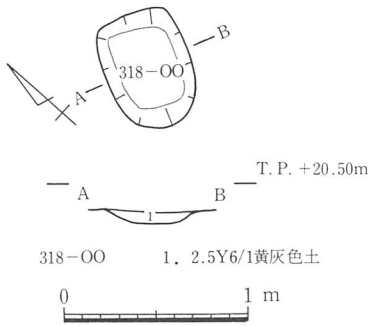
317-00 は長径60cm、短径30cm、深さ4cmをはかる土壌であり、埋土はにぶい黄灰褐色土である。316-00と同じく、遺物の出土はみられなかった。

318-00 (第49図)

318-00 は、センターポイントNo.205とNo.206との間、自然流路335-ORの西端部分より約3m



第48図 A-3区 313-00平・断面図



第49図 A-3区 318-00平
・断面図

ほど西によったところで検出される土壌である。長径64cm、短径48cm、深さ6cmをはかり、土壌内には黄灰色土がみられる。317-00と同じく、無遺物の土壌である。

319-00

319-00は、平面が楕円形を呈する長径70cm、短径44cm、深さ5cmをはかる、中に礫まじりの褐灰色土を伴う土壌である。遺物は全く検出されていない。

320-00

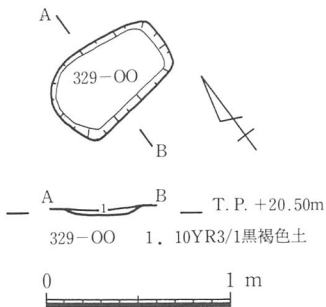
320-00も、平面形楕円の長径108cm、短径74cm、深さ6cmをはかる土壌であり、埋土は319-00と同じく、褐灰色土である。遺物は検出されていない。

このように中央土壌群には5基の土壌が存在するが、平面プランは比較的整ってはいないものの、特に317-00など土壌深度がきわめて浅いので、果して、本来的機能が何であったかなどの点については、不明である。

東端土壌群

329-00 (第50図)

A-3区東端の礫層下、明黄褐色土層上面で検出される土壌329-00は、長径70cm、短径44cm、深さ3cmをはかる土壌である。埋土は黒褐色土であり、遺物は検出されなかった。



第50図 A-3区 329-00平・断面図 主体部のひとつ、324-00などと方向性を一にし、373-OXに付随する土壌との印象が強い。土壌の大きさは長径150cm、短径78cmをはかり、深さは8cm前後である。埋土は329-00と同じく黒褐色土であり、1~2m東側の324-00とは異なり、遺物は全く検出されなかった。

330-00 (第51図)

330-00は、径42cm×38cm、深さ5cmをはかる。埋土は灰黄褐色土であり、土壌内からの遺物は同じく検出されない。

331-00 (第51図)

331-00は、372-OXおよび373-OXの間に位置しているが、どちらかという、373-OXの

332-00

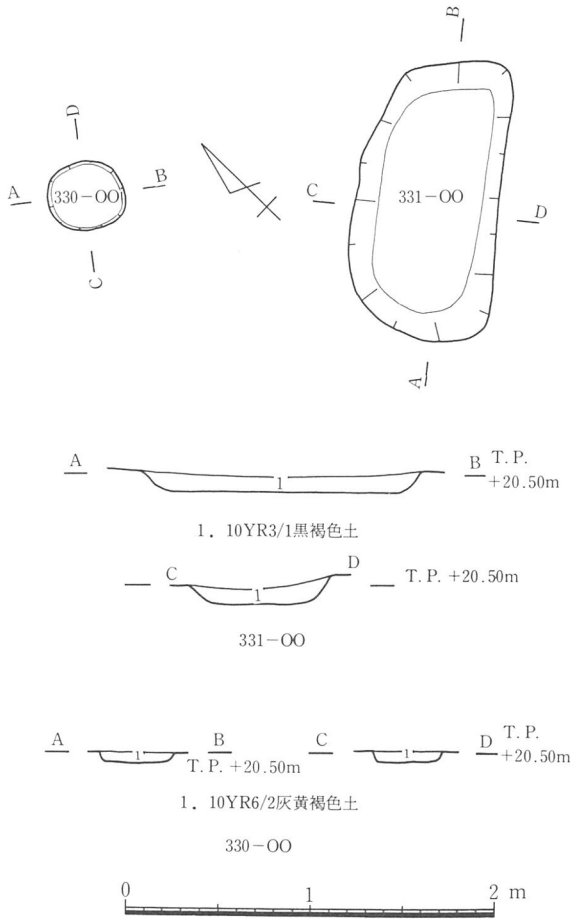
332-00 は、373-OX の南側 2～3 m 付近で検出された土壌であるが、プランの恐らく半分は南側擁壁の部分の一面に見い出される筈である。長軸の長さ90cm、短軸の長さ40cm、深さ10cmをはかる土壌であり、楕円形のプランが推定される。埋土は黒褐色土であり、これも遺物の出土をみなかった。

ハ) 溝状遺構 (第52図)

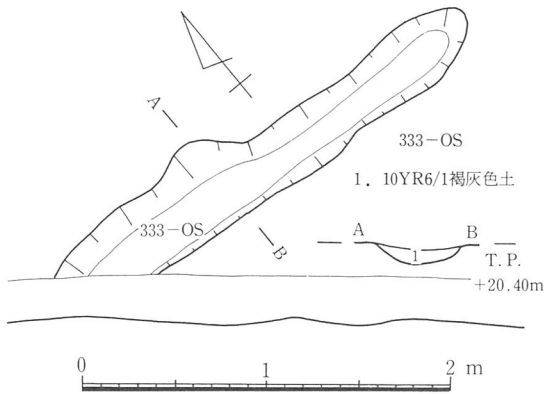
333-OS

A-3区において検出される溝状遺構は、センターポイントNo.205+10 m 付近の調査区南端で検出される333-OSが、唯一の溝状遺構である。全体的な形状がどのようなものであるのか把握しがたいが、少なくとも全長240cm以上、幅48cm、深さ8cmをはかる遺構であり、溝内には、320-00などと近似した褐灰色土がはいりこんでいる。礫層下で検出される遺構であるが、溝内からの出土遺物はみられなかった。この溝状遺構の性格は、不明である。

さて、以上にのべた、方台状遺構、土壌群、そして溝状遺構が、A-3区における弥生時代中期に属する、もしくは層位的に、それよりも相対的に古いと思われる時代の、遺構である。



第51図 A-3区 330・331-00平・断面図



第52図 A-3区 333-OS平・断面図

の指定史跡である摩湯山古墳や、馬子塚古墳、そして東山古墳などの古墳を造らしめた造墓主体、そしてその生産基盤をささえた民衆の生活痕跡である集落跡など、今後の調査によって、その実相が一層、明確化されてくる可能性は、きわめて高いといえる。今般の磯之上山直線関連の発掘調査をはじめとして、今後の周辺地域での発掘調査の成果が、十分に期待される。

〈古墳時代〉

A-3区において、明確に古墳時代の遺構であると断定できるものは、今般、検出されなかったが、ただ、先にみたA-3区包含層出土遺物の中に、古墳時代の遺物も数点含まれている（第33図-14・15）ので、近接区に古墳時代関連の遺跡が存在することは、想像に難くない。軽部池西遺跡の周辺に造営されている国

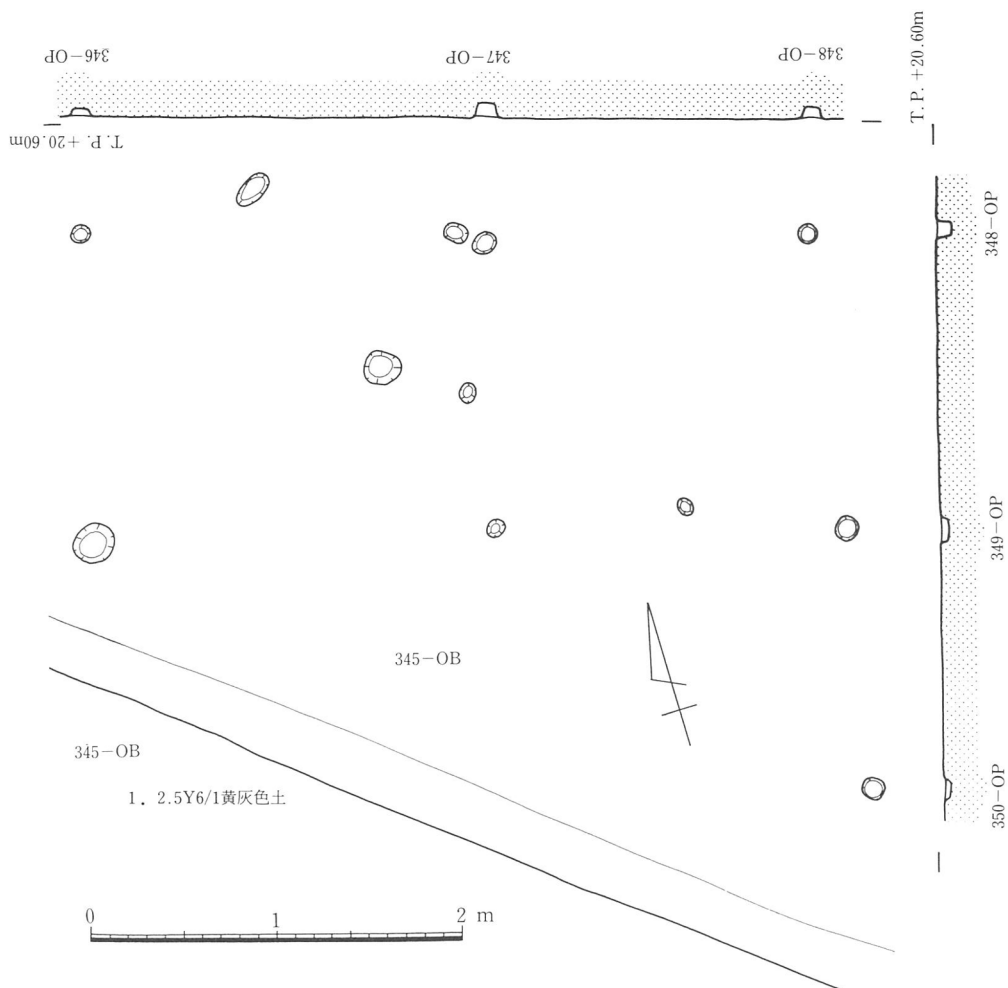
〈奈良時代以後～中・近世〉

A-3区において検出される、奈良時代以後の遺構として特にあげるべきは、掘立柱建物跡1棟と3基の土壌である。これらはいずれも、自然流路335-ORよりは西の区画、センターポイントNo.205からNo.206の範囲で検出されるものである。

イ) 掘立柱建物（第53図、図版26）

345-OB

A-3区の礫層をかぶらない、明黄褐色土直上で検出される掘立柱建物345-OBは、少なくとも2間×2間以上のプランをもち、柱間の距離は70～110cmをはかる、かなり不整な建物跡である。ピットの残存状態は、深さ4～8cm前後であまりよくないが、ピット内には黄灰色土がはいっており、中に若干の土師器片および瓦器片が見いだされる。軸角は座標北に対し、10.5ないし13.5度前後、東にふっており、周辺の条里の軸とは一致しない。古代末期から中世初期にかけての、簡易な小屋風の建物跡ではないかと考えている。



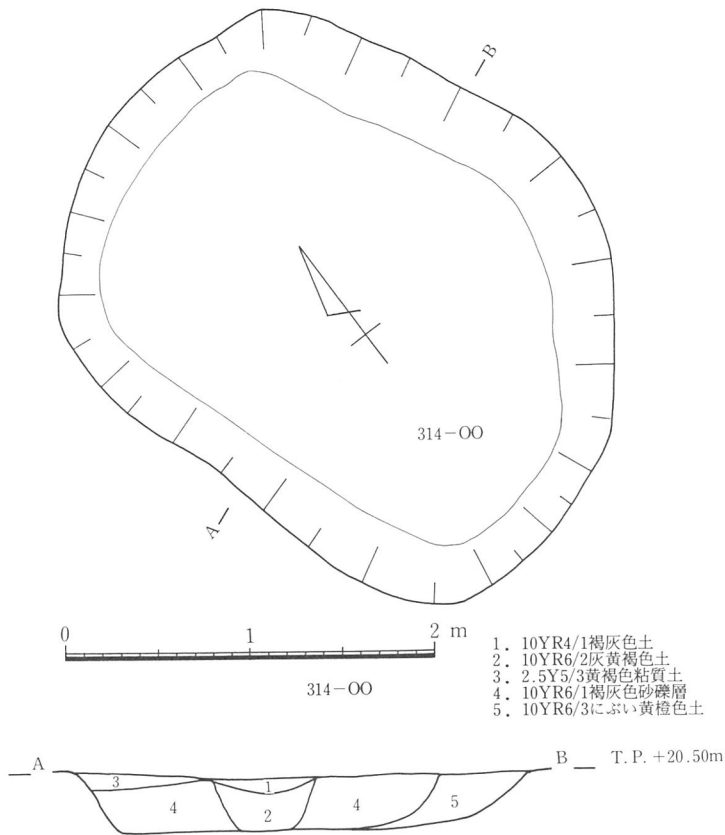
第53図 A-3区 345-OB平・断面図

ロ) 土 壙

A-3区で検出される、奈良時代以後に属すると思われる土壙は、312-OOを古墳時代の枠の中に含めてしまうならば、314-OO、315-OOの2基の土壙ということになる。

314-OO (第54図、図版27上)

314-OOは長径320cm、短径248cm、深さ28cmをはかる、やや大型の土壙であるが、断面を観察するとにぶい黄橙色の上に褐灰色の砂礫層、黄褐色粘土などが溜まりこみ、さ



第54図 A-3区 314-00平・断面図

土師器壺の口縁部などが出土している(図版63-12)。但し、同一土壌内から、須恵器や瓦器片も出土しており、一応、古代末期から中世にかけての土壌であると判断している。機能や性格は不明である。

以上が、A-3区における奈良時代以後、とりわけ中世の遺構についての説明である。

c) 小 結

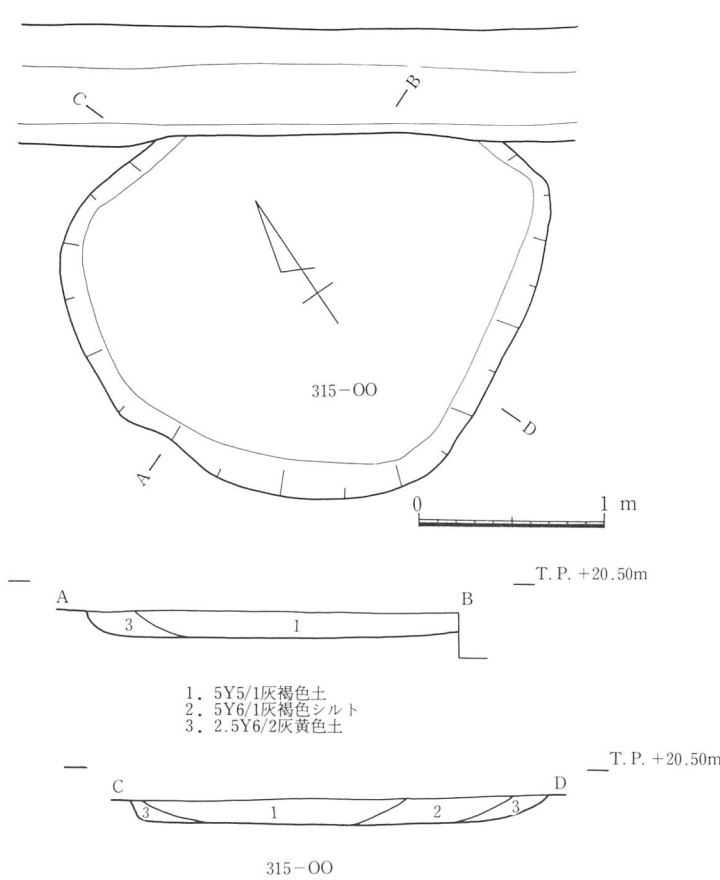
以上、この項では、A-3区における遺構と遺物について論述してきた。その全景は、第107図、そして図版27下に示した通りであるが、この調査区で、人々の生活痕跡が確実にみえはじめるのは縄文時代後期以後であるが、特に検出された自然河川335-ORや明黄褐

らに後になって、小さな掘削がなされたプロセスを知ることができる。遺物として、若干の土師器片、瓦器片が出土している。

315-00 (第55図)

土壌315-00は、調査区の北端、自然流路335-ORの西側約4m付近で検出される土壌であるが、径224cm×200cm以上、深さ14cm前後をはかる土壌である。

灰黄色土、灰褐色土などが土壌内に推積しているが、第41図- (II)に示したような



第55図 A-3区 315-00平・断面図

においては、礫層堆積の上面で、328-00などの土壌状遺構が検出されることになったが、これは当初全く予想していないことであった。砂礫層のきわめて粗いあり方などからして、この面での遺構検出は恐らくほとんど無理であろうと考えていたし、また「試掘報告」自体も、礫層上面での遺構については全く注意を喚起していなかったこともあって、この面での遺構の存在は、ほとんど頭の中にはなかった。但し、実際の調査の過程の中で、仔細にみると褐色系の礫層堆積の中に、時おり、黒褐色の土壌状のプランのみえるところがあり、これらが単なる黒褐色のしみのようなものではなく、明確に土壌状遺構であったことは、たとえば、328-00などを発掘してみることによって明らかとなった点である。そして、A-3区は、礫層堆積の広汎に拡がる場所であり、このような土地が居住地として、或いは耕

色の遺構面直上から検出された、土器類や石器類がそのことをよく示していた。狩猟や採集の生活をベースとしていたことは明らかであるが、居住の場所である竪穴住居址や埋葬場所である土壙墓などは、この面では検出されなかった。

弥生時代については、遺物の上からは、前期的な内容はみることができなかったが、但し、弥生時代中期になると人々の生活のあとは、明瞭にみえはじめる。すなわち、A-3区に

作地として必ずしも適切でないことは瞭然としているが、他方、墓域としての利用価値があったことだけは、確かなことである。

弥生時代の遺構は、この礫層上面からだけではなく、この礫層堆積を除去したあとの明黄褐色土層上面でも検出されるが、この面では、自然流路335-ORの南北に合計9基ほどの台状遺構や、調査区の西端、中央、東端のそれぞれの部分で、約20基弱の土壇群、溝状遺構などを検出することができた。但し、遺構内からの出土遺物はきわめて少なく、僅かに、台状遺構373-OXに伴う主体部、324-OO直上から弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式期)に属する弥生式土器が、供献的に見いだされた程度である。この面における時期決定はきわめて困難であるが、礫層上面において弥生時代中期の土壇(328-OO)が検出されており、また礫層下面の373-OX自体も弥生時代中期に属すると考えられるので、礫層堆積そのものの形成時期は、弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式)、特にその古い方の段階に位置づけてよいものと考えている。

但し、ここで注意を払っておきたい点は、それでは、明黄褐色の遺構面がすべて層位的に弥生時代中期に属するかということと必ずしもそうではなく、礫層堆積下で検出される試掘時に「谷部」と推定された、低く凹んでいる遺構面についてはそのように言いえても、明黄褐色土の面自体が、高く、あるいは隆起して礫層堆積を伴っていないような、たとえばA-3区西半部のようなところでは、(当初、ほりこみ面はそれぞれに異っていた可能性があるが、)同一遺構面上で弥生時代の遺構だけではなく、古墳時代やそれ以後の時代の遺構も検出されるという点である。掘立柱建物345-OBや土壇312-OO、314-OO、315-OOなどは同じ明黄褐色土層上面で検出される遺構とはいえ、時代的にはより後出的な、古代～中世にかけての遺構であった。

さて、以上がA-3区における調査知見であるが、続いてA-4区に目をむけることにする。(久米)

参 考 文 献

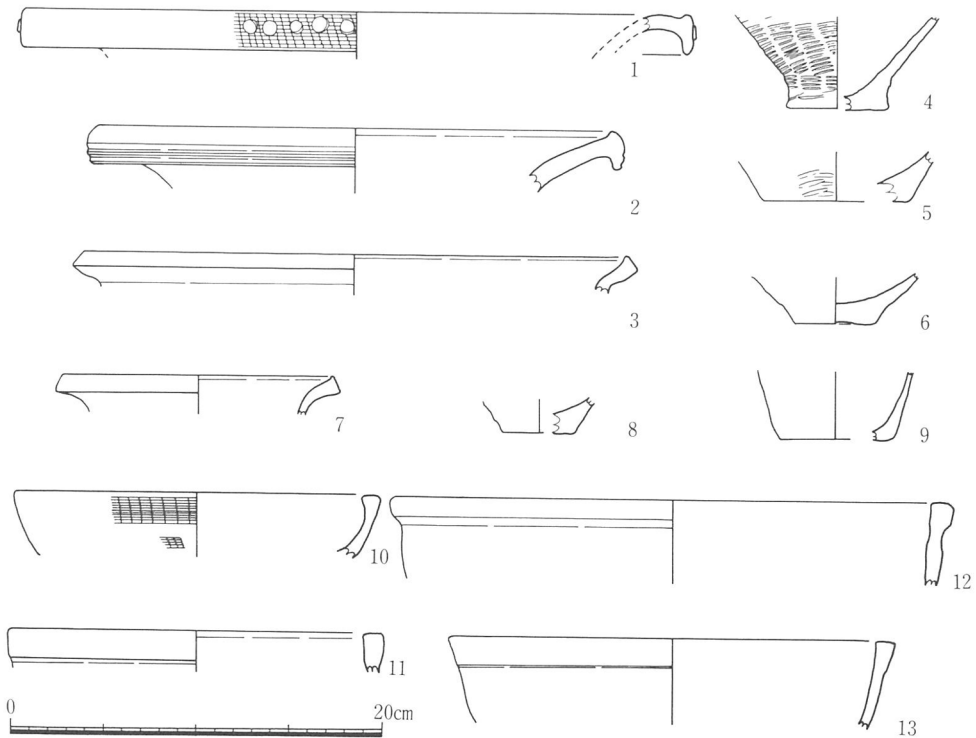
- (1)「軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・Ⅱ」(大阪府教育委員会 1985年3月)
- (2)「第2 阪和国道内遺跡発掘調査概報-板原遺跡-」(大阪府教育委員会 1980年3月)
- (3)「府道松原泉天津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ-菱木下遺跡-」(大阪文化財センター 1984年3月)

4) A-4区の遺構と遺物 (図版3・4・8)

A-4区は、今まで述べてきたA-3区の東接区を意味し、路線内のセンターポイントでいえば、丁度No.207からNo.210までの区間、国土座標でいえば、おおよそ $X = -169,992$ 、 $Y = -53,080$ 付近からはじまり、 $X = -170,048$ 、 $Y = -53,024$ にまで至る区間をさしている。

a) 基本層序

先ず、A-4区における基本層序は、基本的にはA-3区のそれと近似していて、たとえば、A-4区南壁断面を観察する時、黄褐色土層の上面に、にぶい黄褐色の砂礫層や、にぶい黄色土が包含層としてかぶっていることを知ることができるが、全体的にみて、A-4区の方が基盤層が高くなっており、従って、逆に削平後、残された包含層の厚さも総じて薄いものとなっている。第57図中段の東壁断面の観察からわかるように、あるところ



第56図 A-4区 包含層・砂礫層内出土土器

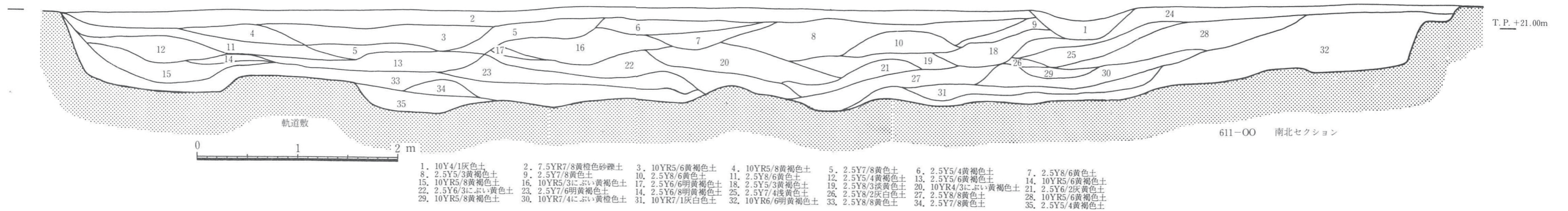
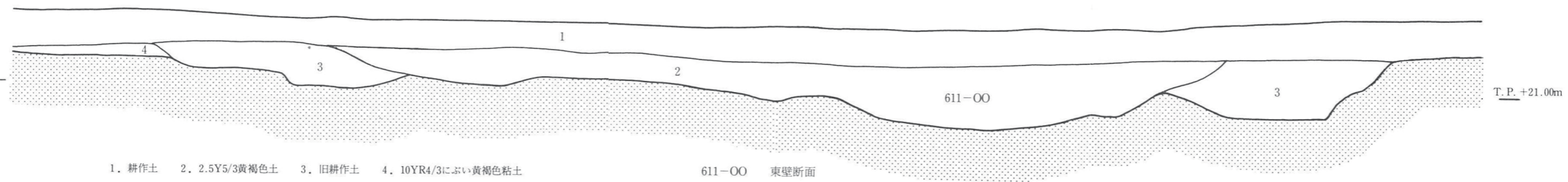
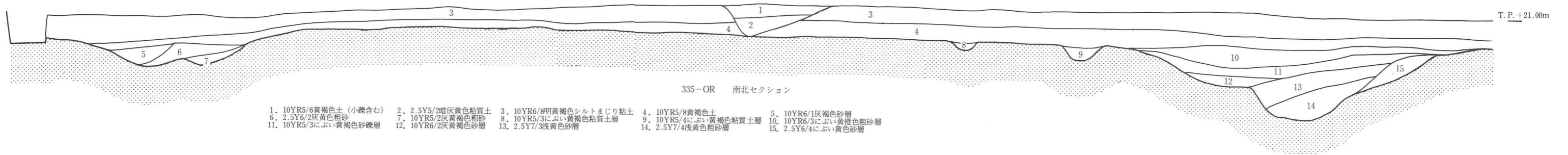
では、耕作土を除去すると、すぐに黄褐色土の遺構面があらわれるところもある。

黄褐色土の上にある包含層ならびに砂礫層内からの出土遺物は、第56図に掲げた通りであるが、これらのうち包含層から出土した遺物は、(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(10)、(11)、(12)、(13)の遺物(図版64-1・2・4・11・9・7・6・8, 3・5・10・12)、他方、砂礫層内から出土した遺物は、後述する縄文土器を除くと(6)、(7)、(8)、(9)の遺物などである(図版64-15・13・16)。先ず、包含層からの出土遺物であるが、(1)は簾状文の上に円形浮文をはりつけた壺形土器、(2)は口縁端部に凹線文を伴う壺形土器、(3)は甕形土器の口縁、(4)、(5)はそれぞれ甕形土器の底部、(10)は簾状文の装飾を伴う鉢形土器、(11)もほぼ同じ口径の鉢形土器、そして、(12)、(13)はこれらより少し径の大きい鉢形土器である。他方、砂礫層内からの出土遺物であるが、(7)は甕形土器の口縁、(6)、(8)、(9)は甕形土器の底部である。また、石製品として、第36図の(10)のような、磨石も出土している(図版74-2)。

b) 遺構各説(第107図)

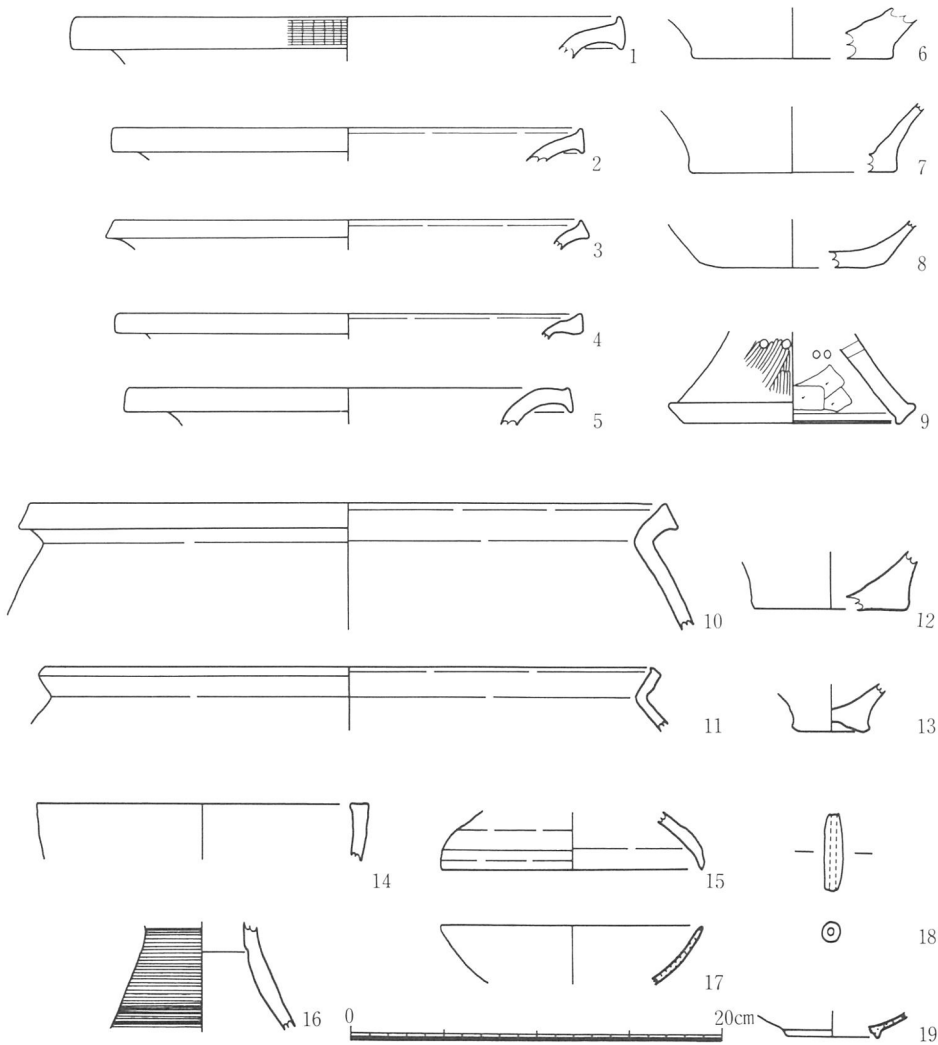
A-4区における遺構の調査については、昭和59年度の「試掘調査」結果によると、その北側擁壁部分において、溝状遺構SD-23や性格不明のSX-8、SX-9などが、また南側擁壁部分においては、溝状遺構SD-23、SD-24、SD-25、土壇状遺構SK-14、SK-15、性格不明遺構であるSX-11、SX-16、SX-17などが報告されている。このうち、SK-14については、出土した弥生土器、すなわち壺、甕、無頸壺の破片などから弥生時代中期後半の時期、SX-17も、出土した弥生の壺、高坏、甕の破片から、同じく弥生時代中期後半、他方、SX-11は弥生時代の遺物のほか、土師器羽釜、須恵器坏、瓦器、瓦質播り鉢、丸瓦、平瓦片などを出土していて、13世紀代の遺構であると報告されている。

これらの試掘調査の結果をふまえつつ、A-4区の全体的な調査をすすめたのであるが、このA-4区の調査区域では、時代順に言えば、先ず、A-4区西半部で、縄文時代後～晩期以後の遺物を出す自然流路335-ORの続きが確認されたほか、A-4区全般において、弥生時代中期(III～IV様式期)の土壇群が、約30基近く検出されたこと、しかもそれら土壇群は、A-3区の場合と同様、礫層上面と明黄褐色土層上面との二面で確認されること、またA-4区の東端部では、古墳時代のものと思われる掘立柱建物跡が検出されたこと、またA-4区中央部分では、数基の中世土壇が確認されたことなどが、調査によって得られた知見である。



第57図 A-4区 335-OR・611-OO断面図

このような黄褐色土層上面において、少なくとも弥生時代以降、古墳時代をへて中世に至るまでの遺構が検出されるという現象は、第58図の(1)～(19)の遺構面直上出土遺物、すなわち弥生時代の壺形土器、甕形土器、高坏形土器、鉢形土器のほか、須恵器の坏蓋、高坏、そして中世の瓦器塊、土錘などの出土とも内容的に対応し、合致する傾向である（図版64-17・22・21・18・19・24・20、65-2～4・1・6）。その他、A-4区東半部では、大形土壙611-00が検出され、その土壙の掘削自体は、遺構の原状をかなり大幅に破壊して



第58図 A-4区 遺構面直上出土土器

しまつてはいるものの、但し、その中に投棄されたかなり大量の遺物から、軽部池西遺跡本来の様相を、極めて間接的ではあるが、概括的に推定しうることも、今回の調査による看過できない成果のひとつであるといえる。

以下、叙上の諸点について、詳しく述べることにする。

〈旧石器時代〉

A-4区においても、A-3区の場合と同様、明確に旧石器時代に属すると思われる遺構と遺物の検出はなされなかった。

〈縄文時代〉

A-4区において、明確に縄文時代の生活痕跡が検出されるのは、主として砂礫層内および黄褐色土の遺構面直上、加えて335-ORの自然流路内においてである。

砂礫層内から出土した遺物は、第35図の(1)～(8)までの遺物であるが、表面の摩耗・剝離したものが多く(図版63-19・17・18・16・20・21)。深鉢が主流であると思われるが、特に(1)などは、中津もしくはその直後の時期に相当するものと考えられる。後期初頭ないしは、後期前半の遺物と考えられる。

この砂礫層下、黄褐色の遺構面直上においても、縄文時代に属すると思われる遺物が、何点か出土している。殆んど文様の判別できない土器片のほか、第36図の(8)、(9)に掲げた鋭い刃部をもつ剥片石器などがそれである。サヌカイト製であり、風化がすすみ、きわめて白っぽい色調を呈している(図版73-12・8)。

次に縄文時代後期以後の遺構と考えられる自然流路335-ORについてふれることにする。

イ) 自然流路(335-OR)(図版37～40、73-上)

A-3区で検出された自然流路、335-ORの東端部をA-4区西端部でもう一度確認し、それを東方、すなわち上流方向へむかって追っていくと、礫層堆積の下、黄色粘土層上面において、東方にむかって二方向に分岐する335-ORを検出することができる(図版37～39)。その平面図は第107図に示した通りであるが、A-3区で検出された時には幅2～4m前後、深さ約80～100cmをはかったのに対し、A-4区では幅0.8m～3.5m、深さ30～74cmと、流路そのものがだんだんと幅狭く、また浅くなりつつある様相を知ることができる(第56図上段)。また、試掘時の、南北擁壁部分で検出されたSD-23は、いずれもこ

の335-ORが、No207+14m付近の両側端で、調査区外に流出する個所と一致しているようである。そして、南側擁壁部分のSD-24も、335-ORのもう一つの分岐であることが判明した(図版40)。

A-4区における335-OR内からの出土遺物としては、土器の類が一点も出土せず、剥片石器が数点出土したのみである。その代表的なものが、第36図の(4)と(5)および(7)に掲げた石器であり、自然面を僅かに残しつつも、各々一方に鋭い刃部を有するスクレイパー状の石器である(図版73-5・6・7)。

さて、この335-ORに関し、所見としてひとつ付け加えておくべきことがある。それは335-OR内には、試掘所見と同様、灰褐色、灰黄色、灰黄褐色、浅黄色などの砂層堆積が確認されるのである(図版38下)が、この流路状遺構は、東へ伸びていくに従って、だんだんと明黄褐色土、或いは黄褐色土の下方へと、但しレベルを少しも下げないで、むしろ上手に向ってそのレベルを上昇させつつ、もぐりこんでいくということである。

この現象は、すでにセンターポイントNo208付近でみえはじめたが、果たしてこの様相がどのように継続し、また自然流路335-ORの上方がどのような様相を呈するのか、その点をたしかめるべく、No208付近から更に東方へ5mほど掘りすすめていったが、その断面は、砂層堆積を伴ったまま安定した形状を呈しており、明らかに明黄褐色土層より下層で検出される、相対的により古い淵源をもつ流路状遺構であることが判明した。後述するように、明黄褐色土層上面においても、多数の土壌が検出されているので、それらを不必要に損壊しないために、途中で掘削を停止したが、その際計測した調査区を横断する南北断面は、先程、第57図上段で示した通りである。但し、東側に僅かに5~6m離れた隣接区に検出される、幅14m、長さ30m以上、深さ66~100cm前後をはかる大土壌611-OOの内壁西側断面には、流路状遺構の断面を観察することはできないので、恐らく335-ORの南北それぞれの上端部は、いずれも調査区外に流路をとっているものと予測される。

いずれにせよ、ここで大切なことは、335-ORの切りこみ面は、A-3区東半やA-4区西半などでは、一見、黄褐色土層上面からきりこんでいるかにみえたが、しかし、それは、あくまでも上層堆積のない場所でのことであって、プライマリなかたちとしては、自然流路335-ORは、明黄褐色土層よりは下層の時期に機能していたことをみおとしてはならない。あるいは、335-OR内の出土遺物が、縄文時代後期もしくは晩期の土器のみに特定されているということが高く評価するならば、この流路を縄文時代の流路と特定することも可能と思われる。

〈弥生時代〉

A-4区において検出された弥生時代の遺構は、そのほとんどが土壌状遺構であり、A-3区と同様、砂礫層上面で検出される土壌群と、明黄褐色土層直上で検出される土壌群との二者がある。全体で約30基近くの土壌群が検出されたが、その内容は以下の通りである。

イ) 土 壌 群

〔礫層上層検出土壌〕

A-4区の礫層上層で検出される主な土壌としては、西端部付近における585-00、586-00、587-00、そして東へ少し離れて588-00、589-00、また、No.208+10m 付近の調査区中央部南端付近における594-00、595-00、596-00、597-00などがそれである。以下においては、西端土壌群、中央土壌群の大きく二つのグループにわけて論ずることとする。

西端土壌群

585-00、586-00、587-00 (第59図、図版28・29)

585-00、586-00、587-00の3基の土壌は、第59図が示すように、いずれもセンターポイントNo.207+8 m 付近の調査区西南端において見いだされる土壌群である。

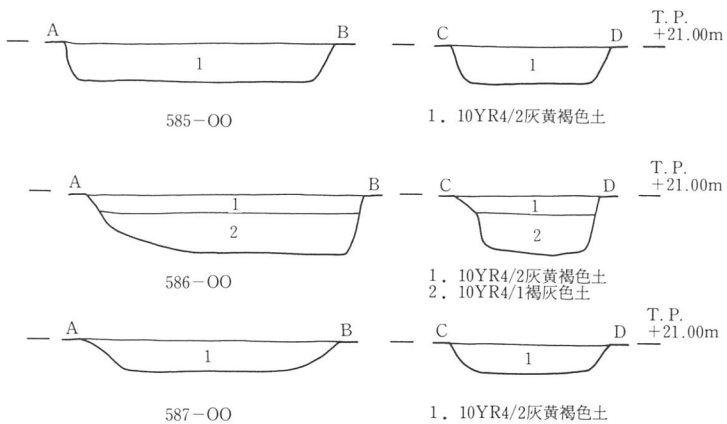
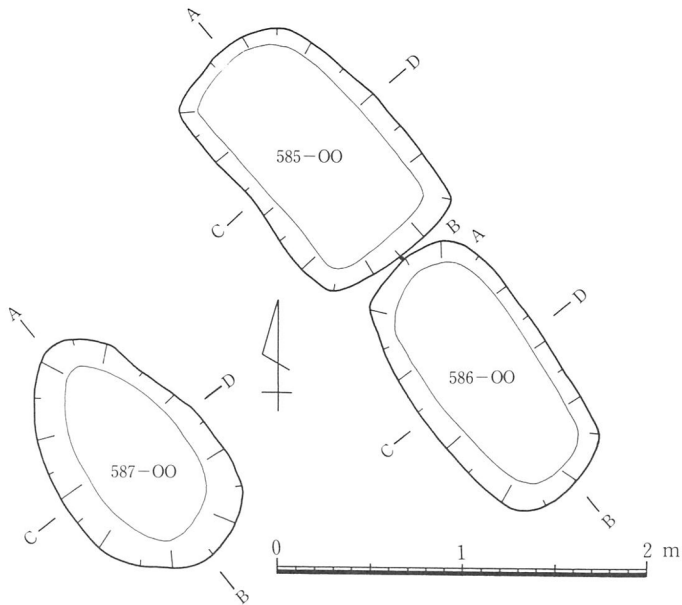
585-00は、長径146cm、短径88cm、深さ20cmをはかる隅丸長方形のプランをもつ土壌であり、土壌内部には灰黄褐色土がはいっているが、遺物はまったく検出されなかった。

586-00は、今のべた585-00と全く同じ軸性をもつ土壌であるが、長径150cm、短径80cm、深さ32cm前後をはかる長楕円形の土壌である。上層に灰黄褐色、下層に褐灰色の埋土をもつが、遺物の出土はみられなかった。

587-00は、これも585-00や586-00と殆んど軸性を同じくする土壌であるが、長軸146cm、短軸87cm、深さ約16cmを測る楕円土壌である。埋土は、同じく灰黄褐色を呈するが、出土遺物は検出されていない。

588-00 (第60図、図版28上・29下)

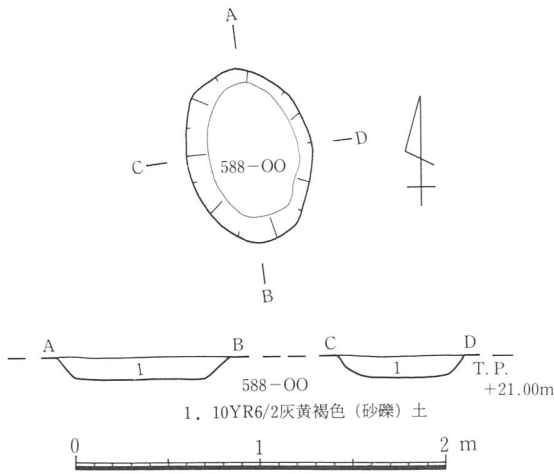
588-00は、今紹介した、585-00、586-00、587-00の東南方向に約5 mのところ検出される砂礫層上層土壌のひとつであるが、平面的には、丁度、第60図に示したように、楕円形のプランを有し、長径94cm、短径68cm、深さ約11cmをはかる土壌である。埋土は礫まじりの灰黄褐色土を伴うが、遺物は出土していない。



第59図 A-4区 585~587-OO平・断面図

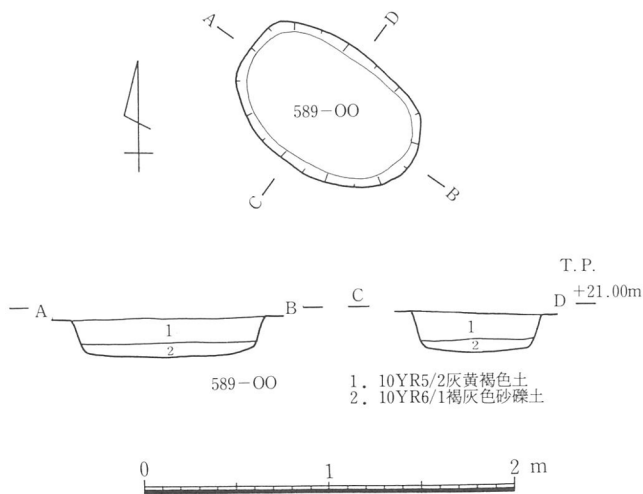
589-OO (第61図、図版28上)

589-OO は、588-OO の東方約7cm付近で検出される楕円形のプランをもつ土壙である。長径106cm、短径72cm、深さ約25cmをはかり埋土は大きく二層から成りたっており、上



第60図 A-4区 588-OO 平・断面図

層に灰黄褐色土、下層に褐灰色砂礫土を伴う土層である。この土層のあり方は、586-OOと近似しており、もし仮に、この砂礫層上層の土層を埋土によってグルーピングすることが可能であるならば、585-OO、587-OO、588-OOの一群と、586-OO、589-OOの一群との二種にわけられることも可能であろう。この589-OO内からも遺物の出土はみられなかった。



第61図 A-4区 589-OO 平・断面図

える場所でもある。

中央部土層群のうち、礫層堆積上面で検出される土層は、594-OO、595-OO、596-OO、597-OOなどである。それらの土層について、以下にする。

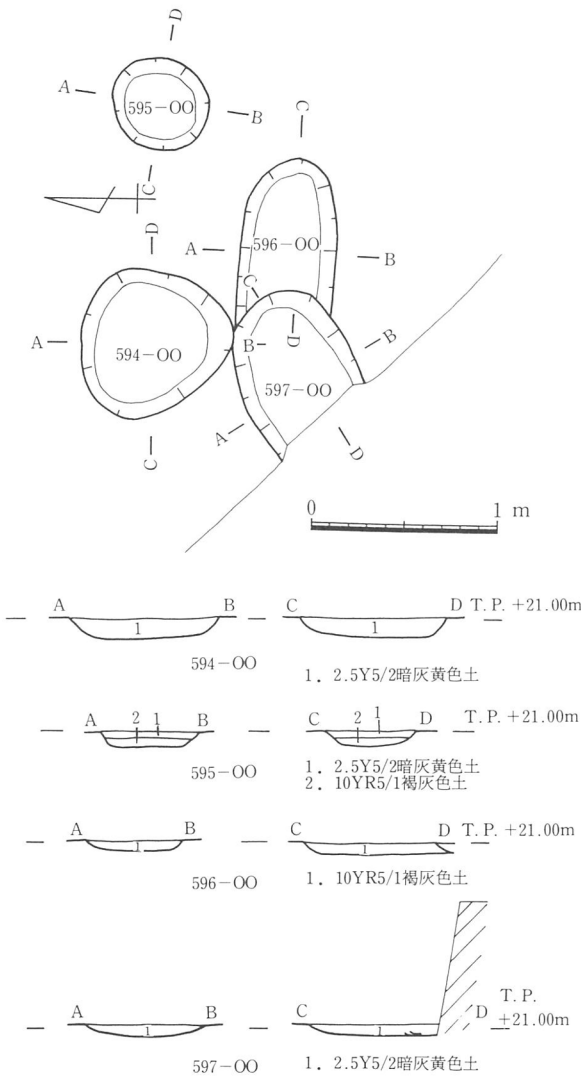
中央土層群

A-4区の中央部付近にくと、土層状遺構は今まで以上に密度高く検出されるようになる。このあたりは「試掘調査」の時点では「谷部」と呼ばれていたところの丁度端部に相当するが、従って、黄褐色土層そのものが急激な高まりをみせ、それに伴って、その上にかぶっていた礫層堆積が薄くなり、あるいは、とだ

594-OO、595-OO、596-OO、597-OO (第62図、図版30上)

594-OO は、長径82cm、短径78cm、深さ10cmをはかり、暗灰黄色土を埋土としてもつ、不整形円形の土壙である。土壙内からは、若干の弥生式土器片が出土している。

595-OO は、径52cm×50cm、深さ約8cmをはかる、ほぼ円形の土壙であるが、土壙内では、上層に暗灰黄色土、下層に褐灰色土の二層の堆積が認められる。遺物の出土は、この土壙からはみられなかった。

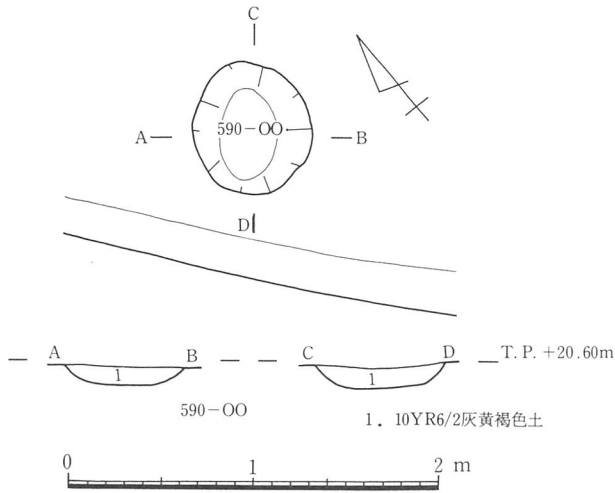


596-OO は、長径70cm以上、短径52cm、深さ6cmをはかる土壙であり、褐灰色の埋土をもつ。この土壙からも、僅かながら、弥生式土器片が出土した。

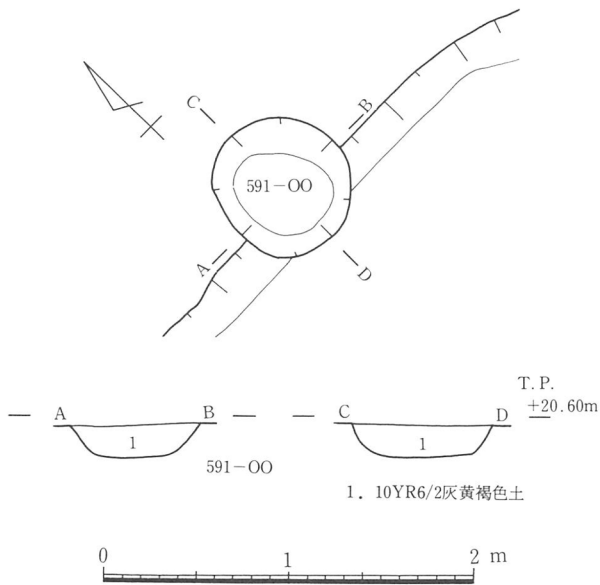
597-OO は、今のべた596-OOをきるかたちで検出された、楕円形のプランをもつ土壙である。長径68cm以上、短径64cm、深さ6cm前後をはかり、埋土は暗灰黄色土を有す。この土壙内からも、少数の弥生式土器片が出土しており、この一群は、先程のべた585-OO、586-OO、587-OOなどの礫層上層土壙の一群とは異って、(小さなプランである595-OOをのぞけば)すべて遺物を伴う土壙群としてちがった様相を呈している。

第62図 A-4区 594~597-OO平・断面図

以上が、礫層上層で検出される主要土壌の説明である。



第63図 A-4区 590-OO 平・断面図



第64図 A-4区 591-OO 平・断面図

〔礫層下層・黄褐色土直上
検出土壌〕

A-4区内で、礫層を除去してその黄褐色土直上で検出される土壌は、調査区の西端部で見いだすことのできる、590-OOと591-OOの2基の土壌である。

西端土壌群

590-OO (第63図)

590-OOはA-4区の西南端隅で検出される、長径70cm、短径64cm、深さ10cmをはかる、ほぼ円形のプランをもつ土壌である。埋土は灰黄褐色を呈しているが、出土遺物は検出されなかった。

591-OO (第64図)

591-OOは、A-4区の西北端で検出され、自然流路335-ORをきるかたちで確認された径76cm×71cm、深さ17cmをはかる、ほぼ円形の土壌である。590-OOと同様、埋土は灰黄褐色を呈しており、遺物の検出は

みられなかった。

これら2基の土壌は、礫層堆積のひろがるA-4区西端部において、礫層堆積を除去したあとあらわれる明黄褐色土層上面において検出された土壌である。

次に、A-4区 No.208-209付近で検出された、中央土壌群について、説明を加えることにする。

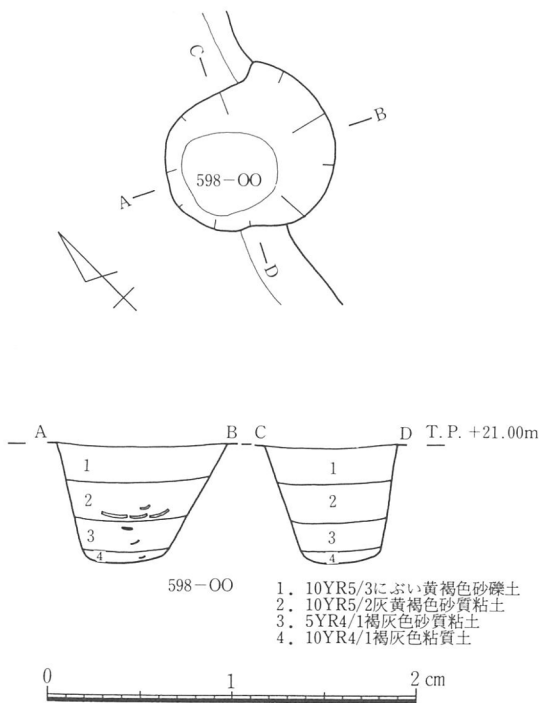
中央土壌群

598-00 (第65図、図版31上・32)

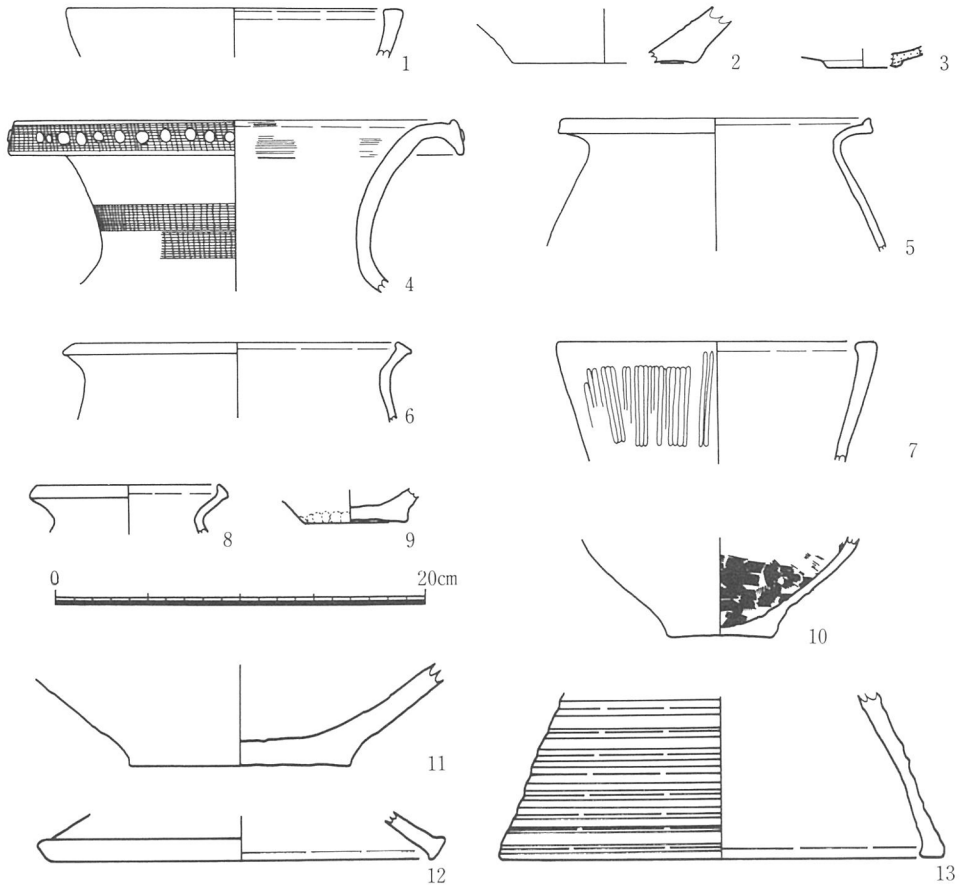
598-00は、A-4区の礫層堆積のきれなる東端部分、すなわち、試掘の時点で「谷部」と呼ばれた地形のおちこみが、緩やかにあがりきるところで検出される、長径94cm、短径

72cm、深さ62cmをはかる土壌である。土壌内部には、褐灰色の粘質土、褐灰色の砂質粘土、灰黄褐色の砂質粘土、そしてにぶい黄褐色の砂礫土などが堆積しているが、内部から、かなり顕著な仕方で土器が出土している。

その代表的な土器の幾つかは、第66図に示した通りであるが、この図の中の、(4)、(5)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)の遺物が、この598-00から出土した遺物である。(4)はきめ細かな簾状文を有する壺形土器であるが、口縁端



第65図 A-4区 598-00平・断面図



第66図 A-4区 土壌内出土土器

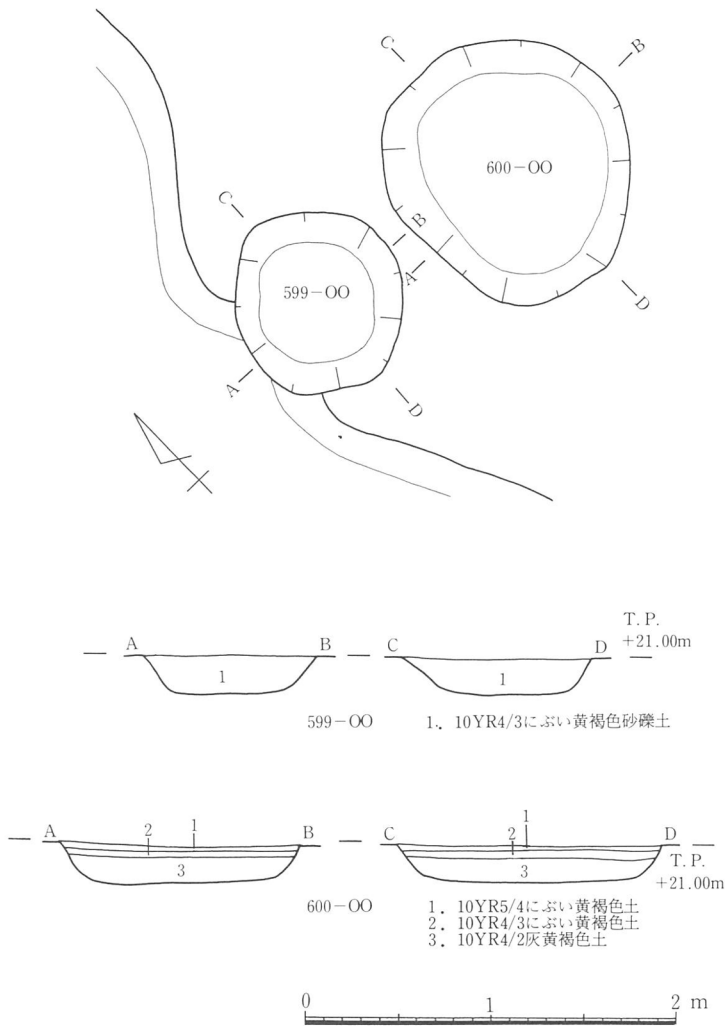
部には簾状文の上に、円形浮文が施されている。(5)、(6)は甕形土器の口縁部、(8)は小形甕の口縁部である。(7)は鉢形土器の破片であり、外面には丁寧なへらみがきが施されている。(9)、(10)は、壺形もしくは甕形土器の底部である。全般的に、弥生時代中期(Ⅲ様式期)の様相を色濃く反映している。ほかに第77図の(134)に示したような凹み石も出土している(図版65-13・14・16・18・17、15、74-4)。

599-00、600-00 (第67図、図版30下)

今のべた598-00の南へ約3mのところまで2基の土壇が検出される。599-00ならびに600-00がそれである。

599-00は、長径104cm、短径94cm、深さ約20cmをはかる、ほぼ円形に近い土壇である。

埋土は、にぶい黄褐色の砂礫土であるが、この599-00内からも数点の弥生式土器が出土している。出土した遺物は、第66図の(11)、(12)、(13)の遺物であるが、(11)は壺形土器の底部、(12)は高环形土器の脚部、そして、(13)は器台形土器の裾部である。弥生時代中期、殊にIII～IV様式の時期の遺物であるとみてよいであろう（図版65-21・19）。



第67図 A-4区 599・600-00平・断面図

この599-00の東側に隣接するのが600-00であるが、600-00は599-00に比して、プランがひとまわり大きく、長径142cm、短径128cm、深さ20cm前後をはかる土壇である。埋土は、灰黄褐色土のほか、にぶい黄褐色土（但し、2層に分離できる）が堆積しているが、この土壇からの遺物の出土はみられなかった。

603-00、604-00
（第107図、図版33上）

603-00は、長径50cm×短径36cm、深さ10cmをはかる土壇であり、下層に黄褐色粘質土、上層に灰

黄色土を伴う、楕円形の土壌である。出土遺物はみられなかった。

この603-00に西接する604-00は、長径60cm×短径40cm、深さ約10cmをはかる楕円形の土壌であるが、埋土の堆積状況は、603-00と同様である。遺物は出土しておらず、時期は決しがたい。

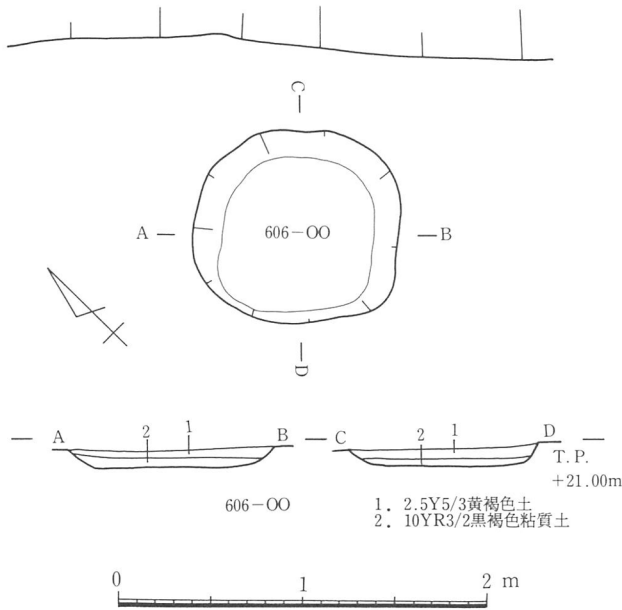
埋土の近似性から、603-00、604-00ともに、弥生時代の可能性がある。

中央土壌群は以上にのべた通りであるが、続いてNo.209～210付近で検出された東端土壌群についてふれることにする。

東端土壌群

606-00 (第68図)

606-00は、センターポイントNo.209付近の、調査区東南端で検出される土壌である。長径112cm、短径102cm、深さ9cm前後をはかり、土壌内には黒褐色土、そして黄褐色土の堆積が観察される。出土遺物としては、弥生式土器片が数点検出されている。



第68図 A-4区 606-00平・断面図

607-00 (第107図)

607-00は、606-00の東南、約5m付近で検出される土壌であるが、長径126cm、短径62cm以上、深さ8cm前後をはかる楕円形の土壌である。土壌内には、埋土として褐色の粘質土がはいっており、遺物としては、若干の弥生式土器が出土したが、より細かい時期的な判断は困難である。一部、611-00によって損壊を蒙っている。

608-00 (第107図)

608-00 は、607-00 の東南、約 2 m 付近で検出される土壌であるが、径56cm以上×39cm以上、深さ約 8 cmをはかる。埋土は607-00 と同様、褐色の粘質土が入っているが、遺物は全く出土しなかった。この土壌も、611-00 によってきられているが、607-00 との関連などから、弥生時代中期の土壌である可能性が高い。以上が、A-4 区における礫層下層ならびに黄褐色土直上で検出された土壌の説明である。

さて、ここまですら要約してみるならば、A-4 区における弥生時代の遺構としては、主として礫層上層で検出される西端土壌群 (585-00~589-00)、中央土壌群 (594-00~597-00)、また礫層下層もしくは黄褐色土直上で検出される西端土壌群 (590-00、591-00)、中央土壌群 (598-00、600-00)、東端土壌群 (606-00~608-00) などを検出することができたのであるが、A-4 区全体における遺構の分布は、その殆んどが土壌であると言ってよい。

その性格および機能についてであるが、礫層堆積の上面で検出された土壌などは、粘土採取といった用途のものとは考えがたいし、また遺物を伴わない土壌であるから、土器廃棄用の土壌などとも考え難く、基本的には土壌墓ととらえてよいのではないかと判断している。他方、黄褐色粘質土層直上で検出された土壌については、598-00 などは、そのほり方断面のあり方と遺物の出土の仕方から考えて、生活遺物廃棄用の土壌としてとらえてよいと思うが、但し、それ以外の土壌については、一応、砂礫層上層での検出土壌と黄褐色土上層での検出土壌が同一レベルで確認されること、また黄褐色土層上面で検出される土壌のプランが、周辺土壌とも近似しており、且つ周辺の礫層上層検出土壌が墳墓であると考えられる、その立地環境から堆して、恐らく基本的には、「土壌墓群」を想定してよいのではないかと考えている。

当然、これら被葬者の生活舞台である竪穴住居址や水田址など、近接地に検出されてよい筈であるが、今般の調査範囲の中では、それらの遺構を検出することはできなかった。

以上が A-4 区における、弥生時代に関する調査知見であるが、続いて、古墳時代以後の遺構と遺物についてふれることにする。

〈古墳時代〉

A-4区においても、A-3区の場合と同様、明確に「古墳時代」と断定しうる「遺構と遺物の一括関係」は遂に確認されなかったが、但し、第58図の(15)、(16)にも掲載したように、遺構面直上からの須恵器環蓋、須恵器高坏の出土など、明確に古墳時代以後の遺物を出土しているものであり、今後、古墳時代の遺構が近接区にみいだされるようになる可能性は、きわめて高いといえる（図版65-2・3）。

イ) 掘立柱建物 (621-OB)

A-4区東北端隅で616-OP、617-OP、620-OPなどで一棟の掘立柱建物が復元されると思うが、この建物が、ピット内から出土した須恵器片ともからんで、古墳時代の建物となる可能性がある。

ロ) 土 壙

土壙については、次の項でふれることにする。

〈奈良時代以後～中・近世〉

A-4区で検出される奈良時代以後の遺構としては、No208～209の間でみいだされるいわゆる中央土壙群（592-OO、593-OO、602-OO、605-OO）とNo209～210の間でみいだされる東端土壙群（609-OO、610-OO）との二種をあげることができる。そして、前者の中央土壙群が、西側の礫層堆積上層で検出される土壙群と東側の黄褐色土層上面で検出される土壙群との二群にわかれることは、従前通りである。

〔礫層上層検出土壙〕

礫層上層で検出される土壙は、592-OOならびに593-OOの2基の土壙である。

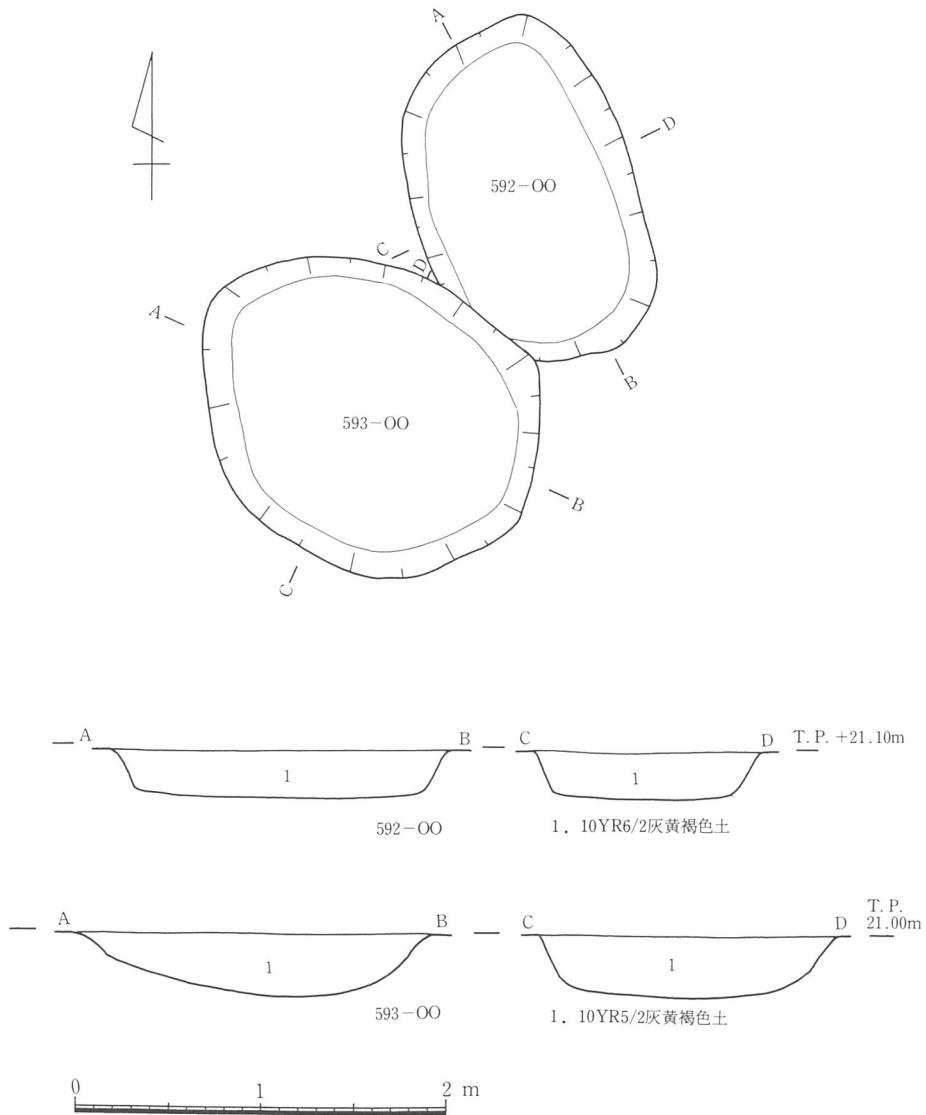
中央土壙群

592-OO、593-OO （第69図）

592-OOは、分岐した自然流路335-ORを覆う礫層堆積上面からきりこむ土壙である。長径184cm、短径122cm、深さ24cm前後をはかる楕円形の土壙であり、埋土は灰黄褐色を呈

し、第66図の(1)、(2)のような弥生式土器の鉢形土器口縁や甕形土器の底部などを出土するのである(図版65-20)が、僅かながら瓦器片を伴うので、中世土壌と判断している。

593-00は今のべた592-00をきるかたちで検出される土壌である。長径194cm、短径160cm、深さ32cm前後をはかり、埋土は592-00と同じく灰黄褐色土を呈し、土壌内からは、土師器片や第66図の(3)のような瓦器片が出土している。593-00は592-00よりは相対的に古い、中世もしくは中世以後の土壌であると考えられる。



第69図 A-4区 592・593-00平・断面図

〔黄褐色土直上検出土壌〕

中央土壌群

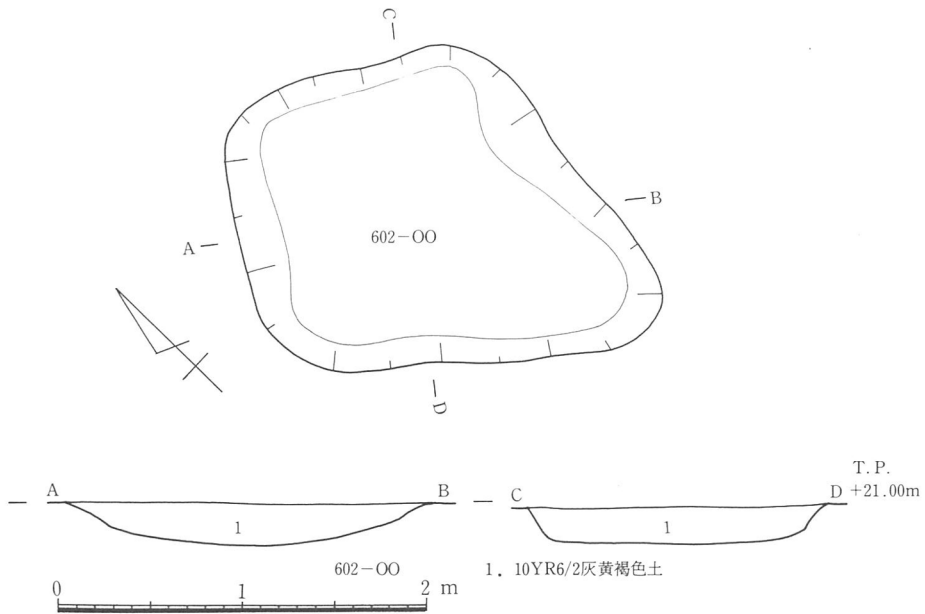
A-4区の中央土壌群の中でも、黄褐色土層直上で検出される土壌がある。598-00の東方約3m付近で検出される602-00と600-00の南方約6m付近で検出される605-00との2基の土壌である。

602-00 (第70図、図版31下)

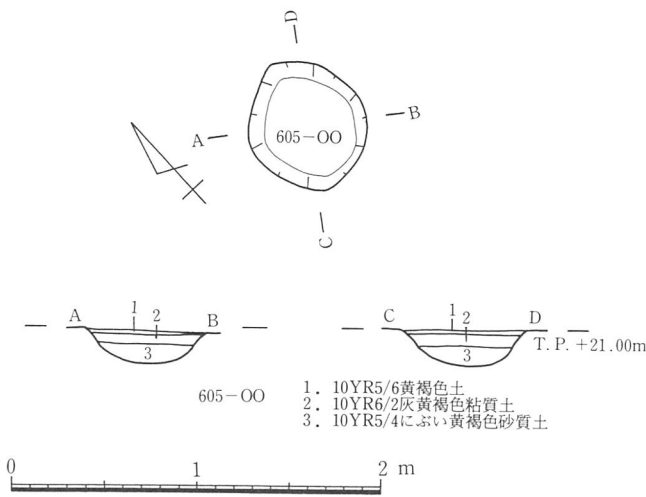
602-00は第70図に示した通りのプランを有しているが、長径200cm、短径164cm、深さ22cm前後をはかる土壌である。埋土は灰黄褐色を呈しており、土壌内部からは、土師小皿、瓦質甕などを出土している。中世の土壌とみなしてよいと思う。

605-00 (第71図)

605-00は径68cm×64cm、深さ約18cmをはかる、ほぼ円形の土壌であり、土壌内には、黄褐色砂質土、灰黄褐色粘質土、そして黄褐色土の層位での堆積が観察される。土壌内か



第70図 A-4区 602-00平・断面図



第71図 A-4区 605-OO平・断面図

609-OO (第107図)

609-OO は、A-4区の東北端隅の621-OBのすぐ北側で検出される、径66cm×59cm、深さ6cmをはかるほぼ円形の土壌である。埋土は黄灰色の粘質土であり、一部、炭化物を伴っている。遺物は出土していない。

610-OO (第107図)

610-OO は、A-4区東南端付近で、大土壌611-OOによってきられるかたちで検出される土壌である。プランは残存部分をみるかぎり、隅丸長方形を呈しているようにみえるが、長軸120cm以上、短軸62cm以上、深さ約6cmをはかる土壌である。埋土は灰黄褐色土であり、遺物は特に検出されなかったが、埋土の様子は、中世土壌605-OOなどに近似している。

以上が礫層上層、ならびに黄褐色土直上で検出された、奈良時代以後、とりわけ中世に属すると思われる検出土壌の説明である。

c) 小 結

A-4区における遺構説明は、今のべた通りであるが、その内容は、基本的にはA-3区での成果の延長線上にあるといってよい。そこで、ここでは冗長な重複をさけ、かわりに補論でもって、その不足をおぎないたいと思う。

らは、弥生式土器片の他、瓦器片や平瓦の破片が出土している。中世の土壌と考えている。

東端土壌群

黄褐色土直上で検出される土壌のうち、東端部で検出されるのは、609-OO、610-OOの2基である。

補論) 大型土壇611-00の調査

611-00は、第107図を見るとわかる通り、A-4区東半部、黄褐色土直上で検出される、長軸35m以上、短軸14m前後をはかる、当該調査区最大の土壇である(図版33・34)。深さは、断面図第57図下段が示す通り、60~100cm前後をはかるが、ところどころ、土壇底部において、幅120~200cm前後、比高約20cmをはかる通路状の高まりを観察することができる(図版35・36上)。これが採取粘土運搬用の軌道敷であったことは、後述する通りである。

I 611-00の出土遺物について

この611-00からの出土遺物は、きわめて厩大であって、その内容は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青・白磁、瓦、砥石と、時代的には随分と長期的かつ広汎な内容を伴っていることが判明した。

次に、具体的にその出土遺物のうちの幾つかを紹介することにする。

縄文時代の土器(第35図、図版66)

先ず、611-00から出土した多数の遺物のうち、縄文時代に属する主な土器であるが、それは、第35図の(12)~(20)に掲載した通りである。出土遺物の特徴から推せば、その殆んどが縄文時代後期前葉もしくは後期中葉に属する遺物であって、その器種組成も縄文時代中期の伝統をひいて、深鉢が中心的であって、あと僅かに注口土器などが加わる様相をみせている(図版66-2・7~9・1・10・11・6・12。66-3~5)。

一般に、縄文時代後期前・中葉の土器は、「瀬戸内中部が文様展開のイニシアチブを握ったと思われる中津式・福田K II式の時期と、近畿地方に起源を求めうる北白川上層式~元住吉山I式の時期に細分しうる」(泉拓良「近畿地方の土器」・『縄文文化の研究』4 所収 雄山閣 1981年)が、軽部池西遺跡出土の縄文土器に関して言えば、それは明らかに後者の特徴(北白川上層式~元住吉山I式)をそなえるものである。換言するならば、縄文時代後期初頭を中津式ないし天理K式並行期に、後期前葉を北白川上層1・2式並行期に、後期中葉を北白川上層3式並行期、一乗寺K I式並行期、元住吉山I・II式並行期に相当させるならば、軽部池西遺跡の出土土器は、おおむね北白川上層式の2・3式を中心とし、他に一乗寺K I式、元住吉山I式の特徴を有する土器群であることが明瞭である。

たとえば、波頂部にやや粗略化された渦巻文を有する深鉢形土器(12)、(13)は、恐らく、北白川上層式の2~3期に並行する土器であり、内面に沈線を有する(17)の土器は、北白川上

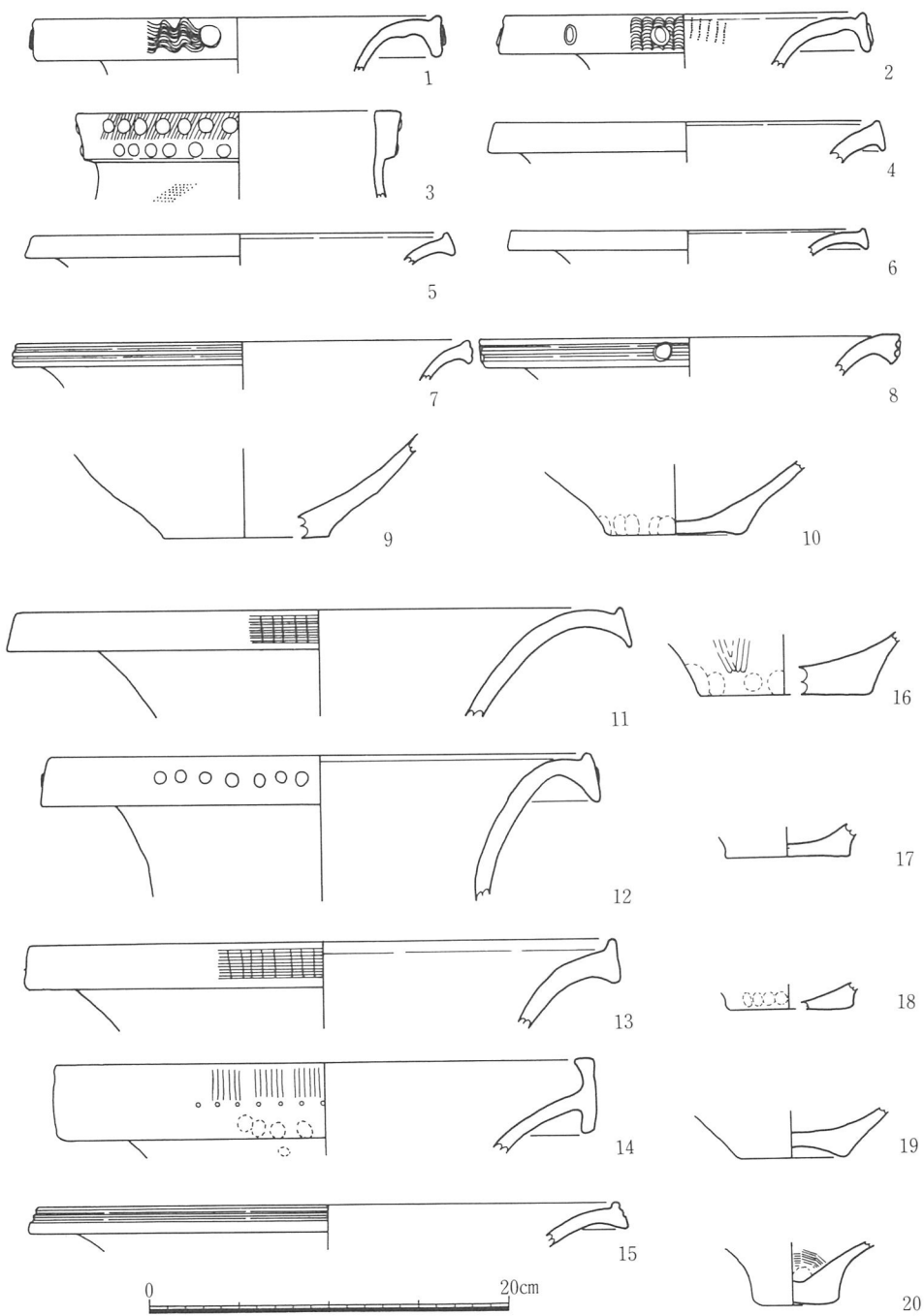
層式の2式に並行すると考えられる土器である。また、磨消縄文を伴う(14)の土器は、福田 K II式よりは新しい様相を呈しており、北白川上層式でも後出的な、3期に並行する土器と考えられる。一方、口縁端部の肥厚しない(16)の遺物は、北白川上層式というよりも、むしろ、それに後続する一乗寺 K I式に並行する可能性があり、また、(18)、(19)の遺物は、元住吉山 I式に並行する可能性がある。(20)は注口土器であるが、府下における縄文時代後期の注口土器に関して言えば、泉南郡岬町淡輪遺跡出土の資料をもとにした分類がある。この分類では、淡輪遺跡出土の注口土器、特に注口部破片を、形状によって A～D 類までの4種 (A 類：注口部根元から先端部にかけて徐々に細くなり、全体の形状が直線的なもの、B 類：注口部根元が膨らんでおり、先端部にかけて急にすぼんでくるもの、C 類：注口部根元の下方に膨らみを強くもっており、先端部が曲がりながら上向きになるもの、D 類：短い注口部をもち、先端部が曲がりながら上向きになるもの、D 類：短い注口部をもち、先端部がかなり肥厚しているもの) に分類し、またその型式の編年関係について、A 類を北白川上層 2 式、B・C 類を北白川上層 3 式以降、D 類を北白川上層 1 式に充当できるものと位置づけている (「淡輪遺跡発掘調査概要・III」大阪府教育委員会 1981年)。そして、この分類に依拠するならば、この(20)の注口土器は A 類に属することになり、また、北白川上層式の2式のカテゴリイに対応することになる。

このように、611-00 内から出土した縄文土器は、おおむね、縄文時代後期前葉から後期中葉に属するものであることが明白となったが、これら出土した縄文土器の時代性は、A-3 区自然流路内からの出土遺物、或いは A-4 区砂礫層内からの出土遺物と、ほぼ符合するものである。

縄文時代の石器・石製品 (第77図、図版73)

さて、611-00 内から出土した石器及び石製品であるが、その主なものは、第77図に掲げた通りである。これらのうち、いったいどの遺物が縄文時代固有のものであり、或いは逆に固有のものではないのか、その判断にはきわめてむづかしいものがあるが、A-3・4 区における遺構面直上からの出土遺物、あるいは自然流路335-OR 内からの出土遺物等との比較から、縄文時代に属する遺物として、そのうちの(124)～(132)、(135)の遺物をそれにあてている。(124)～(132)は、サヌカイト製の剥片もしくは剥片石器であり、風化がかなりすすんでいる。(135)は砂岩製の凹み石である (図版73-13～16・18・17・19～21、74-5)。

以上が、611-00 内から出土した縄文時代関連の遺物である。



第72图 A-4区 611-00内出土土器

弥生時代の遺物（第72～74・75図、図版67～71）

続いて、611-OO内から出土した弥生時代の遺物について、述べることにする。

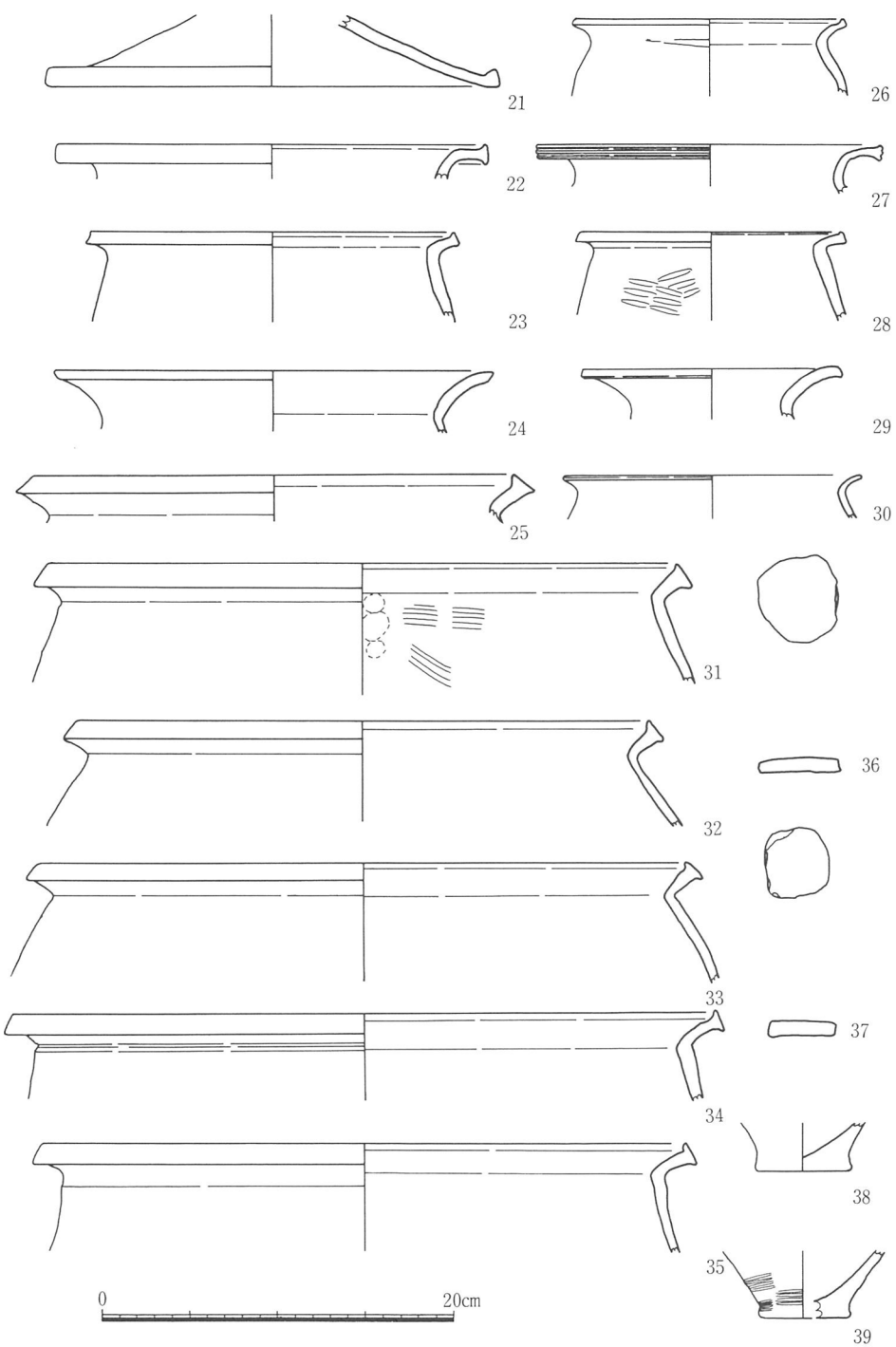
先ず、弥生時代の土器についてであるが、その主なものは、第72図から第75図に載せた通りである。

第72図は、弥生時代の壺形土器であるが、(1)、(2)および(4)～(8)は、口縁部径20cm前後をはかる広口壺形土器、(3)は短頸壺形土器（「池上遺跡」土器編 1979年 大阪文化財センター PL.80-10参照）、(11)～(15)は、口縁部径30cm以上をはかる、同じく広口壺形土器の図である。(1)や(2)のように、口縁部の外面端部に櫛描波状文を施してから円形浮文を貼りつけたものや、(3)のように、櫛描列点文の上に円形浮文を二段にはりつけたもの、(8)のように凹線文の上に円形浮文をはりつけたものなどが観察される。その他、(11)や(13)のように簾状文をほどこしたものの、(12)のように円形浮文をほどこしたものの、(14)のように刺突文を伴うもの、(15)のように凹線文を伴うものなども見出すことができる。(9)、(10)ならびに(16)～(20)までの遺物は、その殆んどが壺形土器の底部片であると考えられるが、(18)などは、明らかに河内系の胎土を有する土器である。

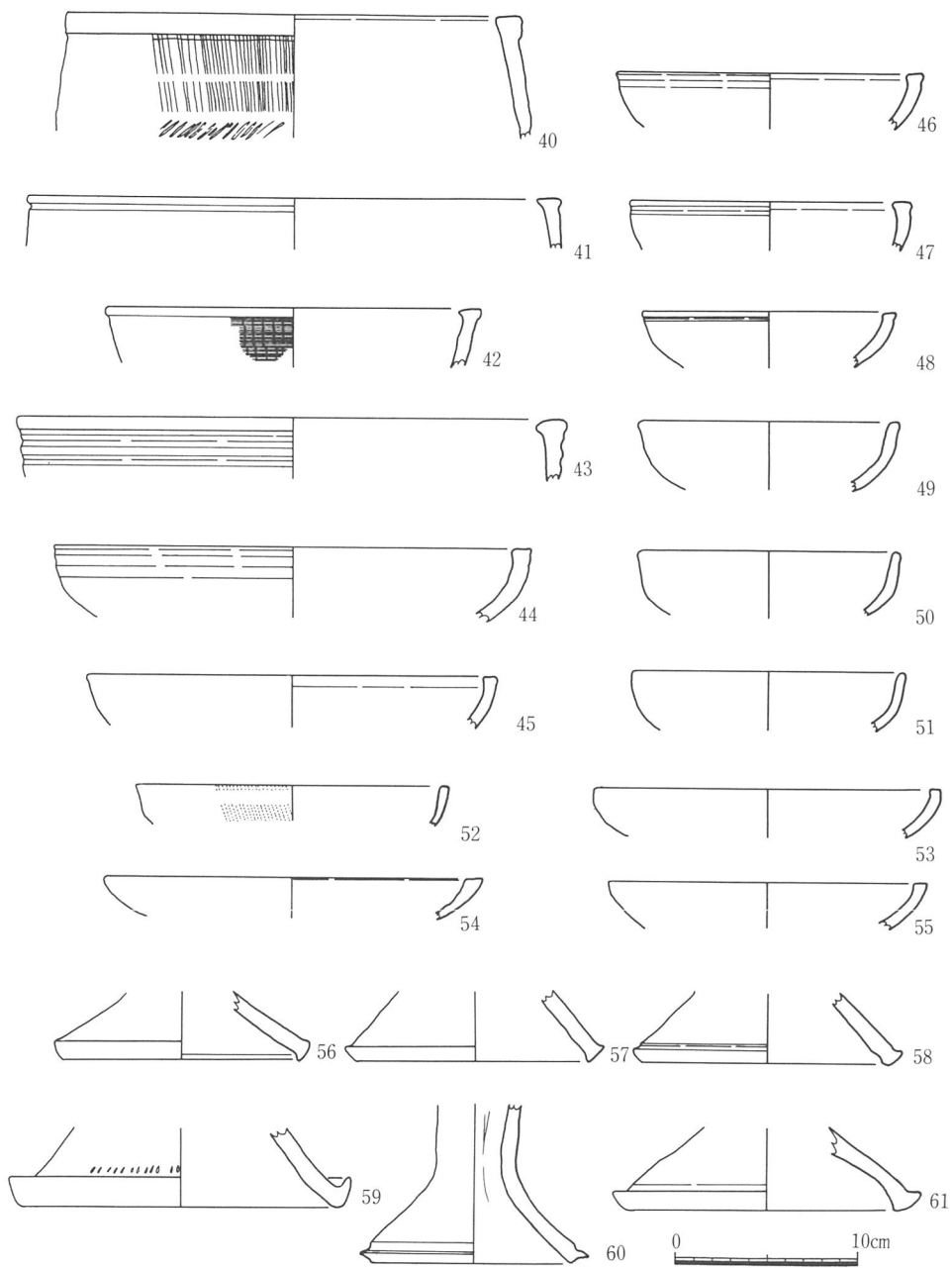
これらの土器は、おおむね、畿内第III～IV様式に属する土器であるが、ただ(20)の土器などは、より後出的な要素を含んでいる可能性がある（図版67-1・8・7・2・3、70-10。70-1～9、11-12）。

続いて、第73図は、611-OO内から出土した弥生時代の甕形土器を中心にまとめてみた図であるが、その口径規模から言えば、〈A〉(26)～(30)のように口径20cm以下のもの（小型）、〈B〉(22)～(25)のように口径20cm以上、30cm以下をはかるもの（中型）、〈C〉(31)～(35)のように30cm以上をはかるもの（大型）の、便宜上、三つの種類に分けることができる。(21)は、甕用の蓋形土器であり、(26)～(30)は小型の甕形土器(29は広口壺形土器の可能性もある)、(22)～(25)は中型の甕形土器、(31)～(35)は大型の甕形土器である。また(36)、(37)は土製円板であり、(38)、(39)は、甕形土器の底部片である。甕形土器の口縁部のタイプ分類は、その代表的なものをえらんで、同図に示した通りであるが、時期的にはその殆んどが、(27)の凹線文を伴う土器をも含め、第III～IV様式の範疇に属する遺物である。但し、(24)や(29)、(28)や(39)のタイプの土器は、或いは第V様式期に属する遺物である可能性もある（図版68-6、70-13・16・15、68-2・1、70-11・12、71-23・24参照。68-3～5、70-1～10、13・14、17～24）

続く第74図は、同じく611-OO内から出土した弥生時代の鉢形土器および高坏形土器の



第73图 A-4区 611-00内出土土器



第74图 A-4区 611-00内出土土器

代表的な類例である。すなわち、(40)～(43)は鉢形土器、(44)～(45)は高坏形土器の坏部（受皿部）、(56)～(61)は高坏形土器の脚部である。

鉢形土器の大きさについては、口径約30cm前後をはかる(40)、(41)、(43)の大型のタイプと、口径約20cmほどの(42)のような小型のタイプと二者があるが、外面は簾状文もしくは凹線文で飾られており、ほぼ畿内第III～IV様式の特徴を示すものである。

高坏形土器に関しては、坏部口径が20cmを上回るやや大きめの(44)、(45)、(54)のタイプと、口径が20cm以内におさまる、(46)～(51)或いは、(52)、(53)、(55)などの小型のタイプ（52には列点文がみられる）と双方があり、また同じ高坏形土器の脚部も、そのタイプの種類は(56)～(61)に示した通り、6タイプあって、いずれも畿内第III～IV様式の範疇にはいるものである（図版68-8、71-2・13・1・15・17・4・18・6・7・19・8・16・22・11・21・9、68-11、71-12。68-7～10、71-3・5・10・14・20）。

さて、以上に叙べたところが、611-OO内から出土した弥生時代の壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器等に関する説明であるが、これらを補足する資料が、第75図の(62)～(84)の拓影図である。弥生時代の壺形土器を中心としているが、(62)では櫛描波状文、(63)では櫛描直線文と櫛描波状文のくみあわせ、(64)、(71)では櫛描直線文がみとめられる（図版69-2、67-5、69-4）。(65)～(70)は簾状文を伴う土器であるが、文様の単位に粗密がある（図版68-9、69-9、67-10、69-8・15・5。67-11）。また(74)～(78)は、体部に簾状文を施したあと、円形浮文を精美に配列した土器群である（図版67-4・6、69-16・18）。(79)は「生駒西麓産」の土器であり、口縁端部内面に円形浮文がめぐらされている（図版70-6）。(80)も、同じく河内系の胎土をもつ土器であって、器種は無頸壺形土器であり、口縁端部外面は、円形浮文で飾られている。(72)では綾杉文が認められるが、壺用蓋形土器であると考えられる（図版70-5）。他方、壺形土器以外の土器に関して言えば、(73)は、高坏形土器もしくは台付鉢形土器の脚部であり、また、(81)～(84)は、外面に粗いタタキ痕を有する甕形土器の体部破片である（図版70-21・22）。そして、これらの弥生式土器の時期については、(62)～(80)までが、主として第III～IV様式の段階、また(81)～(84)までが第V様式の段階に位置づけられるものと判断している。

なお、611-OO内から出土した弥生時代の石製品については、第77図の(33)に示した、緑色片岩製の柱状片刃石斧一点をあげることができる（図版73-23）。

以上が、A-4区東半における土壌611-OO内から出土した、弥生時代関連遺物の説明

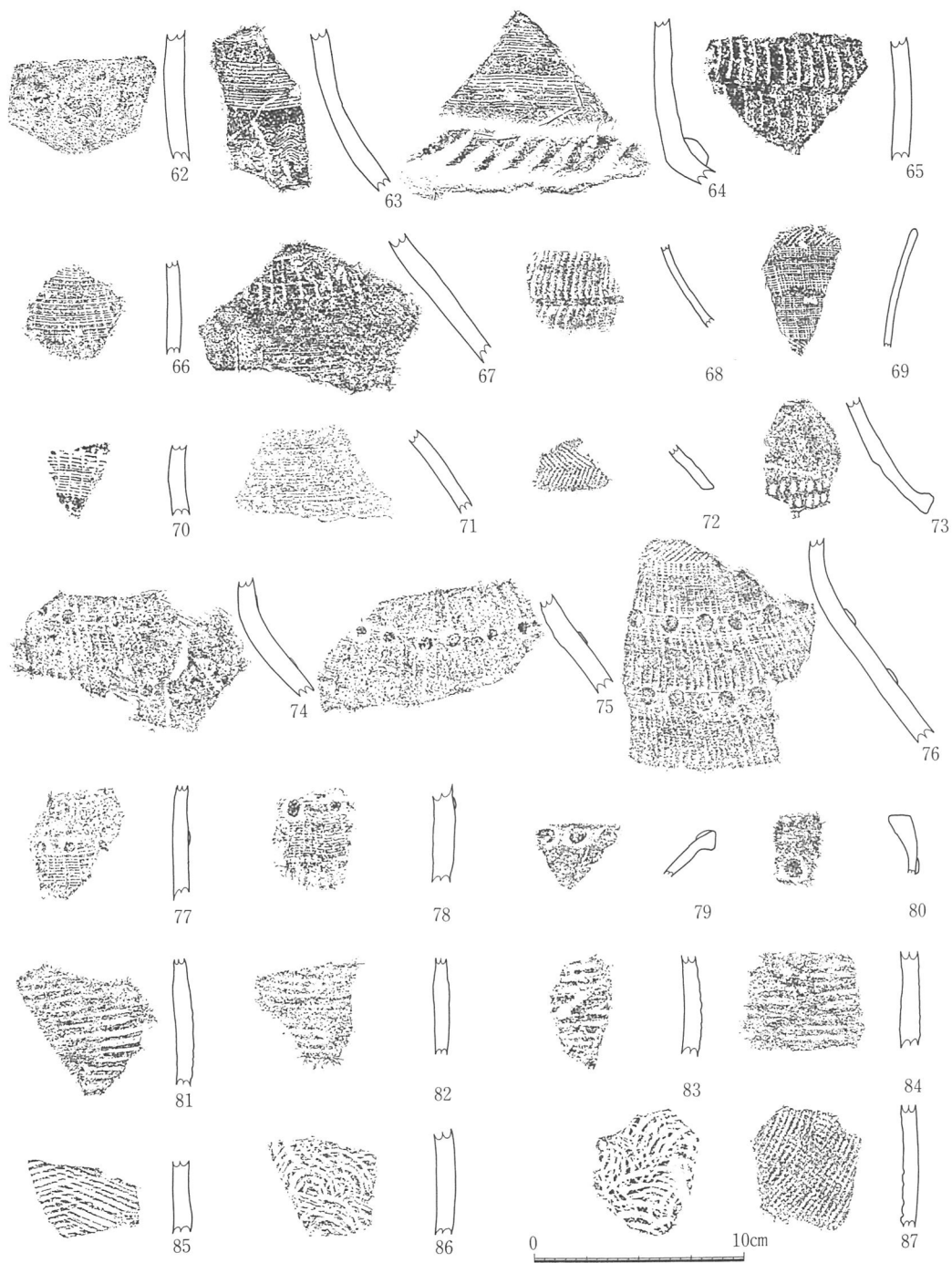
である。

古墳時代およびそれ以後の遺物（第76・75図、図版72）

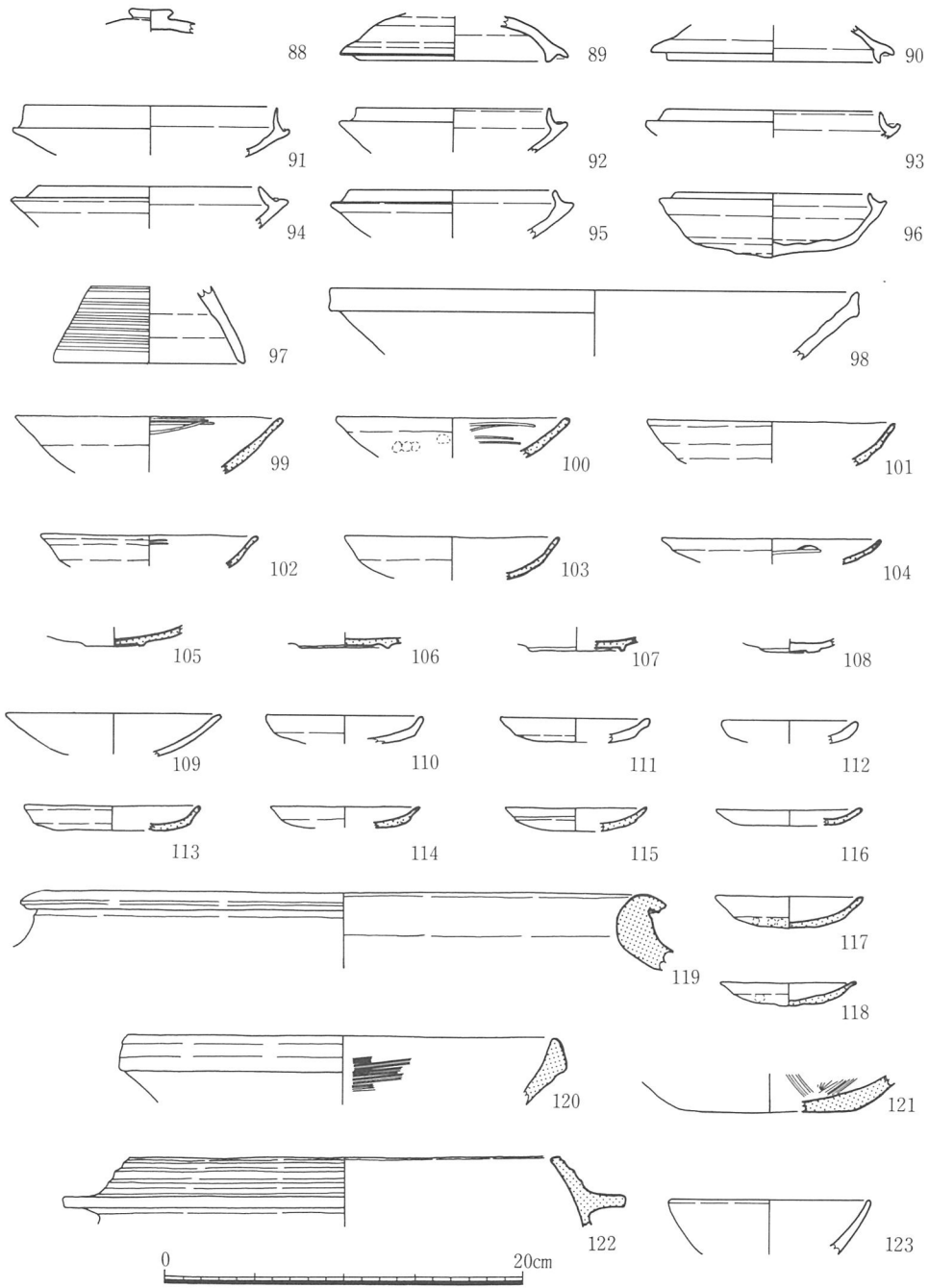
611-00の中から出土した遺物の中には、縄文時代、弥生時代の遺物のほかに、古墳時代およびそれ以後の遺物、すなわち古代から、中・近世にいたる遺物も大量に出土している。その代表的なものを図化し、示したのが、第76図の(88)～(123)の遺物、それに第75図の(85)～(87)の拓影図である。

先ず、(88)～(98)までの遺物であるが、すべて須恵質である。(88)は坏蓋のつまみの部分、(89)、(90)は坏蓋、(91)～(96)は坏身、(97)は高坏形土器の脚部、(98)はねり鉢である（図版72-1・3・2・5～8・11。72-4）。型式編年に即して言えば、(88)はIVの2、(89)、(90)はIVの1～2、(91)、(92)はIIの2～3、(93)、(94)はIIの4～5、(95)、(96)はIIの5～6、(97)はIIの1の、各々の段階に位置しているものと考えられるが、実年代としては、6世紀～8世紀代に属するものが主流である。第75図の(85)～(87)は、同じく須恵質甕の体部破片であるが、(85)のように外面のみにタタキを有するもの、(86)のように内面のみにタタキをのこすもの、また(87)のように、内外面ともにタタキ目をのこすものなどヴァリエーションがある（図版72-9、10参照）。上述の須恵器類と、ほぼ同時期に属するものと考えている。但し、(98)のねり鉢については、これは東播系の遺物であって、その時期は後述の中世遺物と同じく、13～14世紀代に属するものである（図版72-12参照）。

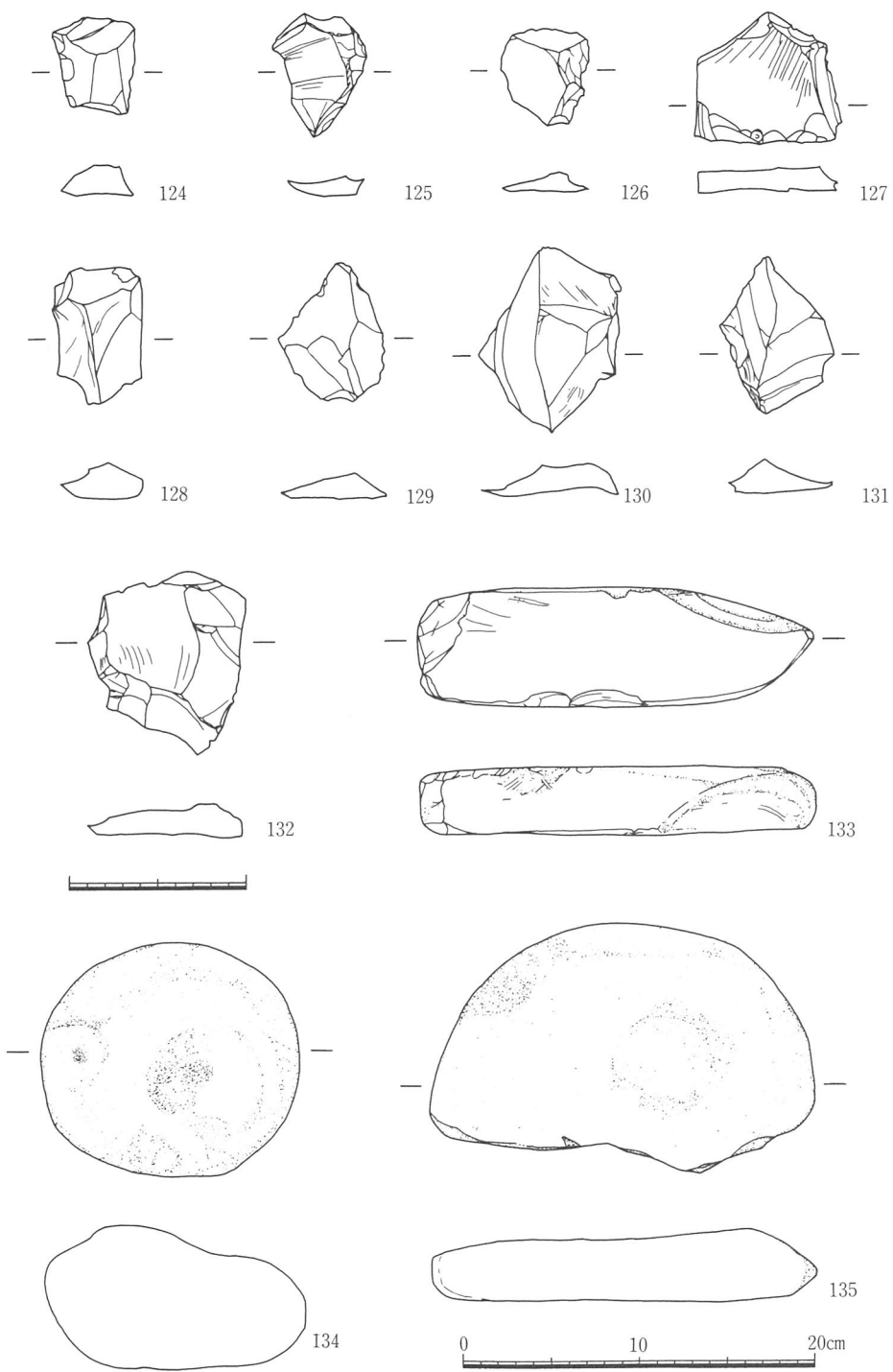
続く(99)～(123)の遺物は、主として、古代末期から中世にかけての遺物であるが、先ず(99)～(107)は瓦器碗（図版72-15・17・16）、(108)、(109)は土師器碗、(110)～(112)は土師器小皿（図版72-14、72-13も参照）、(113)～(118)は瓦器小皿である（図版72-20・18・19）。これら出土遺物の年代については、おおむね、13～14世紀代の年代を与えることができるが、殊に、瓦器碗の口径と器高との比率、暗文の状態、あるいは、底部高台の諸特徴などを総合する時、当該時期がもっとも妥当な年代であると思われる。他方、土師器小皿と瓦器小皿は、外形的には、きわめて類似した変遷を示すことで知られているが、一般に、器高が高く、ふところが深いタイプが古く、新しくなるにしたがって、口縁外面のナデと体部指押えの境界線が下方にさがり、また、丸味のあった底部が、次第に平坦化してくる現象がみられるようになるというのが一般的な見方であるが、この見地からみるならば、瓦器小皿(117)などは比較的古いタイプ、(113)、(116)などはより新しいタイプということができよう。15世紀になると、小皿の系譜をひく瓦器の小皿はほとんど姿を消すこととも相俟って、この種の土師器小皿、



第75图 A-4区 611-00内出土土器拓影



第76图 A-4区 611-00内出土土器



第77図 A-4区 611・598-00内出土石器および石製品

瓦器小皿は、瓦器壺などとも同じく、ほぼ13～14世紀の時期に位置づけてよいであろう。

続く(119)は、瓦質の甕、(120)は瓦質のすり鉢(図版72-22)、(121)はその底部、そして(122)は瓦質の羽釜である(図版72-21)が、これらの遺物は、先程の瓦器壺、土師器小皿、瓦器小皿などに比して、明らかに後出的な要素である。東播系の須恵器甕から瓦質甕への変化、須恵質ねり鉢から瓦質すり鉢への変化、そして土師質羽釜から瓦質羽釜への変化、こういった器種構成上の大きな変化は、14世紀代に生じた現象であるが、(119)～(122)の遺物は、これらの変動と軌を一にする遺物である。ちなみに、瓦質羽釜の年代基準については、堺環濠都市遺跡内の応永6年(1389)の焼土層出土の瓦質羽釜(「E類」)が重視されているが、たとえば(122)の遺物などは、この内傾化した上半部外面にヘラ状工具で段がつけられたいわゆる「E類」の瓦質羽釜と近似していて、ほぼ14世紀末葉の年代をあててよいものと思う。いずれにせよ、これら(119)～(122)の遺物は、早くても14世紀後半以降、15世紀にかけての遺物であると考えられる。

近世の遺物も数点出土しているが、(123)はそのひとつであり、磁器碗である(図版72-24)。磁器碗としては伊万里焼のほか、唐津焼なども出土している。他にすり鉢の破片なども出土している(図版72-23)。

以上が、611-00内から出土している、古墳時代およびそれ以後の遺物の代表的類例である。

II 611-00の年代について

さて、以上にのべたところが、611-00内から出土した遺物の大要であるが、今、報告したように、この大土壌内からは縄文時代、弥生時代、古墳時代、そして古代、中世、近世にかけてのかなり大量の土器、石器、石製品類が出土している。

問題は、この大土壌の時期と性格の問題である。第57図中段のA-4区東壁断面図をみると明らかなように、611-00そのものは、現耕作土よりは相対的に古い、旧耕作土上面よりきりこんでいるが、この旧耕作土内からは近年のものと思われる陶磁器片や塩焼土管などが出土している。また、実測図としては紹介しなかったが、611-00内下層においても、極く少量ながら近年の瓦片や塩焼瓦片などが出土しており、また最終的には、611-00内の底部面で、幅120～200cm前後、比高約20cmをはかる通路状のたかまりを検出(第57図下段、図版35上・36上)し、その高まり上面の数ヶ所において、簡易な枕木状のならびを観察することによって、これが遺物の全般的な出土量から言えば、きわめて低い比率を示し

ながら、とは言え、事実上は、きわめて新しい時期の土壌であることを確認したのである。

泉州は一般によく知られているように、美濃、越前、三州、遠州、淡路、備前、石州、安芸瓦などと共に、全国的にも著名な瓦の生産地であるが、特に岸和田付近で製造される和型粘土瓦（燻し瓦が多い）は泉州瓦の典型である（「建築用語辞典」技報堂 1965年、「建築大辞典」彰国社 1976年 参照）。

瓦は、その焼き方によって、大きく燻し瓦（黒瓦、銀色瓦）、塩焼瓦（赤瓦、赤褐瓦）、釉薬瓦（陶器瓦）の三種類にわけることができるが殊に、「赤瓦」に関していえば、「塩焼瓦と呼ばれる、食塩を使って焼く赤瓦が初めて作られたのは大正の終わりごろ」、そして「苦心に苦心を重ねた末、ようやく商品として市販できるようになった」のは「昭和3年頃」、「その後、赤瓦製造業者が急速に増加し、黒瓦製造業者はしだいに赤瓦製造業者へ移行して行った」こと、但し、「昭和16年」に我が国が第二次世界大戦に突入し、「その後、戦局が不利になると、経済統制は日増しに強化されるようになり、「瓦製造業界も例外ではなく、「燃料や輸送が統制され、そのうえ、働き手が兵役や徴用にとられると瓦の製造は壊滅的な打撃を受け、製造業者の転廃業が相継いだ」といった、赤瓦をも含む昭和期の瓦生産の経緯・消長の歴史を銘記しておくことも、611-00の現代史的背景を把握し、1個の土壌に現代史的意義を付すという方法論的に類似した見地にたつならば、この611-00はきわめて興味深い研究対象となる（玉置豊次郎監修・坪井利弘著「日本の瓦屋根」理工学社1976年）。

さて、地元の古老からの直接的な話によれば、結論的に言って、昭和12～13年頃、当地において、紡績工場の基礎としての煉瓦生産のために、かなり広域にわたって粘土採取がおこなわれたとのことである。地元では、かねてより、地形的な問題から、牛滝川の水を当該区への田畑にひくことがむつかしく、なんとか、水をひき易くすべく地下げすることを望んでいたが、そのおりの会社側の粘土採取という要望と地元農民側の地下げの要望とが互いを利する一石二鳥の事業ということで合致したために、特に休耕中に当地での粘土採取がおこなわれたようである。（当初、支払いは会社側から年貢によって二石とか三石とか、のち金銭による方法で支払われたとのことである。）但し、開削しようと試みた土層が、すべて粘土採取に最適の条件を備えていたかということ、必ずしもそうではなく、現実的には「一反ちがえば、土層もかわる」といわれるほどに土質の均等性は保証されておらず、何ヶ所も何ヶ所もこまめに試掘をこころみては、粘土層の厚く、良質な部分を探しあてて、そこから大量の粘土を採取したようである。ここで扱った深さ60～100cm以上もはか

る粘土層の分厚い611-00は、そういった苦勞の果てに運良く見いだされ、開削された大土壇のひとつである。逆に、折角、開削をはじめても、A-3区東半部分やA-4区西半部分のように、礫層堆積が厚くて、なかなか粘土層まで到達できない場合や、粘土層に遭遇しても、その層厚自体がきわめて薄い場合とか、或いは、何だかわけのわからぬ「かわらけ」が沢山出てくるところだとか、そういったところでの掘削はほどほどにやめて、それらの掘削土を、611-00のような良質大量の粘土の採取された「空土壇」へと投棄したとのことである。

このように見てくるならば、611-00内底部で検出された枕木を伴う通路状の高まりとは、実は、採取された粘土を木製台車に積みこんで運ぶための鉄製の細いレールをひくところのトロッコ道であり、加えて611-00内から検出された数多くのヴァライティに富んだ土器、石器、石製品のたぐいは、つまるところ、611-00周辺地域での、遺構破壊に伴う遺物の集積体であるといえることができるのである。

言いかえるならば、611-00そのものは、たしかに昭和12~13年頃の開削の痕跡であり、言わば大東亜戦争がはじまり、瓦生産がほとんど停止を余儀なくされる直前での、通常、考古学の対象とはならず、簡単に「攪乱」として処理されてしまう、単なる「大型土壇」のひとつにすぎないのであるが、但し、611-00内への埋土がどこか遠隔の地から運ばれてきたのではなく、近接区の粘土採取のための、試掘時点での排土そのものであることが明らかである以上、この中から出土した土器、石器類が、今般、調査した軽部池西遺跡の近接区の様相を具体的に投影もしくは反映していることは、まちがいのないことである。新しい土壇でありながら、この土壇を、あえて本報告書の中で詳述した理由は、まさにこの611-00が軽部池西遺跡の周辺の環境を推測せしめるのに、きわめて重要な役割を果たすであろうと評価しているからにほかならない。

以上が、大型土壇611-00に関する補論である。続いて、B区の調査成果をみることにする。(久米)

参 考 文 献

- (1)「淡輪遺跡発掘調査概要・III」(大阪府教育委員会 1981年)
- (2)玉置豊次郎監修・坪井利弘著「日本の瓦屋根」(理工学社 1976年)